
永遠のフィレーナ
5
薄望への灯火
作/首藤剛志
絵/高田明美
AM
JuJu

永遠(えいえん)のフィレーナ5 薄望(はくぼう)への灯火(とうか)

支配者デビス帝国に滅ぼされた、フィロセラの王女フィレーナは男奴隷の闘技士(バトラー)として育てられた。しかし自分の出自を知り、逃亡奴隷となって帝国の打倒を決意する。帝国のシンボルともいうべき神殿を破壊したフィレーナのうわさは、帝国各地で「フィレーナ」を名のる反乱軍を生み出した。それから3年、「嵐のフィレーナ」を倒したフィレーナは南部海岸地方で、No.2の反乱軍になっていた。(1～4巻)

しかし、息をつく間もなくNo.1の反乱軍「鯱(オルカ)のフィレーナ」との決戦が近づいていた。そして地域の帝国軍も反乱軍鎮圧のため、禁断の超兵器の使用を決断していたのだった。



アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 5

薄望への灯火

首藤剛志

絵/高田明美

AM JuJu

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

主な登場人物



フィレーナ

デビス帝国に滅ぼされた国・フィロセラ王国の王女。男として反乱集団〝狼のフィレーナ〟を率いる。



リラ

フィレーナの名目上の妻。前巻でフィレーナと別れ、ネストと行動をともにしている。



ネスト

元・闘技作家（バトルライター）。現在は地下に潜伏し、反乱地下組織の機関誌『フィエーブ』の発行人である。



バンニル

放浪の天才軍略家。通称〝はぐれ蜘蛛（くも）のバンニル〟。フィレーナに興味を持ち〝狼のフィレーナ〟に加わる。



ラズル

帝国の優秀種のエリート。だが、リラの一撃によって男性機能を失い、すべてを捨てて彼女を追い回す。

口絵さしえ／高田明美
帝国地図／道原しょう子



目次

プロローグ

海は、青かった。
だが……。
海は荒れていた。
白い浪が無数に泡だち、騒がしく怒鳴りあっている。
フィレーナは、狼犬のギャッピーとともに、いつもなんとなく足を運んでいる、灯台の遺跡のかたわらで、海のお喋りを聞いていた。
〝狼のフィレーナ〟という反乱集団は、〝嵐のフィレーナ〟を併合し四万に近い大集団になっていた。
別にフィレーナ自身が望んだことではない。
狂暴だと噂されていた嵐のフィレーナから、自分の集団を守ろうとした結果が、こうなってしまったのだ。
四万人に近い集団の指導者……。
どうしろというのだ。

　これから、どうやったら、四万人の生活を維持しながら、巨大な帝国の力と戦えるのか？

　分からない。

　まるで見当がつかない。

　頭の中が、まっ白だった。

　こんなとき、海の青さで、自分のすべてを染めたかった。

　だが、今日の海の騒がしいお喋りは、何を語りかけているのか、あまりにけたたましすぎて、フィレーナには聞きとれない。

　ただ、浪に翻弄される、一片の浮遊木が、なんとなく、自分の姿を物語っているような気がした。

　フィレーナは、四万の反乱集団を率いながら一人ぼっちを感じていた。

　いつもは、やさしさの拠りどころであるはずの海も、岸壁に打ち寄せる、今の姿を見ると、嘲り笑っているようにすら思えた。

　強風に、フィレーナの長い髪が、激しく流され乱れている。

　フィレーナは、いたぶっているとしか思えないその風の仕業に、なすがままにされていた。

　これからどうしたらいいのか……。

　これからどうなるのか。

　海も、風も、何も答えてくれそうにない。

　そして、かつてはフィホーパー（海の希望）と呼ばれた灯台も、今は朽ち果て、ただ、フィ

レーナを見下ろすだけだった。
強風はますます吹きすさび、海の荒れはおさまりそうになかった。

第1章

戦いへの波紋

帝国の辺境……。
南部海岸地方……。
さらに、その南端にサフィラ斜傾平野がある。
サフィラの南は太陽が、いっぱいに降りそそぐ蒼い海……。
北は、南デビス山岳地帯に続くサフィラ台地……。
その台地は、超古代からの自然の浸食作用に取り残されたのだろうか……切りたった崖の上だ。
そして、ついたてのような崖を背に、なだらかに海へ向かって緑の平野が降りていく。
その緑のほとんどが、豊かな甘さと香りを誇り合うさまざまな果実を実らせる果樹だった。
だれが、育てているわけでもない。
何万年もの昔から、このままだ。
いわば、ここは、自然が作った果樹園だった。
今日も、何万年前と同じ南の暖かい陽の光が、広大な緑の果樹園に降りそそいでいる。

だが、やすらいだ気分で、果樹園を見上げていくと、いきなり、切りたった崖の頂きから目を射る激しい光の照射が飛びこんでくる。
人は網膜を焼かれたような苦痛を味わい、たまらず目をそむけるだろう。
とくに陽の出、陽の入り近く、果樹園の上の崖に直角に陽の当たるころは、要注意だ。
防光眼鏡なしで、崖を見上げてはならない。
太陽を、じかに見るようなものだからだ。
そこには、崖の上の台地をとりまく光の壁があった。
いや、光の壁に見えるのは、硝子と特殊金属の合成で作られた白熱防御壁だった。
なまじの白熱光線では、この壁を破ることはできない。
むしろ、壁に反射された白熱光線で、発射した自らが傷つくのがおちだろう。
それは、南部海岸地方という帝国の辺境の地にありながら、わずか、三十年ほど前に作られた、最新型都市計画見本都市の外郭壁だった。
外郭壁の内側には、さらに、都市を守る内郭壁がある。
万が一、酸性雨、放射能雨、などの有害物質が空から降り注いだときに、上空にせりだして天蓋にもなる硝子の防御壁が、都市をとりまいていた。
晴れた日には、遠くに青く霞んだ海の見える崖の上、その都市は、海にささげられる献上盆の上に乗せられた金剛石の鏡のように見えた。
帝国人口二十万人。所属奴隷五万人。

城塞都市デビ……。

他の南部海岸地方の諸都市に比べ、けっして人口が多いとはいえないが、南部海岸地方庁の所在する城塞都市だった。

商工業、経済面では、南部海岸地方の他の諸都市にとうていおよばないが、政治、軍事面においては、まさにデビス帝国の南部海岸地方の要だといえた。

その住民構成を見れば、よく分かる。

帝国人民の数に比べ、奴隷の数が、極端に少ないのだ。

帝国内においてこんな住民構成の都市は、珍しい。

とくに、フィレーナの名を騙る反乱暴動が帝国全土に頻繁に起きるようになってからは、この都市に奴隷の流入はほとんどなくなった。

それはデビが、商工業のように労働力を必要とする都市ではなく、あくまで、政治、軍事を目的とする存在であることを如実に表していた。

たいした目的もなく奴隷を増やすのは、反乱、暴動の危険の種をまくに等しいと、デビの地方庁上層部は判断したのだ。

デビの上層部は、帝国人民としては、珍しく戦闘行為に対して拒絶反応とまではいかないものの、倦怠感に近い感情を抱いている者が多かった。

とくに、デビ建設当時を知る年長者には、それが多かった。

無理もない。

帝国の勃興以来、帝国が、完全に全国制圧を達成する二十年前の最後の最後まで帝国の最前線でありつづけたのが、ここデビの帝国駐留軍だったのだ。

帝国機密の一つになっているが、デビから高速自走車で七日の距離のところに、今はデビス帝国の軍事試験場の跡になっている地区がある。

が、かつてそこには、最後の最後まで帝国に抵抗した小都市国家があったのだ。

当時の帝国の軍事力をもってすれば、一瞬のうちに制圧できるはずの国だった。

それが、なにを思ったのか、中央は、辺境駐留軍にだけ、その国の制圧を命じた。

その小国家の名はフィロセラ……。

フィロセラの抵抗は執拗だった。

デビ駐留軍の損害も少なくなかった。

デビ駐留軍は帝国軍中枢に増援を申しいれたが、ただの一度も聞き入れられたことはなかった。

他の地方の戦いは、とうの昔に終わっていた。

やがて、南部海岸地方の中ですら、フィロセラが、抵抗していることを知るものが少なくなった。

だが帝国が、全世界制覇達成を宣言した後も、デビ駐留軍とフィロセラの戦いは続いていたのだ。

帝国全体から見れば、線香のくすぶりほども影響のありそうもないささやかな戦いだったが、

デビ駐留軍にとっては、とても笑って済ませられるようなものではなかった。
　フィロセラの抵抗は、頑強で、疲れを見せる様子もない。
　駐留軍の犠牲者は、絶えず増えつづけ、いくら兵を増員しても、穴の開いたバケツのように消えていく。
　やがて、それまで、まるで辺境の戦いを無視していたかのように見えた帝国中枢も、あまりに長引くフィロセラの戦いに無関心でいられなくなったのか、サフィラ平野を見下ろすこの台地の上に、最新鋭の技術と巨額の製作費と人員を投入して、デビ要塞都市を完成させた。
　動員された労働力のほとんどが、奴隷か、属国人で、デビ要塞都市完成後、行方不明になった。
　おそらく、機密保持のために屍体ごと消滅させられたのだ。
　サフィラ平野を見下ろす台地は、名も知れぬ無数の奴隷と属国人の墓標だといえないこともなかった。
　だが、完成された要塞都市の機能を知った駐留軍の上層部は……呆然と立ちすくむしかなかった。
　蟻の入る隙もない防御設備は、三十年前でいえば、完璧だった。
　だが、攻撃用の設備は、ほとんどなかった。
　目の上の瘤であるフィロセラなど、あまりの破壊力のために禁止されているとはいえ、超爆弾の一つもあれば、完璧に沈黙させることができるというのに、どこの戦略基地にでもいちお

う設置だけはされているその発射装置すらなかった。
目新しい攻撃用兵器は、何一つないのだ。
攻撃用兵器といえば、要塞都市のおまけのように、小型超爆弾を発射できるだけが取り柄の、「竜」という名で呼ばれる旧態然とした中型戦車が、二台配置されただけだった。
しかし、その唯一の自慢の砲身も、肝腎の超爆弾が使用禁止では、ただの飾りにすぎなかった。
デビ駐留軍には、大型、中型、小型を含めて、二百両の戦車が常時配置されている。
いまさら、超爆弾抜きの「竜」が、二台増えても物の数ではない。
……この要塞都市は、何のためのものだ？……
駐留軍上層部は、首を傾げるよりなかった。
駐留軍の目的は、抵抗を続けるフィロセラを滅ぼすことだ。
だが、いかに頑強なフィロセラでも、防御がやっとで、デビ駐留軍に攻撃を仕掛ける余力はない。
そんな敵を相手に、なぜ、これほど守備を重要視した要塞都市が必要なのか、駐留軍上層部は、理解に苦しんだ。
だが、帝国中枢は、その疑問には答えず、フィロセラ攻略を、矢のように催促してくる。
結局、デビ駐留軍は、最新鋭の要塞都市を背にしょって、そのくせ、その都市の機能は、何一つ使わずに、フィロセラに対して真っ正面から総攻撃を仕掛けるよりなかった。

フィロセラは、サフィラ平野から海に突き出した、細い半島の先端にある。

いうまでもなく、フィロセラの背後に広がる青い海は、帝国人の体質にとって、最も苦手なもので、海側からの攻撃はおよびもつかず、狭い半島を強行突破するよりない。

デビ駐留軍は、フィロセラ守備軍の放つ白熱光線の格好の標的になるのを覚悟で、軍勢の数に任せて進み、力任せに踏み潰すよりなかった。

こうして、二十年前、フィロセラは、滅びた。

フィロセラは、全滅したが、デビ駐留軍の犠牲者は、当時推定されていたフィロセラの全人口の実に三十八倍に及んだという。

しかし、この戦いの事実を知っているものは、帝国にほとんどいなかった。

帝国は、とっくに世界制覇を成し遂げ、帝国に歯向かうフィロセラなどという国は、帝国の歴史の上にあるはずがないとされたのだ。

膨大な犠牲者が出たフィロセラの戦いは、帝国機密の一部であり、サフィラ平野のフィロセラのあたりは、帝国の軍事試験場とされ、戦いの爆音も悲鳴も怒号もあくまで一般には、軍事演習のものだと思われていた。

こうして、秘密のうちにフィロセラの国は滅亡し、フィロセラの民も土地も完全に抹殺され、二十年経った今は、この付近ですらフィロセラの名を覚えているものは、ほとんどいなくなった。

だが、デビ上層部の長老格の人々にとって、二十年前の消耗戦の記憶は、まだ生きていた。

そして、帝国中枢の南部海岸地方に対する処置の仕方が、理解できなかったこともしっかり覚えていた。

彼らは、新型の防衛要塞都市を管理する上層部でありながら、この都市が、なぜ、ここに作られたかさえも、帝国中枢からいまだに知らされていなかった。

なにもかにもが、帝国機密であり、それを知ろうとすることすらが、帝国機密保持法に触れることであり、自らの破滅を意味していた。

だから、彼らは、フィロセラについては、黙して、何も語らなかった。

そして、デビ要塞都市にも「帝国の平和」が続いた。

軍事試験場は十年以上前に封鎖され、きな臭い戦いの道具は、見せ物としての闘技士(バトラー)による闘技試合(バトルショー)のほか、めったに街中では、見られなくもなっていた。

そして、今……。

忘れ物を思い出したように、帝国各地にフィレーナという名を旗印にした反乱や暴動が、起こりはじめたのだ。

*

……狼のフィレーナと嵐のフィレーナが統合された……

デビ市地方庁の上層部は、駐在帝国軍からの報告を聞いて戦慄した。

しかも、その全体の指導者は、なんと、嵐のフィレーナに比べて圧倒的に小規模だった狼のフィレーナの指導者だ。

おそらく、両集団の併合という名の下で、激しい戦闘があったに違いない。
そして、小さなほうが、勝ったのだ。
有象無象の集団である反乱軍暴徒同士の戦いにおいて、少数の群れが勝つことは、まずありえない。
それが、現実に起こったとしたら……。
デビ市駐留軍、ブロム守備司令官は、地方庁の緊急会議で、自分よりずっと年長の上層部幹部の顔を見渡しながらはっきりと言った。
「狼のフィレーナは、おそらく軍略を用いて勝った。それも、相当に優れた作戦と思われます。なにしろ、少数が、ほとんど無傷の状態で、数倍もの敵を自分の集団に吸収したのですからな。もはやこれを、有象無象の暴れることのみが目的の暴徒とは呼べません。今や、彼らは、明確に我らデビス帝国に敵対する軍隊と考えたほうが正しいでしょう」
「だが、まだ、デビの駐留軍と陣を構えて対決できるほどの勢力はあるまい？」
上層部の長老のひとりが、聞いた。
その表情は、けっして楽観しているようには見えなかった。
他の長老たちも同じだ。
彼らの反乱軍に対する真剣な態度は、本来好戦的な性質の帝国人民としては、いささか異色といえた。
その真剣さは、臆病ともとられかねないほどだった。

だが、無理はないのかもしれなかった。
長老たちの記憶のなかに、フィロセラとの戦いの痛い犠牲の記憶が、まだ、胸のどこかに確かに残っていたのだ。
狼のフィレーナという反乱集団を少数だからといって侮ってはいけない……。
かつて、小都市国家フィロセラですら、駐留軍にあれほどの被害を与えたのだ。
ブロム守備司令官は、五年前首都ボーから派遣された軍事の優秀種で、フィロセラの戦いをよく知りはしなかった。
しかし、さすがに優秀種の軍人だけに、この事態の重要性を軽く見てはいなかった。
「確かに、今の狼のフィレーナと嵐のフィレーナをあわせた勢力だけでは、わが駐留軍の敵ではありません」
ブロムは、そこまで言って、ふっと息を吐いた。
「だが、南部海岸地方には、もうひとつ手強い反乱集団がある」
ブロムは、壁の電影地図を指差した。
「反乱集団側の見方として、帝国の旧軍事試験場周辺の海岸線が、狼のフィレーナの勢力下とすれば、サフィラ平野内部の緑地帯は、ほとんど〝鯱のフィレーナ〟の勢力下といえます」
「鯱……」
長老のひとりがつぶやいた。
「昔、海に棲んでいたという、伝説の哺乳魚類の名じゃ。知恵があり、しかも獰猛で、もし

陸に棲むことができたら、獅子を押し退けて百獣の王になっていたであろうと伝説に語られておる海の猛獣じゃ」

もうひとりの長老が答えた。

「帝国以前の世界の伝説にしろ、その名を騙るということは、そやつの反乱の目的は、こざかしくも明白じゃな……」

「帝国を獅子に見立てているわけですな」

「帝国にとって代わる気か……」

「誇大妄想にすぎるが、ここまで野望が大きいと、何やら、すがすがしくもありますな」

白い顎髭をなでながら、さらにもうひとりの長老が、笑みを浮かべて言った。

「世界を獲る。ずいぶん昔に、わしらも見たような夢ですな……昼寝しながらのう」

彼らは、帝国の世界制覇の達成前を覚えている。

我こそ帝国の指導者にならんと、しゃにむに敵国と戦った青春を共有している世代だった。

「昼寝なんぞをしていたから、こんな辺境の防人ジジイになってしもた」

長老たちに、かすかな笑い声が力なく広がった。

だが、ブロムは、老人たちの思い出話につき合う気はない。

この辺境の地で、功績を上げ、一刻も早く中央の軍司令部に戻りたかった。

こんな僻地で、いつまでもくすぶっている気はさらさらなかった。

ブロムは、長老たちの話を無視して、続けた。

「おそらく、南部海岸地方の反乱集団の指導権を握るために、狼のフィレーナと鯱のフィレーナの間に戦いが起こるでしょう」

「お互い傷つけ合って共倒れになってくれれば、いいのじゃが……」

長老のひとりのつぶやきを、ブロムは、嘲り笑うように受けとめた。

「そう願いたいですがね。そうはいかないでしょう。今の狼のフィレーナと鯱のフィレーナが、正面衝突をすれば、どちらが勝とうと、双方とも多大の損失を免れない。だが、勇猛で知られる鯱のフィレーナはともかく、今まで、小勢力にすぎなかった狼のフィレーナは、おそらく策をもってして嵐のフィレーナを、たいした犠牲もなく吸収した。まさに、奇蹟的とすらいえるでしょう」

長老たちの笑い声が消えた。

いやもおうもなくブロムの話に耳を傾けていた。

「もし、今度、狼のフィレーナと鯱のフィレーナの間にその奇蹟が起こったとすれば……。

今までのほぼ倍の大軍……帝国全土の各地に出来上がりつつあるいくつかの大規模な反乱集団と比較しても遜色のない、大反乱軍になります。そうなれば……寄らば、大樹の蔭……南部海岸地方の周辺暴徒たちの集団も、こぞってその大軍に参加するでしょう」

電影地図の反乱の色分けが、一色に染められた。

「これは、南部海岸地方の帝国軍すべてにとって脅威以上の存在になりえます」

ブロムが、あえてそう言う必要もなかった。

電影地図に示された反乱軍の勢力は、南部海岸地方の駐留軍をはるかに凌駕していたのだ。
「これは、あくまで、仮定です。しかし、現実のものとならない保証はありません。現実になれば……」
ブロムの声を、長老たちは、身動ぎすらせずに聞いている。
「彼らは、次に、このデビ攻略を狙うでしょう。当然です。ここは、南部海岸地方の政治、軍事の中心ですからね」
「彼らが、いくら巨大な勢力になったとしても、この要塞都市の機能が働いているかぎり陥落する心配はない」
長老のひとりが、言った。
「そのとおりです。このデビには、ほとんど完璧ともいえる防御設備がある」
ブロムはうなずいて、話を続けた。
「われわれは、いとも簡単に、このデビを守りつづけることができるでしょう。デビス帝国の続くかぎりほぼ未来永劫、永遠にね……だが、守ることはできても、おそらく、毎日のように襲いかかってくる反乱軍を、こちらから、殲滅することはできますか？」
ブロムの言葉は、長老たちの過去の痛い記憶を刺激した。
……この要塞都市は、防御は完璧だが、攻撃能力は脆弱だ……
……フィロセラ攻略には、何の役にもたたなかったではないか……
「デビは、敗けもしないが勝てもしない……そして、帝国中枢からは、おそらく、反乱軍を撃

破せよ……との矢のような催促がくるでしょう。勝つためには、われわれは、この要塞都市から出て戦うよりない」

「帝国中枢軍の援軍を得れば……」

そこまで答えかけた長老のひとりは、首を振った。

「無理ですな……この辺境に援軍を送るはずがない」

フィロセラのとき、この攻撃能力のない要塞都市を作ったこと以外に、帝国中枢は一兵の援軍も送り込んではこなかった……。

そして、今度も、帝国中枢に方針の変更を期待できまい……。

ブロムは、うなずいた。

「そのとおりだと予想されます。中枢だけではない。隣接する他の地方の上層部も、デビに援軍を送ってはこないでしょう。反乱の勃発(ぼっぱつ)は、南部海岸地方だけではない。地元の反乱の対処におわれ、他の地区に援助する余裕(よゆう)はないと思われます」

「そんな状況下でも、われわれは反乱を鎮圧(ちんあつ)しなければならんのか……」

長老たちの胸に、フィロセラ攻略の惨状(さんじょう)が、蘇(よみがえ)っていた。

今度は、逆の攻撃される側だ。

……海という自然の防御を持ったフィロセラは、手強かった。

フィロセラは、帝国に勝つつもりはなかっただろう。

自分の国を守りたい……それだけで、あれだけの抵抗を続けた。

デビの守りは、フィロセラの比ではない。
陥落するはずのない要塞都市だ。
だが、デビの立場はフィロセラとはまるで違う。
帝国中枢から反乱鎮圧の至上命令が下るだろう。
命令は、絶対だ。
帝国の命令に背くのは、現在のデビ上層部の身の破滅につながる。
デビは、フィロセラと違い、勝たねばならないのだ。
そうなれば……。
長老たちの脳裏に、フィロセラ攻略の数倍もの犠牲者の影がちらついた。
フィロセラの存在をひた隠しに無視し、デビ駐留軍に処置を任せっぱなしにした「帝国の平和」は、長く続いていた。
だが、南部海岸地方の「デビの平和」は、わずか二十年しか続かなかったことになる。
長老たちの顔に、やるせない疲労感が漂った。
しかし、若いブロムは違っていた。
この男にとっては、中央に戻り出世の糸口にしたい、またとないきっかけに思えていた。
……この戦いで、おれは功績を上げるのだ。上げねばならんのだ！……
ブロムは、そう決めていた。
ブロムは、長老たちを見すえ、力強く言った。

「地元の火事は、地元で消すよりありません……それも、火種のうちにね……」
「火種のうち？」
長老のひとりが聞き返した。
「狼と鯱が、さらに大きな野獣になる前に手を打つのです」
ブロムは、地図を見つめながら続けた。
「近いうちに狼と鯱は、この地区の反乱集団の覇権を賭けて、必ず戦いを始めるでしょう。ふたつの大集団の戦いです。どっちが勝つにしろ、互いに無傷で済むはずがない。彼らが、戦いに疲れ、弱ったところをわれわれが叩く。いや叩くだけではない。南部海岸地方のどこかで、この地区の二大反乱軍が集まって戦うのです。一気にすべてを抹消してやってもいい」
「抹消？」
聞き返す長老に、ブロムはうなずいた。
「超爆弾という古い兵器の名前をご存じでしょう」
長老たちが、知らぬはずがなかった。
フィロセラ攻略のとき、デビ駐留軍上層部は、何度、帝国中枢に超爆弾の使用を申請したことだろう。
超爆弾の閃光が南部海岸地方に一回でも爆発すれば、フィロセラは、一瞬のうちに灰と化し、あの忌まわしい攻略戦の犠牲者などひとりも出さずに勝てたはずなのだ。
たとえ、超爆弾の後遺症で、フィロセラのあった半島が、何百年も不毛の地になったとして

も、もともと、海は苦手な体質の帝国人民(エンパイアラー)なのだ。
僻地の海岸線が、使用不能の不毛地帯になろうと、帝国にとって、どれほどの影響があるというのだ。
だが、再三の申請にも、帝国中枢は、超爆弾の許可をデビ駐留軍に与えなかった。
それが、戦いを長引かせ、駐留軍の犠牲を大きくした。
長老たちの胸に残る無念の情は、フィロセラの戦いに超爆弾を使えなかったことも手伝っていた。
「超爆弾は、もはやわが帝国にとって忘れられた兵器といっていい。いまさら、帝国中枢が、使用を許すはずもあるまい」
長老のひとりが、虚(うつ)ろな口調でつぶやいた。
「しかし、事故は、どこにでもあるものです」
ブロムは、あっさりと答えた。
「かつて、デビス帝国の北部山岳地帯で、巨大な爆発が起こり、帝国に反旗を翻(ひるがえ)した属国軍が全滅したことがあった。帝国は、隕石(いんせき)落下による爆発らしいと発表したが、超爆弾を知る者は、だれもそれを鵜(う)呑みにしなかった。あれは、明らかに超爆弾を、帝国のだれかが使用したんです。そう、発射装置の押し間違い一つで、事故はどこででも起こります」
「事故を起こす勇気のあるものがいるかな？」
「もちろん、これはわれわれと反乱軍の戦いが、最悪の事態になったときの事故です。それで

も、長期戦になった場合のわれわれの犠牲を考えれば、事故が起こったほうがましかもしれません」

……そう、フィロセラのときも、そんな事故が起きればよかったのかもしれない。

ブロムの話を聞きながら、長老たちの何人もが、そんな思いに駆られていた。

フィロセラとの戦いの当初ならともかく、今は、防御設備を誇るデビ要塞都市がある。超爆弾の後遺症が、いくら激しくとも、この都市なら、耐えられるはずだ。

「事故か……」

長老のひとりが、噛みしめるように言った。

「だが、彼らは、本当にひとつの場所で戦いを始めるだろうか……」

他のひとりが水を差した。

「彼らが、一カ所に集まったところを、まとめて一度にやらなければ、効果はありませんぞ。事故は、二度も三度も起こりはしませんぞ」

「彼らが平和的に、話し合いで同盟、合併したらどうなります？　まさか、彼らの全兵力が集まって祝賀会を開くはずもありますまい。それこそ、帝国の餌食にしてくださいと集まるようなものですからな」

「狼と鯱は、必ず戦います」

ブロムは、きっぱりと言い切った。

「互いの勢力が同程度の場合、覇権を握るには戦いしかありません。話し合いによる同盟は、

必ず崩れる。たとえ、帝国という共通の敵がいようとも、いつか、必ず亀裂が生まれる。亀裂は、陰謀と裏切りを呼び、覇権者は、枕を高くして寝られない。……いつの世もそうです。両雄は、平和的には並び立たない」

ブロムは、長老たちを見回し、さらに続けた。

「いまさら、経験豊かな皆さんに、歴史を語るのはおこがましいが……古来より人間が、相手に従うときには、歴史的な原則があるといわれています……それは、相手に勝てそうもない圧倒的な力の差があるときか、もしくは、相手に利用価値があるか……その二つにひとつです」

そこまで言って、ブロムの頭の奥に、ふっと別のことが浮かんだ。

……利用価値？……利用価値ねえ……

ブロムの考えたのは、この要塞都市のことだった。

……この要塞都市は、帝国にとってどんな価値があるのか……この仰々しい防御設備はなんのためだったのか……まさか、こんな反乱の起こるのを予測したわけでもあるまいに……

しかし、ブロムは、それ以上、考えるのは止めにした。

今は、この腰抜けのジジイどもを説得しなければならない。

超爆弾の使用だ。

少なくとも「竜」の発射できる小型超爆弾の使用は暗黙のうちに認めさせなければならない。

「狼のフィレーナと鯱のフィレーナの戦いは、必ず始まります。狼のフィレーナと鯱のフィレーナは、互いに自分の力を、とことん、どちらが能力があるか見せつけ合わなければならない

……でなければ、相手はおろか味方すら、この二人のどちらが覇者になろうとも、心から従おうとはしないでしょう」

ブロムは、捲くしたててから、ふっと息を吐いた。

そして、力強く言った。

「彼らは、戦います。そして、彼らの息の根を止めるのは、われわれデビ要塞都市の駐留軍です」

長老たちは、熱い期待をもった眼差しで、この若い司令官を見つめた。

フィロセラ攻略戦の、あの煮え繰り返るような行き場のない怒りが、この男によって、晴らされるような気がしたのだ。

ブロムは、長老たちの雰囲気に手応えを感じた。

ブロムは、帝国中枢の意向に逆らってまで、超爆弾の事故を起こす気はない。

事故の責任を取るのは御免だ。

事故の責任は、戦いに嫌気のさしている長老たちのだれかに取ってもらう。

どうせ、余命いくばくもない老人たちだ。

戦いの早期終結を願って、事故の責任をしょい込み、発射装置を押してくれる古風で犠牲的な英雄気取りのおいぼれが、ひとりでも出てくれればいいのだ。

後は、そいつの責任を問いつめ首を切り、しかし、反乱の鎮圧の功は、ブロムにあり、超爆弾で不毛の地になったこのあたりに、もはや、駐留軍の必要はなくなる。

そうなれば、自分は、帝国軍の中央に戻れるはずだ。

ブロムの、目指すものは、反乱軍の平定でも、南部海岸地方の治安維持でもなかった。

中央への復帰……。

そのためには、帝国の僻地のひとつが灰になろうと、かまわなかった。

＊

南部海岸地方という辺境の反乱の動向だったが、狼のフィレーナが、数倍の規模を持つ反乱軍、嵐のフィレーナを併合したという報せは、反乱情報組織「ラ・グランデ」によって、帝国全土の反乱組織に流れた。

その情報の要ともいうべき秘密情報誌『フィエーブ』を、電話回線を細工して各地に送っていたたったふたりの編集局に、今、じわじわと、首都警察の捜査の手が近づいていた。

帝国の首都、ボー……。

浮浪者たちの地区、メガデラシーナを見下ろす丘の墓地で、狼のフィレーナの情報を送り終えたネストは、身に近づいた危険など気にした様子も見せず、空になった酒の瓶の口をいとおしそうに嘗めながら、つぶやいた。

「南部海岸地方か……飲みたい気分だな」

……よく言うよ、このおっさん。

……警察の絨緞捜査が始まれば、二人は、ひとたまりもなく、この世にさよならだっていうのに……

　リラは、溜め息をつくのも疲れ果てた様子で言った。
「切り離してくれません？　南部海岸地方と、飲みたい気分の間にある点々、点々、点々をはっきりと……」
　ネストは、微苦笑を浮かべた。
「今日の飲たい気分は、いつもと違うかもしれない」
　そして、携帯通信電算機を見つめながら、
「この狼のフィレーナってやつ、どう思う？」
「狼だの、虎だの、狸だの、動物の名をつけたフィレーナは多いわ。ほんと、何とかさんのフィレーナが、多すぎる。狼のフィレーナだって、有名どころの同姓同名さんが、帝国中に百以上いるんじゃない？　酔っ払いのフィレーナてのは、あんまり聞かないけれどね……」
　リラは、肩をすくめた。
「昔は、狼って聞くと、あの人じゃないかって、気にはなったけど……」
　そう言って、リラは携帯通信電算機を覗きこんだ。
「ふ～ん……南部海岸地方の狼のフィレーナ……えらく僻地で、あんまり、今まで目立っちゃいない人たちね……」
「ああ、派手な戦いはしていない。だが、今回は、ほとんど無傷で、両方合わせて、四万近い大軍に併合した。……南部海岸地方で狼のフィレーナで、どうやら、殺し合いが好みじゃなさそうだな。このフィレーナは……」

「うん……」
リラの指は、携帯通信電算機の操作鍵盤上をすばやく動いていた。
……狼のフィレーナ……
そう、打ち込むと、同名のリストが、ずらりと並んだ。
確かに、リラの言うように、その数は、百を越えた。
……南部海岸地方……
条件に、地域を加える。
八つに絞られる。
「それでも八つあるわ……どれが、今度のフィレーナなの……」
「選択条件に、長い髪」
ネストがつぶやく。
五つに減った。
「どれも、小さな集団だわ」
「つい昨日まではな……選択条件を加えろ。身長が、男にしては低い」
「チビ……ね。ひどい、言われかた……」
二つに減った。
「どっち？」
「犬を連れている」

リラは、犬という選択肢を携帯通信電算機に打ちこんだ。
たったひとつだけ、狼のフィレーナが残った。
「資料を出すわ……」
リラは、唇を一度嚙みしめてから、操作鍵盤を押した。
……詳細な資料なし……
続いて、赤文字が浮かびあがった。
……最新情報。南部海岸地方、嵐のフィレーナ（総数……約三万四千人）を併合、約四万の南部海岸地方で鯱のフィレーナに次ぐ大集団になる……
「この人ね……今日の話題の主は……」
リラの声は震えていた。
もう、リラは、そのとき、確信していた。
この街で、別れてから生死も分からず、三年……。
フィレーナ……そう、この名前を、つぶやかなかった日があったろうか。
あまりに、ありふれていて、嫌というほど耳にした名前……でも、リラのつぶやくフィレーナはたった一人のフィレーナだ。
ネストは、空を見上げながら、ふっと酒臭い息を吐いた。
「資料不足なら、加えておくことだな……連れている犬の種類は、狼犬……。愛用の中型剣の名は、その名と同じフィレーナ……」

「この人の資料ならもっと、私、書き込めるわ」
リラの瞳から涙がこぼれ落ちた。
「止めとけ……その資料が、帝国の手に渡ると、これからのフィレーナがやりにくくなる」
「うん……それより、したいことがあったわけよね……」
「ん？……」
「飲みたいんでしょ……遠くにいるフィレーナと……」
リラが、いたずらっぽく言った。
「あいつは、飲めない体質だったがね」
「じゃ、私が、代わりにつきあうわ……私だって飲みたい気分……」
ネストは、肩をすくめた。
「酒中毒警報装置から、お許しが出たんじゃ、飲まないわけにはいかんがね……あいにく、これだ」
酒瓶を逆さまにして、底を叩いてみせた。
「買ってくるわ……」
リラが、立ちあがった。
「金もないのにか？……」
二人は、本当に着のみ着のままだ。
リラはにっこり笑った。

「あるとこにはあるのだ」
リラは、服の胸元の縫(ぬ)い目を、ほぐした。
硝子(グラス)硬貨が、数個出てきた。
良質な高額硬貨だ。
「女のたしなみってやつ……」
「そう、私を女だと感じて、一度でも抱く気になったら、気がついたかもしれないね……お金の秘(かく)し場所……」
「子供は言ってろ……」
ネストは、あお向けになって、空を見つめた。
「子供かどうか、飲めるとこ見せてやる。これで、酒屋で買える最高に高い酒、買ってくる」
「あ……それは困る」
ネストが、あわてて、リラに言った。
「高い酒はいらん。三級の合成酒でいい」
「この期におよんで、節約しちゃうわけ」
「いや、三級でいいから、持てるだけ何本でも買ってきてくれ」
リラは肩をすくめた。
「質より量かあ……ま、酔っぱらうのはおんなじだもんね」

リラは、硝子硬貨を握りしめて、墓場に、いちばん近い酒屋に走っていった。

＊

メガデラシーナは、酒中毒と薬中毒の巣だ。
どこの大都市の浮浪者街でも見られる光景だが、酒屋の店先には、簡易テーブルが置かれてあって、稼いだのか、盗んだのか、それとも拾ったのか、訳の分からない小銭を握りしめた男女が、一杯の潤いを求めて、昼間からたむろしている。
酒だけが目的だから、他人には語り掛けもせず、ひたすら飲みつづけている。
そして、酔い潰れ、倒れる。
それだけが人生のような人々だ。
酔ってどんな夢を見ているのか、それは、本人以外、だれにも分からない。
酔いが覚めると、本人すらそれを忘れている。
ただ、夢の感触だけはどこかに残っていて、それを求めてまた、酒を口に運ぶ。
夢に漂うとき、そこに時間の流れも季節も、むしばまれていく自分の身体もない。
やがて、気がつかないうちに、死んでいける。
こんな人々を見ると、もしかしたらこれこそが、幸福なのかもしれないなと、リラは、ときどき、羨ましく思うこともある。
本来なら、夢も希望も持てないはずの奴隷だったリラだ。
それが、フィレーナに会ってから、何かが、大きく変わってしまった。

夢とか希望とか、そんな大袈裟なものではないかもしれないけれど、なんだか、訳の分からないものをしょいこんだ気がする。

少なくとも、奴隷のときには考えたこともなかった、生きたいって気持ちとか、自分を大切にしたいとか、相手のことを心配するとか……私、口うるさいかもしれないけどさ……あの酔っ払いのおじさんの身体のことだって、ほんと、心配してんだから……。

自分の身体のことだってどうにもならない奴隷だった私が、他人様の身体を心配するなんて、偉そうというか……けな気というか……ともかくひと味、違ってしまった私なんだ……。

だからなおさら、奴隷でもないのに、わざわざ命を粗末にして、酔っ払って自分の夢の中にひたりきっている人を見ると、贅沢だなと思うし、羨ましいとさえ思ってしまうのだ。

この街には、酔って暴れる酒中毒者はいない。

そんな、危険で傍迷惑な酔っ払いは、とっくに病院に連れていかれ、処分されてしまうと聞いている。

だから、この街で見かけるのは、ちょっと臭い匂いはするが、風景としての酔っ払いたちの群れだ。

しかし、その群れの一つ一つが、それぞれ、だれにも語られることもない違う夢に溺れて、朽ちていく風景画だとしたら、夢の残骸の中を歩いている私は、どんな夢色で、風景されているんだろう……。

リラは、そんなことを、ほんのちょっとだけ思いかけて、あわてて首を振った。

違う。違う！　今は、そんなことでここを歩いているわけじゃない。
今日買うお酒は、お祝いなんだ。
フィレーナが生きていて、南部海岸地方で、頑張っているらしいことが分かった乾杯のお酒なんだ。
リラは、ネストに言われたように、三級の合成酒を抱えられるだけ五本、買った。
でも、めったに飲まない自分が、この酒で、ネストとつきあい酒するのは、とってもみじめな気もした。
だから、かなり迷った末、エンペリアル・ベスト・スペシャル・セレクトという、長い名前の、その酒屋ではいちばん値段の高い酒の小瓶を、一本だけ、自分用に買った。
酒屋から、出かかったとき、いつもなら何も喋らず黙々と飲んでいる中毒者たちの話し声が、耳に飛び込んできた。
「ブキーガナ地区の方向から始まったそうだ……絨緞捜査がな」
……絨緞捜査！……
リラの足は釘づけになった。
「なんの絨緞捜査だよ……」
もつれた中毒者たちの口ぶりだが、リラには一言一句聞き逃してはならない言葉だ。
リラは、絨緞捜査の目的を、嫌というほど知っている。
反乱秘密情報誌『フィエーブ』を検挙すること……。

しかし、検挙は名目で、捜査にあたる警察隊は、上層部の指令に反して、抹殺をもくろんでいる。

つまり、ネストとリラを殺すつもりだった。

「知るけえ」

中毒者の一人が、ワンカップの酒をあおり呑んで答える。

「おれたちを捜しているわけじゃねえことは確かだ。けど、みんな、大騒ぎさ」

「ああ、おれたちゃなにも悪いことはしてない……ただ、酒食らって落ちて、ここでのんびり生きてるだけだ。けど、叩きゃほこりが出て、ここに逃げこんだやつもわんさといるさ。そいつらが、あおりを食らって片っぱしから取っ捕まっちまう」

「おれあ、叩いても、アルコールしか出てこないぜ」

「それが、問題よ……怪しいと思われて、三日も牢屋で調べられてみろ。その間は、酒抜きだ、分かるか？　三日だぞ……」

中毒者の間に、どよめきとも溜め息ともいえない呻きが広がった。

「酒の禁断症状が起こっちまう……」

「酒が切れたら、おれたちはどうなるか分からねえ……たとえ牢屋の中だろうが、酒欲しさで、暴れだす。幻覚が出て、頭がおかしくなる。訳も分からず自殺するやつもでてくる。そうなりゃ、何も悪いことはしてなくても、病院送りで、処分さ」

中毒者の一人が、手の平で、首を切る真似をした。

「これか……」

もう一人がうなずく。

「ああ、そこまでいかなくても、頭に何か埋めこまれて、夢も見ることのできない脳味噌に作り変えられてしまう」

「脳改造ってやつか……酒を飲みたいって気持ちまでなくなっちまうんだろ」

「おれなんか、酒で肝臓やられて、どうせ、もうすぐ死ぬんだ。飲みながら死にてえなあ……」

「酒や薬中毒で、病院送りにされ死ぬやつばかりじゃないぜ。ここに逃げ込んだ犯罪者や、ゲリラごっこしているやつらは、それこそ死に者狂いで抵抗しやがる。警察と一戦まじえて、その流れ弾で、まきぞい食ってくたばるやつもいる。なんせ酔っ払って、逃げ足も、もつれるだろうからな……」

「酒や薬にゃ税金かかってんだろ……優良納税者のことも考えて欲しいよなあ」

「他の国民税や首都税は、払ってねえんだ。文句は言えねえよ」

「ここいらの絨緞捜査は、いつごろになるかな」

「ま、一週間か、遅くても十日……ってとこだろな」

「酔ってるおれたちに、勘定できるか、日にちが……」

「とっつかまったら、それだけ時間が経ったってことさ」

「じゃ、心残りのないように、今のうちに飲んどこう」

いきなり、酒屋の親父が怒鳴った。
「今日から飲み代の貸しはなしだぜ。そういうことならな」
「おいおい……」
酔っ払いたちに、どこかあきらめきったどよめきと笑いが起こった。
リラは、酒瓶を抱えて、店から出た。
……あと一週間から十日……
あの墓場がやっぱり私たちの最後の逃げ場になるんだろうか……。
せっかく、フィレーナらしい人が、生きていると分かったのに……。
お祝いなのか、お別れの酒なのか……。
どっちにしたって、私用に、高いお酒を買ってよかったわ……。
いよいよ、最後だっていうのに、安いお酒で酔っ払ってたまりますか！
早く、飲もう……うん！
リラは、墓場に向かって走りだした。

＊

ラズルは、メガデラシーナの安宿の二階の一室で、鏡に映っている顔を見つめていた。
……いよいよ、顔まで自信がなくなってきそうだ……
リラに蹴り上げられた顔が、風船のように脹れあがっている。
数年前、官界の若きホープとして、実力はともかく容姿で選ばれ、美人女優と並んである週

刊誌の表紙を飾ったこともあるラズルである。
顎の痛みは、鎮痛剤代わりの麻薬で和らいでいるものの、おそらく骨が外れているか、折れているのは確かだった。
世間に対して秘密の多い税務局から、無断で消えたラズルは警察から追われる身だ。
下手に医者に治療に行くわけにもいかない。
……それにしても二度も、女……それも、あんな子供にしてやられるとはな……
鏡の中の顔に、歪んだ笑いを映し、自嘲するしか、今の気持ちを表しようがなかった。
そのときだった。
鍵を掛けたはずの部屋の扉が、いきなり蹴り開かれた。
中型剣を持った警察官が、飛び込んできたのだ。
それも三人……。
……おれを捕まえにきたのか……
「首都警察だ。身分証明書を見せろ」
……そうはいかん。いってたまるか……
だが、ラズルは、そんな気持ちを寸分も表に表さなかった。
「乱暴だな、身分ならもちろんある。おれは、属国人でも奴隷でもない」
ラズルは、落ちついた態度で、ベッドの上の鞄を開けた。
ゆっくり鞄の中に入っていったラズルの手を見ていた警察官のひとりは、注意していても、

次の瞬間、生きていなかった。

鞄のなかに入れてあった硝子短剣から発射された白熱光線（ホワイトレイ）が、鞄の生地を突き抜けて、いきなり警察官の額を撃ち抜いたのだ。

他の警察官も、呆然としている暇（ひま）はなかった。

ラズルの取り出した短剣が、もうひとりの喉（のど）をあっという間もなく切（き）り裂（さ）き、残りの一人に迫っていた。

警察官は、剣で受け止めるのがやっとだった。

ラズルが、もうひと突きすれば、その警察官も生きてはいなかっただろう。

だが、ラズルにそんな余裕はなかった。

ラズルは、短剣を引くと、窓に体当たりして、外に飛び出した。

宿のひさしを転がり落ちるように、路上に降りる。

ふーっと、荒い息を吐きながら、ラズルは、途方にくれた。

……確かにおれは追われている。税務局を無断で辞めたおれは、この首都の不透明な部分をよく知っているがゆえに、他にそれが漏（も）れると危険だ。

だから、警察が、おれを追うのはよくわかる。

おれを捕まえて、病院に入れ、脳にそれなりの処置をして黙らせたい税務局の気持ちもわからないではない。

だが、どうして、おれの居場所がわかったのだ。

しかし、当惑している暇はなかった。

さっきまでいた部屋の中から、警察官の携帯警笛のかん高い音がした。

まわりの建物から、ぞくぞくと警官たちが飛び出してくる。

……こ、こんな馬鹿な！……

……たかが、無断で消えた税務局員のために、この警察官の数は何だ？……

ラズルは、それが秘密情報誌『フィエーブ』のための絨緞捜査とは知らなかった。

だが、すでにラズルは警察官の二人を殺している。

何の捜査であろうと、警官殺しには違いない。

その場で射殺されても仕方がない。

安宿の前の道に、あふれかえらんばかりの警官の数だ。

逃げようもない。

ラズルは、がっくりと肩を落として立ちすくむしかなかった。

そのときだった。

いきなり目の前の建物の三階から、警察官たちに向かって何かが落ちてきた。

「伏せろ！」

だれかの声が、建物から聞こえた。

警察官たちの真ん中で、爆発が起こった。

硝子手榴弾だった。

建物の蔭から、よれよれのコートを着た男が飛びだしてきて、ラズルの手を引っ張った。
「こっちだ！」
男は、安宿のそばの細い隙間を駈け抜けていく。
ラズルはついていくよりない。
見知らぬ横町をこまねずみのように、どれほど走り回ったことだろう。
気がつくと、狭い路地から広場を見通せる飲み屋の裏口に来ていた。
男は、立ち止まり、ふっと深い息を吐きだすと、裏口に積み上げてあった、空の酒瓶の山から、飲み残しのある瓶を探しだした。
一口、喉に流し込むと、ラズルに差し出した。
「助かったよ……どこのフィレーナだ？」
ラズルは何が何だかわからず、答えに窮した。
「まあ、どこのゲリラに属していようと、こうなっちゃ同じだけれどな……ともかく、あんたが先に騒いでくれたんで助かった。おれもあの宿屋に隠れていたんだ」
「隠れていた？」
男はうなずいた。
「昨日から始まった絨緞捜査で、この町に潜んでいた反帝国ゲリラがつぎつぎにいぶりだされた。おれたちのフィレーナは全滅だ。あんなところに隠れているようじゃ、おまえさんとこも同じだろう……」

「フィレーナ……」

いくら税務畑のラズルでも、フィレーナが、帝国の各地で、暴動や、反乱を起こしている輩の合言葉的なあだ名なのはよく知っていた。

「そうか、フィレーナの暴徒を捜査していたのか……」

ラズルは、初めて、自分の早とちりに気がついた。

「いや、おれたちよりも帝国警察の狙いは、『フィエーブ』らしい。ま、どっちにしろ、絨毯捜査がありゃ、いぶりだされる運命は、おなじだけれどね……いままで、やらなかったのが不思議なくらいだ」

……まったくそのとおりだ……と、ラズルは、いまいましさを通り過ぎて、ただ呆然と思うしかない。

……なにも、おれが、逃げているときにやらなくったっていいじゃないか。

……あの娘に、蹴上げられてから、運まで潰されてしまったらしい。

ラズルの顔に、歪んだ笑みが浮かんだ。

ラズルの微笑の意味など知るはずもなく、男も笑い返し、言った。

「いずれ、おれたちは、追い詰められ拷問された末、殺されるだろう。その前に、いっちょう派手にやらんか？」

「しかし、おれは……」

「いまさら、グループが違ったたって終わりは同じさ。それとも、仲間とおちあう場所でもある

のかい？」

「いや……」

「じゃあ、咲かそうぜ。死に花をよ……一人より、二人のほうが、賑やかでいいや。なあ」

男は、ラズルを首都ゲリラのどこかの集団の一人と思い込んでいるらしい。

「武器なら、使いきれないほどある」

男は、着こんでいたコートの前を広げた。

内側に、数本の硝子剣と、ひと目では数えきれないほどの硝子手榴弾をぶらさげている。

「隠れ家から持てるだけ持ってきた」

「しかし、おれは……」

もう一度、ラズルは同じ言葉を繰り返した。

しかし、男は、二の句をつがせず、広場の向こうを見詰めて言った。

「あそこに銀行があるだろう。都合のいいことに、今日は軍隊の給料日だ。振り込まれた給料を出しに、やつらの家族がいっぱいいるに違いない。いつも狙いをつけていたが、警備がきつくて爆破できなかった。けど、死ぬ気でやりゃあ別だ。やつらの家族と給料を消してやろうぜ」

「家族を殺す？」

「帝国だって、反乱とフィレーナの名がつきゃ、家族皆殺しにしやがる。おれだって、女房、子供を道端に吊るされた。目には目を……歯には歯を、家族には家族さ」

男は、中型剣と手榴弾を二個、押しつけるようにラズルに渡した。
「さ、追手が来ないうちに、華々しくぱっと散ろうぜ……な、同志」
ラズルは黙って、中型剣の先を男の胸に向けた。
「ん?……」
男は怪訝そうな表情を見せた。
だが、そのままの表情で、白熱光線を浴びて消滅した。
白熱光のエネルギーは、手榴弾と別種で、誘爆は起こさない。
「男と心中は御免だ」
ラズルは、持って歩くには嵩張る中型剣を捨て、手榴弾をポケットに捩じり込むと、走り去った。
だが、絨緞捜査で追い込まれていく先は、遅かれ早かれ、このメガデラシーナでは、丘の上の、無名墓地しかなかった。
ラズルに限らず、絨緞捜査でいぶり出された脛に傷持つ者や、警察隊と無謀に戦った反乱暴徒の生き残りは、そのほとんどが、墓地に向かっていた。
それは、帝国警察の狙いでもあった。
『フィエーブ』のメンバーを生け捕りにしろという指令以外は、その墓場を彼らの、文字通り無名墓地にするのに、警察隊のだれもが異存なかった。
だが、生け捕りにしろという指令には不満があった。

『フィエーブ』が、たった二人でなりたっているとは、警察隊のだれも知らなかったが、彼らは、指令違反を犯してでも、家族、財産を傷つけた反乱軍の情報の要、『フィエーブ』を殺したいと願っていた。

第2章

墓を見上げる女

フィレーナの口元から、思わず溜め息が洩れる。
「どうしても戦わなくてはならないのかい？」
フィレーナは、南部海岸地方の地図を見ながらつぶやいた。
今日は、何度もその言葉が口から出てくる。
これからのフィレーナの口癖になりそうだ。
嵐のフィレーナをバンニルの協力で倒し、四万数千の大集団に膨れあがったのは、つい数日前のことだ。
そんな大集団の衣食住を維持する方法を考えるだけでも気が遠くなりそうだし、なにより、目の前には、鯱のフィレーナの大軍が待ちかまえている。
「避けることはできないね」
バンニルが、うなずいた。
これもバンニルの口癖になりそうだ。
「たとえ、狼のフィレーナが、この集団の指導者だとしても、鯱は、われわれのほとんどが、

もともとは、嵐のフィレーナの軍隊だというのを知っている。嵐のフィレーナが、鯱のフィレーナと一戦交えるつもりだったのは、だれの目にも明らかだ」
「けれど、今の指導者は僕だ」
「指導者が替わっても、集団の体質まで変わるとはだれも思わんよ」
「僕は、この四万近い人たちを戦いに巻き込みたくない」
「四万近い……そう、もしかしたら四万を越えているかもしれない。……おれたちは、自分の集団の正確な人員さえ、まだ掴めている状態じゃない。しかも、彼らは、新しい指導者を得て、意気盛んだ。次に何かの奇蹟が起こるのを待っている。少数の狼のフィレーナが、何倍もの嵐のフィレーナの大軍を犠牲者なしで、併合したような奇蹟をな」
「それには、鯱のフィレーナと戦うよりありませんな……」
スパタが、きっぱりと言った。
スパタは、フィレーナの勝利を確認してから、何気ない顔で戻ってきていた。
狼のフィレーナ軍の副指導者だという地位も、変わってはいない。
だが、だれの目にも、作戦参謀のパンニルのほうが、重要人物なのは分かっていた。
なにしろ、嵐のフィレーナが倒された現場にいて、フィレーナと行動を共にして、新しい指導者だと指さしたのはパンニルだった。
スパタは、数人の攪乱部隊を率いただけだ。
しかも、何の戦果も上げていない。

フィレーナもバンニルも、それでも充分、攪乱の意味を果たしたと、スパタの功をねぎらったが、だれもそれを、心から納得してはいない。

スパタは、明らかに、狼のフィレーナの中では第三番目の地位に落ちていた。

スパタはあせっていた。

だからといって、他の集団へ移って今の位置を得られるあてもなかった。

……なんとかしなくては……と思っても、どうしようもなかった。

おまけに、フィレーナとバンニルは、嵐のフィレーナの集団の中から、人望の厚い人間を数人、幹部級に起用したから、集団の今後を決める指導者クラスの人間も増えた。

スパタの地位は、その人間たちの中に埋没してしまう危険さえあった。

このままでは、自分の発言力が、どんどん小さくなってしまう。

この失地を回復するためには、鯱のフィレーナとの戦いしかないと考えていた。

もし、狼のフィレーナが負けても、適当な負け戦のときに、副指導者の名を利用して、自慢の弁舌で講和を申し出ればいい。

戦いを仕組んだのは、フィレーナとバンニルだと言って、二人を殺して、その首を差し出す手もある。

勝てば勝ったで、こちらにも相当数の犠牲者がでる。

その中に、バンニルがいても不思議はないはずだ。

バンニルが、犠牲者にならなければ、自分が手を下してでもそうしてやるつもりだった。

そのためにも、幹部級の力関係が、まだ固まっていない今のうちに、戦闘の混沌に集団を追いやらなければならない。

「鯱のフィレーナも、戦いを避ける気はさらさらないでしょう」

スパタはそう付け加えた。

「初めて、意見が合ったな」

バンニルが、苦笑してスパタに言った。

「鯱のフィレーナは、いままで負け知らずで、他の集団を併合してきた。彼らの意気もまた、われわれと同じで上がっている。しかも、今、狼のフィレーナと鯱のフィレーナは、南部海岸地方の反乱軍の中でひときわ大きい二大勢力だ。弱小の反乱集団も勝ったほうと同盟したいと注目している。それがかなえば……」

バンニルはフィレーナを見詰めて言った。

「帝国の僻地とはいえ、南部海岸地方に初めて統一された大反乱軍ができることになる。となれば、帝国各地の反乱組織にも、合併や吸収とは名ばかりで、ただの勢力争いだった反乱軍同士の戦いに、反帝国という名の下での統一意識が生まれるかもしれない」

フィレーナは、バンニルを見詰め返した。

「それが、狙いで、僕の集団を手助けしたのかい？」

「結果がそうなったのさ」

「二大勢力といっても、まだ鯱のフィレーナのほうが大きいよ。まともに戦って勝てると思え

ない。なぜ、鯱のフィレーナの策士にならずに僕を選んだんだ？　あんたの目的とした嵐のフィレーナへの復讐なら、鯱のフィレーナについたほうが手っ取り早かったんじゃないの」
「確かに、そうかもしれん。しかし、おまえさんを選んだのは……さあ……器とでもいうかな……」
「器？」
「鯱のフィレーナが、南部海岸地方の反乱軍を統一すれば、次に狙うのはどこかな……」
「え？……」
フィレーナは答えられなかった。
そんな先のことまでバンニルは考えているのか……と、いささか驚いてもいた。
「スパタ副指導者の御意見は……」
バンニルは、「副」という言葉をいたずらっぽく強調して聞いた。
スパタは、試されたと思い、不機嫌そうに答えた。
「周辺の帝国都市。そして最終的にはデビの要塞都市だ。あそこを落とせば、南部海岸地方は、完全に反乱軍のものになる」
バンニルは、うなずいた。
「また、同意見だね。鯱のフィレーナならそうするだろう。だが、狼のフィレーナ、あんたならどうする。デビは、帝国の誇る難攻不落の要塞都市だぞ」
「ああ……デビの名は知っている」

フィレーナは、感慨深げにつぶやいた。
三年前、首都ボーを抜け出してこの南部海岸地方にやってきたとき、まず最初に訪れたのが、帝国軍事試験場の跡だった。
かつて、故郷、フィロセラのあったところだ。
そして、フィロセラを跡形もなく焼き尽くしたのが、デビの駐留軍だと知った。
切り立った崖の台地の上に輝くデビの要塞都市を見上げたときの、怒り……身体の震えを、フィレーナは今もしっかり覚えている。
一人で踏み込めるなら、そのときにでも突っ込んで、何もかも叩き潰してやりたかった。
「僕なら……そう……僕ならどうするかな……」
憤激を込めてデビを見上げたあのときなら、当然、攻撃を考えただろう。
だが、今は……。
「あの要塞を攻撃すると犠牲が多く出ると思う。それだけの犠牲を払って、帝国の僻地の要塞を狙っても意味がないよ」
「しかし、あの要塞を落とせば、帝国全土に名が知れる。そればかりでなく、南部海岸地方は、帝国からの独立を宣言できるかもしれんよ」
バンニルは、今度はフィレーナを試すように言った。
「宣言しても、南部海岸地方で独立できるはずがない。たちまち帝国に潰されてしまうさ」
「宣言自体に、意味のあることとは思わないか？　帝国の世界制覇以来、初めての快挙だ。後

に従う地方も出てくるだろう」
「かもしれない……でも、そのために、奴隷も、属国人も、いや、敵の帝国人も……帝国中が、戦争だらけになったら、いったいどれだけの人が死ぬんだい？」
「すると、あんたは、鯱のフィレーナに勝ったらどうするつもりだい？」
「帝国との戦いは避ける。他の地方の反乱集団と連絡を取りながら、とりあえず、みんなが、安心して暮らせる場所を捜すよ……それから先は、帝国の出方次第だ……そのとき、考えるよりない……ともかく殺し合いは御免だ」
フィレーナは、そう言い終えてから、天蓋の窓の外を見詰めた。
少し離れた場所に粗末な墓が並んでいた。
あの豪雨の中、死んでいった嵐のフィレーナとその幹部たちの墓だ。
墓の前には、たたずんでいる女がいる。
嵐のフィレーナの百九十二番目の女としか名の知れぬ、あの口のきけない女だ。
墓ができてから、昼も夜もそこを動かない。
フィレーナは、もう一度、つぶやいた。
「殺し合いは御免だよ」
バンニルは、微笑してうなずいた。
「そう思ってくれるのが、指導者の器ってもんだ。実際は、どんなに血にまみれても、そう思いつづけてくれるのがね……」

フィレーナは振り返り、きっとバンニルを見返した。
「実際に鯱のフィレーナとも殺し合いは御免だ。僕は、鯱と話し合うつもりだ」
「話し合う？」
「会いに行く……鯱のフィレーナに……僕だけで」
幹部たちにどよめきが起こった。
「そこまで言うと……子供っぽいとしか言いようがない」
バンニルが肩をすくめた。
「生きて帰れない……そう言いたいんだよね？」
フィレーナはふっと笑った。
「まあな。しかし、どうしても行く気だね？」
バンニルも苦笑しながら聞いた。
「ああ」
フィレーナはうなずく。
スパタが、二人の間に割って入るように口を開いた。
「それはあまりにも無謀だ……フィレーナが嵐のフィレーナを倒したからこそ、今のところは、かろうじて、フィレーナの下でこそまとまっていられる。だが、数日前までは、敵同士の連中だ。かなめのフィレーナが消えれば、仲間割れ、勢力争いの殺し合いが始まるだろう。これでは、鯱のフィレーナと戦う前に自滅だ」

「確かに……今日は、ほんとうに珍しく意見が合うな」
バンニルは、スパタにうなずいた。
「みんなの意見がどうだって……僕は……」
フィレーナは、気持ちを変える気はなかった。
「おれが行こう。おれが、鯱と話し合ってみよう」
唐突に、バンニルが言った。
「おれの蒔いた種だ。おれが育てるのが筋かもしれん」
「あんたが……行く？　どうも危険だね」
スパタが、すかさず切りかえした。
バンニルは、スパタを一瞥もせずフィレーナに言った。
「おれは策士だ。何を考えだすか分からん。鯱に寝返るかもしれん、と言いたいやつもいる」
「それはないさ……僕はそれだけは、ありえないと思っているよ」
フィレーナは、バンニルにではなくスパタを見詰めて言った。
スパタは何も言えなかった。
フィレーナは、バンニルを信頼しきっている。
スパタは絶望的といっていい敗北感を持った。
「けど、相手の指導者と差しで話すのは、僕じゃないと、相手に失礼じゃないか？」
フィレーナは、バンニルに向き直って聞いた。

「いや、あんたが行くほうが、むしろ失礼かもしれん。こんな、小さくて若い男が、狼のフィレーナだと知ったら、相手はどう思う？……それに、あんたは、スパタほど口もうまくない。こう言っちゃ悪いが、あんたは、坊やにしか見えん。会えばばかにされるのが落ちだ」
「そうかなあ……僕、そんなに印象、ガキかなあ……」
フィレーナは、自信なげにみんなを見回した。
「みんなも、僕が、ばかにされると思うかい？」
幹部たちは、黙っているよりなかった。
吹き出しそうなのを堪えている者もいた。
確かに、会議のときのフィレーナは、初めて見た者には、大人の話に子供が大きな口を利いている、としか見えないかもしれない。
「鯱が、あんたのような男の子を好きな、ちょいと変わった趣味のやつなら別だがね……」
バンニルが言った。
「ま、まともなら話し合いはうまくはいかんね」
あっさりとそう言われて、いささか傷ついたフィレーナは、つっけんどんに答えた。
「あんたが行けば、うまくいくとでもいうのかい？」
そんなところは、いかにも、まだまだ子供っぽく見える。
「あんたよりは可能性があるかもしれん。数日前までの狼のフィレーナは、無名だ。だが、流る策士、はぐれ蜘蛛のバンニルはけっこう知られている。役に立つ疫病神としてな。鯱のフィ

レーナも、狼のフィレーナと名のる会ったこともない若僧と、はぐれ蜘蛛のバンニルと……どっちとまともに話そうとするかな」
「フィレーナ、ここは、一度、バンニルに行かせてみたらいかがかな？」
スパタが言った。
「また、意見を合わしてくれるのかね？」
バンニルは、皮肉っぽくスパタに聞いた。
「狼のフィレーナの軍を考えれば、それしかあるまい」
スパタは、さりげなく答えた。
バンニルが使者として鯱と会ったとして、勇猛の聞こえの高い鯱のフィレーナだ。停戦の交渉がうまくいくとは思えなかった。
むしろ、問答無用と、バンニルを殺してしまう確率のほうが高い。
それで、邪魔者が消える。
「やはり、蒔いた種は、刈ってもらいましょう」
スパタは、ひやりとした笑いを頰に浮かべてそうつぶやいた。
バンニルは、翌日、鯱のフィレーナと交渉するために、出かけていった。
幹部のほとんどは、バンニルが、生きて帰ってくるとは思っていなかった。
「心配しなくていい。ほとんど、おれはここに戻ってくる。必ずだ。交渉の結果は別としてもな」

バンニルは、フィレーナにそう笑いかけて出ていった。
フィレーナは、しかし、バンニルひとりを、自分の言いだした無謀な交渉に行かせる気はなかった。
ひとりで行かせない……。
フィレーナは、幹部には知らせず、バンニルの後を追うつもりだった。
それは、もしかしたら、フィレーナもバンニルとともに帰ってこれないことを意味しているかもしれなかった。
バンニルの言うように、狼のフィレーナの集団全体を考えれば、行かないほうがいいのかもしれない。
けれど、もうひとつの考え方だってある。
どうしても、鯱のフィレーナと戦わなければならないのなら、どっちが勝とうと犠牲者の少ないほうがいい。
負けるとするなら、指導者が死んでいたほうが降伏しやすいはずだ。
大局を見て、目先の犠牲にこだわるな……という言葉をフィレーナも知ってはいる。
しかし、一対一の闘技試合（バトルショー）が身上の闘技士（バトラー）出のフィレーナには、大局を見る目は、養われていない。
目の前の犠牲をこそ、出したくなかった。
大事にしたかった。

視野が狭い。

女性的だ。

そう言われれば、返す言葉もなかった。

どう見たって、身体は女であることには違いないのだから……。

バンニルが、鯱のフィレーナに殺されそうになれば、どんなことがあっても助けるつもりだった。

だが、フィレーナには、バンニルとともに、鯱のフィレーナに会うために、このままここを出ていくには、気になって仕方のない心残りの人がいた。

＊

夕暮れ……。

その女は、まだそこにいた。

あの雨の日から、片時もそこから離れようとはしなかった。

百九十二番目の女は、嵐のフィレーナの大型硝子剣を突き立てただけの粗末な墓を見上げて動かない。

最初の日には、声の出ない唇から呻くようなすすり泣きが聞こえたが、今は、それもなかった。

ただ黙ってそこから動こうとしないのだ。

仕方なく、そばに置かれた食物と水の入れ物にも、手をつけた様子はない。

このまま、そこでじっとしていたら、遅かれ早かれ餓死してしまうだろう。

……嵐のフィレーナにとって、百九十二番目の女といえ、妻だった。

夫が殺されたのだ。

なぐさめようもなく、今はそっとしておくしかない……。

それが、バンニルや、おおかたの幹部の意見だった。

だが、百九十二番目の女が、夫を殺された悲しみのために、そうしているのだとしたら、フィレーナには、分からないことが多かった。

なぜなら、三百人以上いた嵐のフィレーナの他の妻たちは、だれひとり、悲しむそぶりを見せなかったからだ。

三百人の妻たちは、そのほとんどが、嵐のフィレーナに無理やり、略奪強姦されたような女たちだった。

略奪されても、それが愛に変わるときがままあるというが、程度問題だ。

同じような妻が、三百人以上もいるとなれば話は別だろう。

ここは、王族の後宮ではない。

嵐のフィレーナに気にいられなくなれば、後の保証は何もない。

邪魔で、足手まといだと殺されるか、追い出されるだけだ。

そんな妻の座の女たちである。

嵐のフィレーナを憎みこそすれ、その死を悲しむ者はまずいまい。

事実、嵐のフィレーナの屍体にわざわざ、唾を吐きかけにくる女は多かった。
だが、屍体にすがりついてそれを守ろうとしたたった一人の女が、この百九十二番目の女だった。
妙な女だね……。
首を捻ったのは、他の妻たちだった。
フィレーナは、女たちから事情を聞いて呆然となった。
なにしろ、嵐のフィレーナにいちばん虐待されていたのが、百九十二番目の女だったというのだ。
百九十二番目の女の身体中の生傷はおろか、その一言も喋れない訳も、嵐のフィレーナのせいだという。
この女の歌う歌が下手だと癇癪を起こして、気まぐれに女の舌を抜いて黙らせたからだというのだ。
だが、百九十二番目の女は、嵐のフィレーナが墓に埋められた後も、離れようとしない。
いじめられすぎて、頭が変になったのか？……女たちは、口々にそう言って呆れ、やがて、それぞれに男たちを見つけたのか、百九十二番目の女に、関心を示さなくなった。
女のことはおろか、嵐のフィレーナへの憎悪も、忘れたかのように墓さえ無視した。
その変わり身の速さは、同じ女のはずのフィレーナが呆気にとられるほどだった。
……女の人って、悲しかったことを忘れるのに慣れているというのか、強いというのか、た

くましいというのか、あっという間に、新しい暮らしに馴染んでいる。
どの女も、その表情に暗さはない。
僕も女だとしたら、そういうところが、あるんだろうか……。
いや、僕が、嵐のフィレーナから、この女たちと同じような屈辱を受けていたとしたら、たとえ、相手が死んだとしても、そう簡単に昔を忘れて明るくはなれないだろう。
フィレーナは、女に、とまどいを覚える。
自分が、女だ……というどうしようもない現実があるからなおさらだった。
そして、百九十二番目の女だけが、今も、墓の前にいる。
……これは、どういうことなんだ？……
……百九十二番目の女さん……話せるものなら答えてくれないか？……
……あなたが、そこで、そうしているのは、何がそうさせているのか……
……嵐のフィレーナを、死に追いやった僕だけど、僕は、あなたを知っておきたい……
……鯱のフィレーナとの戦いで僕が、死ぬんだとしたら、その前に、知りたいんだ……
フィレーナは、百九十二番目の女に、発酵乳ふうの食べ物の入った器を持って近づいていった。
女は、墓の前に身を横たえていた。
食を断っているためか、もう坐っている力もないのかもしれない。
女は、フィレーナの近づいてくる気配は分かるはずなのに、振り向きもしなかった。

何者も近づけまいという凄みがあった。
「少しは食べないと、死んでしまうよ」
フィレーナは、何を言っていいか分からず、とりあえず、そう声をかけた。
百九十二番目の女は、動こうともしない。
「固いものは、もう胃が受けつけないだろうから、食べやすいのにしたんだ。栄養もあると思うよ」
女は、まったくフィレーナを無視している。
フィレーナは、器を女の前に置いた。
「僕の言っていることが分かる？」
「……」
フィレーナは、女の顔を覗き込んだ。
泥がべっとりとこびりついている。
おそらく、嵐のフィレーナが、死んだあの日から顔も洗っていないのだろう。
表情のない目だけが、かすかにまばたいて生きていることをやっと物語ってくれている。
「僕を知っているよね？」
フィレーナは、そっと女の肩に手を置こうとした。
そのとたんだった。
百九十二番目の女は、弾かれたように、フィレーナの手を振り払って身をかわした。

懐の中からいきなり小型硝子剣を抜いた。
フィレーナは、動かなかった。
女の動きに、殺意を感じなかったからだ。
女は、自分の喉に剣を当てた。
フィレーナはつぶやいた。
「これ以上、近づけば死ぬ？」
女はうなずいた。
「わかった。僕は、何もしない。もう、手も触れない。だから剣を降ろしてくれ」
女は首を振った。
「死ぬ気なのかい？　けど、剣を使わなくても、そんなに何も食べないんじゃあ、じきに死んじゃうよね」
女の泥だらけの顔にふっと、微笑が浮かんだ。
「自分で食べないことを選んだんじゃあ、無理に生きてくれと言っても無理だよね。でも、剣で身体に傷をつけて死ななくてもいいと思うけど……」
しばらく女はフィレーナを見つめていた。
女の硝子剣を握る手から力が抜けた。
フィレーナは、百九十二番目の女に聞いた。
「そんなに、嵐のフィレーナが好きだったの？」

女は、何も答えない。
だが、見せたそぶりは、フィレーナには意外だった。
女は少し考えてから、いきなり首を振ったのだ。
「好きじゃない？……」
女は、ゆっくりとうなずいた。
「じゃあ、なぜ……なぜ、あんたは、生きようとしないんだ。まるで、あんたは、嵐のフィレーナの後を追って死にたがっているみたいだ」
女は、微笑んだ。
「分かんないんだ。僕には、あんたが……ねえ……嵐のフィレーナは、僕が殺したようなもんなんだ。そんなに悲しいなら、先刻、なぜその剣で、僕を刺そうとしなかったんだい？」
女は首を振った。
「僕が憎いんだろ？」
女は、じっとフィレーナを見つめてから、やはり、ゆっくりと首を振った。
……僕を殺したいとは思っていない。
女は、嵐のフィレーナを愛してはいなかったと、舌のない無言の言葉で、フィレーナに言った。
じゃあ、なぜ、この人は、嵐のフィレーナの後を追おうとするのか。
……何も食べずこのまま、好きでもない嵐のフィレーナとともに死のうとするのか。

フィレーナは、思う。
この人も女だ。
そして、僕も女だ。
分かりたい……この人を……。それが、この人の内面を覗き見る失礼で不遜なことかもしれないが、女である僕は、自分が女であることをよく分かりたい。
この人が、なぜ、死のうとしてまで、あの残虐な嵐のフィレーナを大切にしているのかを……。
……フィレーナは、膝をついて、百九十二番目の女を見つめた。
「聞きたいんだ、なぜ、あなたが、そうまで、嵐のフィレーナにこだわるかを……」
女は、困ったような表情で、肩をすくめた。
フィレーナも肩をすくめた。
「変と思うだろうね……こんなことを聞きたがる僕を……」
女は困惑と、微笑をないまぜにしたような顔をした。
「僕が女だからさ……」
女はぽかんと口を開けた。
「でも、ここにいるだれも、僕を女なんて思っちゃいない。僕自身も、身体は確かに女だけれど、気持ちまでは女なのかどうかは分からない。ず～っと男として生きてきたからね」
女はまじまじとフィレーナを見つめた。

「僕は、あんたが、なぜ、そうやっているのか分からない。……ってことは、僕の中にも、あんたと同じ部分があるとしたら、僕は、僕自身が分からないってことになる。僕は、知りたいんだ。自分自身を……」

そう言ってから、フィレーナは、情けなさそうに苦笑した。

「ほらね……僕の言い方って、スパタやバンニルみたいに、なんか、理屈ぽいよね……どこかやっぱり男なんだよね……」

百九十二番目の女のフィレーナを見る目に、わずかに柔らかさが見えた。

が、すぐに、表情を固くして、フィレーナの背後を見据えた。

酒に酔った数人の男女が、嬌声をあげながら通りかかったのだ。

男の一人が、声をかけた。

「狼のフィレーナ、わが指導者……万歳！」

べろべろに酔った女が、ろれつの回らない声で言った。

「ほっときなよ、そんな薄汚い女にかまうのは……女なら、もっといいのが、いっぱいいるよ。なんなら、わたしなんかどおう？」

女は、服の裾をちらりとめくって見せ、げらげらとけたたましく笑った。

フィレーナの胸に言いしれぬ不快感と吐き気が湧き上がった。

「止してくれ……僕がこの人と話をしているのは、そんなんじゃない！」

フィレーナの語気の強さに、あわてた男が、酔った女に言った。

「おい、おい、おまえ、何ちゅうことを言うんだ。相手は、われらのフィレーナさんだぞ……おまえなんか相手にするか……」

女は、百九十二番目の女を酔いで震える指で差し、男にからんだ。

「じゃあ、あの女は何よ、嵐のフィレーナの玩具だった女じゃない。しかも泥だらけで、痩せちゃってさ……まるで生きている屍体じゃないか。あっちとわたし、どっちが得か、おいしいか……よ～く考えてみよう」

「馬鹿……」

男は、酔った女の頭をこづいた。

「おまえは少なくとも今日は、おれの女だろ……おれなんかの下っぱの女を相手にしちゃ、狼のフィレーナの名がすたるってもんだぜ」

「じゃあ、あの女はなんだってんだい……あんな女を相手にしたら、それこそ狼のフィレーナは、泥まみれだよ」

「いいかげんにしねえか！」

男は、女の頬を叩いた。

「なにすんだよ！……」

女も負けていない。

とっつかみあいの喧嘩が始まった。

一緒にいた男女がおろおろとしながら止めに入る。

一人が、フィレーナの機嫌を伺ってぺこぺこと頭を下げた。
「申し訳ありません。こいつら、飲みすぎちまって……悪気はないんでさあ……ただ、フィレーナさんが、そんな汚れた女と話しているもんだから……」
「汚れた女？」
フィレーナは、その男を見すえた。
「え？……あ……いえ……」
よけいなことを言ってしまったらしいと気づいた男は、あわてて、もつれあっている男女を引き離すとわめいた。
「騒ぐんじゃねえ！　フィレーナさんの目障りだ。喧嘩なら、てめえらのベッドでしな！　狼のフィレーナさんは、嵐のフィレーナをやっつけたお方だってのを忘れたのか！」
それほど酔っていないもう一人の女もささやく。
「そうだよ……あの人を怒らすとどんな目に会うか……」
その言葉で、酔った男女のつかみあいは、ぴたりと止んだ。
二人は、青ざめた顔で震えながら、フィレーナに言った。
「許して下せえ……命ばかりは……お願いです」
フィレーナは、溜め息をついた。
「気にはしていないよ……ただ、夜になる前に酒を飲むのは、気をつけたほうがいいよ」
「は、はい！」

男女は、直立不動で答えた。
「もう、行きなよ。僕、この人とまだ話があるんだ」
「す、すみません。お邪魔しやした！」
男女たちは、転がるように、フィレーナの前から走り去った。
フィレーナは、溜め息をついて百九十二番目の女に微笑んだ。
だが、ふと、墓のまわりを見ると、通り過ぎていく人々のほとんどが、百九十二番目の女と話しているフィレーナに好奇の目を向けている。
確かに、狼のフィレーナという大軍の指導者が、泥にまみれた女と墓の前で話しているのは奇妙に見えるかもしれない。
しかも、その女は、舌を抜かれ、話せるわけでもないのだ。
……確かに目だちすぎるかもしれない……。数日前まで、百九十二番目とはいえ、戦った相手の妻と親し気にしているのだ。
……妙な誤解をみんなから受けるかもしれない。
この人と話すなら、どこか人目につかないところのほうがいいのかもしれない。
けれど、この人は簡単には墓の前から動こうとはしないだろう。
「二人だけで話したいんだ。人のいないところで……」
フィレーナは、女に言った。
女は、力なく首を振って、フィレーナに背を向け、嵐のフィレーナの墓代わりの大型剣を切

なげに見あげた。

「あんたが、このまま飢えで死んでしまうの……見ていられない。けど、自分から死にたがっている人を、無理に止めさせるほど、……僕、偉くない……」

そんな女に、フィレーナは、ちょっとうつむいて肩を落とした。

「人を殺すのは僕、得意かもしれないけど……ね……」

フィレーナは、女の後ろ姿に話しかけた。

「でも、あんたが、死ぬのを止めることはできないけど、たぶん、僕も女だから、男の闘技士とは違った感じ方してると思うんだ。死ぬことに対してね……」

フィレーナは、百九十二番目の女だけでなく、自分自身にも語りかけていた。

「戦って血まみれで死ぬのはしょうがない。でも、汚れて泥だらけで死ぬのは嫌だなって思うんだ。……死んじゃうんだから、どうでもいいようなもんだけどね……違う？　女としてそう思うのはおかしいかい？」

百九十二番目の女は、ふっと、フィレーナに振り向いた。

「だろ？　ね……そうだろ？……今のあんた、気持ちはきれいかもしれない。気持ちのことは、僕には分からない。けど、見た目は泥だらけだ……きれいじゃない……死んでも、ぼろきれみたいにしか人から思われない。そういうのって嫌だ……あんたが、僕の前でそんなふうに死んでいくのって……せめてさ……」

フィレーナは、そこまで、静かな口調だが熱っぽく一気に言って、ふっと息を吐いた。

「泥だけでもさ、洗い流して、きれいに死んだほうがいいと思うんだ。女の人って、普通、そう思わないの？」

百九十二番目の女は、じっとフィレーナを見つめて、……そうよね……とでも言いたげにうなずいた。

「洗ったほうがいいと思う。身体をさ……髪もさ……服は、僕が、きれいなのを捜すよ」

女の顔に、かすかに笑みが浮かんだ。

「さあ……洗いに行こう」

女は、ゆっくりと立ち上がった。

いや、立ち上がろうとした。

だが、その体力がもうなかった。

よろよろとフィレーナの腕の中に崩れた。

……どうしようもないわね……

とでも言いたげに、フィレーナを見上げた。

「無理ないよ……何も食べてないんだもんね。僕が、洗ってあげるよ」

フィレーナは、女を抱きあげた。

人間の身体とは思えないほど、軽かった。

フィレーナがこの女を最初に見たときは、ごく普通の体格に見えた。

小柄なフィレーナより、背も高く、ふくよかだった。

だが、数日前の姿は見る影もなく痩せ細っていた。
フィレーナは、女を両手でかかえ、近くの小川に向かった。
いつものように、狼犬（ウルフドッグ）のギャッピーがついていく。
それぞれの天幕のまわりで、夕食の支度をする女たちが、炊事（すいじ）の手を止め、女を抱いて歩いていくフィレーナをあきれたような顔で見詰めている。
そして、ひそひそ話。
……なにを好きこのんであんな女を……
……ここのフィレーナはまったく変わっているよ……
……変わっているというより、こりゃ、ほとんど悪趣味（あくしゅみ）だよ……
痛いほどの視線を感じる。
小川のそばに来たフィレーナは、首を振ってギャッピーにつぶやいた。
「ここじゃ、駄目（だめ）だね……」
川のいたるところで、若い男女や、子供たちが水浴している。
とくに若い男女は、身体を洗っているというより、人目もはばからず嬌声をあげて戯（たわむ）れていた。
フィレーナは溜め息をついてギャッピーに言った。
「いつものところにしようか……」
それは、フィレーナが、身体を洗う海辺の岩場にある小さな滝の場所だった。

狼犬のギャッピーは、フィレーナの言葉が分かったように、一声、吠えた。
そのとき、百九十二番目の女は、声にならない悲鳴を上げた。
ギャッピーの吠え声に脅え、フィレーナの肩にしっかりしがみついた。
「大丈夫。ギャッピーは危険のない人にはなにもしないよ」
だが、女はぶるぶる震えながら、フィレーナの胸に顔を埋めて、しがみついた手を放さない。どこにそんな力が残っていたのかと思えるほど、強くしがみついていた。
「よっぽど犬が苦手なんだね……」
フィレーナは苦笑して、ギャッピーに言った。
「悪いけど、今日はついてこなくていいよ……」
怪訝そうに見上げるギャッピーに、
「女同士の話ってやつさ……ギャッピー、おまえ、男だろ。狼犬にしたってさ……ここで、待っててくれよ」
……それはないよ……
とでも言いたげに、ギャッピーは甘えたようなうなりを漏らした。
だが、ほとんど狼の性質を持っている狼犬とはいえ、主人にだけは忠実な犬の血もひくギャッピーだ。
フィレーナに言われたとおり、小川のほとりに伏せて、それ以上、追ってこなかった。
狼のフィレーナの集団のだれにも自分が女であることを知らせたくないフィレーナが水浴す

る、海辺の岩場は野営地からかなり遠かった。
百九十二番目の女の身体が軽いとはいえ、海辺の岩場に辿りついたときには、さすがにフィレーナの身体も汗が吹きだしていた。
小さな滝壺で、女の身体を洗ってやりながらフィレーナは、いちおう、あたりを窺って人の目のないのを確かめると、女に言った。
「僕も、汗、流そうっと……」
すばやく服を脱ぐと、滝のシャワーに飛び込んだ。
百九十二番目の女は、まじまじとフィレーナの身体を見詰めた。
女の視線に気がついたフィレーナは、少しだけ頬を赤らめた。
「嫌だなあ……言ったろう？　僕、女だって……それとも、どっか、おかしいところある？　女の人の身体としてさ」
百九十二番目の女は、うろたえたように、何度も何度も首を振った。
「そう……やっぱり僕は女なんだよね……そうなんだよな……」
その口調は、いかにも困った様子に聞こえる。
「だけど、僕には、どうも自覚がない……女って分からない……どうして、好きでもない嵐のフィレーナをそんなに大切に思うの？」
今度は百九十二番目の女が、困ったような顔で微笑んだ。
「嵐のフィレーナを好きじゃないのに、あの男のお墓から離れないっていうのは、大切な人だ

ったってことでしょ？……それしか考えられないよ」

……た・い・せ・つ……？

女は声にならない唇の動きでその言葉を言った。

「うん、た・い・せ・つ……大切」

フィレーナは、分かりやすいように大きく口を動かして発音した。

……た……い……せ……つ……

女は、何度もその唇の動きを繰りかえした。

そして、フィレーナを見詰め、大きくうなずいてから、もう一度音の出ない声で言った。

……大切！……

「そう……」

フィレーナは真剣な表情で聞き返した。

「でも、どこが？……なにが？……あんたをいじめつづけていたあの男のなにが、どこが、どうして大切だったの？」

女はしばらくうつむいていた。

それから、じっとフィレーナを見た。

やがて、意を決したように顔をフィレーナに近づけた。

「え？……なに？」

……何を言いたいのだろう？……

フィレーナも、自然に顔を女に近づけた。
そして……。
「あ……」
フィレーナの悲鳴ともつかぬ声がかすかに洩れた。
その唇を、百九十二番目の女の唇がやさしくふさいでいた。
フィレーナは、動けなかった。
月の光が、滝のしぶきの中で踊っていた。
目を開けたままのフィレーナには、それしか見えなかった。
百九十二番目の女は、やさしくゆっくりと、唇をフィレーナから遠ざけた。
……た・い・せ・つ……いっしょにいること……ふれあうこと……
フィレーナを見詰めながら、女の唇が、そう言った。
フィレーナは混乱した。
「……そんな……好きでもないのに……ふれあう？……」
女はうなずいた。
「好きでもないのに……ふれあうことが大切？……愛してもいないのに……」
フィレーナは、そう言っている自分の台詞に驚いていた。
……愛？……
そんな言葉を口にしたことなど、生まれて今までまるでなかった。

愛という言葉の意味は知っているつもりだ。
……あ……い……
女は、そう唇を動かして……それから、首を振った。
女の声にならない声は言った。
……た……い……せ……つ……
「愛じゃなくて……大切？……」
フィレーナは、呆然としてつぶやいた。
……そう……愛じゃなくても……大切……
百九十二番目の女の声が聞こえないのがもどかしかった。
フィレーナは、思わずさっきまで、女と触れあっていた唇を指でさわった。
「一緒にいていつもふれあうことが、愛がなくても大切だっていうの？」
女はうなずく。
フィレーナはもう一度、くどいぐらいに同じことを繰り返した。
「それが、大切なの？　愛してなくても……」
女は、悲しそうに微笑した。
……あ・か・し……生きている……生きている……あ・か・し……
百九十二番目の女は、自分の胸を何度も押さえて唇を動かした。
……お・ん・な……生きている……あかし……

「生きている……証……女？」
フィレーナは聞いた。
百九十二番目の女はうなずく。
「……女として生きている証だって言うの？……ふれあうことが……」
百九十二番目の女は、ゆっくりと首を縦に動かした。
だが、その顔は、フィレーナと意思が通じたのを喜んでいるようには見えない。
ただ切なげなうなずきだった。
「女は生きている証のためにふれあうの？　女はみんな……」
……お……ん……な……
百九十二番目の女は、つぶやくような唇の動きをした。
……お……ん……な……
百九十二番目の女は、フィレーナを見詰めた。
そして、ゆっくり首を横に振って、少しだけ肩をすくめた。
……お・ん・な……そ・れ・ぞ・れ……み・ん・な……わ・か・ら・な・い……で・も……
女は、自分の胸に手をやり、
……わたし、わたし、生きている証……嵐のフィレーナ……く・れ・た……
「生きている証を、嵐のフィレーナがくれたっていうの？……舌を抜かれたほど、あんたをいじめた男から……」

百九十二番目の女は、うなずいた。
……しゃべれない……そ・れ……わたし……生きている……あ・か・し……そ・れ……く・れ・た……嵐のフィレーナ……
「分からないよ……そんなの……なにも喋れなくされて、ただふれあう……いや、それだって無理やりでしょう？　それが生きている証だなんて……」
……嵐のフィレーナ……抱く……わたしを……それだけ……それしかなかった……でも……それが、生きているあかし……けれど……
百九十二番目の女は、微笑んだ。
その微笑になぜか悲しみの影はなかった。
今、嵐のフィレーナ……死んでいる。わたしも……死ぬ……。
フィレーナは、百九十二番目の女の生きざまが理解できなかった。
分かるはずもなかった。
ふれあうだの、抱くだの……言葉だけしか……いや、行為の姿だけは、戦いの後の乱痴気騒ぎで、目をそむけながらも目撃してしまったことはある。
だが、自分自身には何の経験もないのだ。
しかも、百九十二番目の女は、愛もなくて、ただ一緒にいてふれあうことが、生きる証のように言う。
フィレーナは肩を落とした。

「一緒にいるだけなら、嵐のフィレーナの他にも男はいるでしょう？……なのになぜ死のうとするんだ……」

百九十二番目の女は、もう、自分をフィレーナに分からせるのは無理だとでも言いたげに首を横に振った。

……嵐のフィレーナ……いつも一緒にいた……ふれあった……わたしと……だから……わたし、いた。……嵐のフィレーナ……いない……もう……わたし、いないと同じ……

「どうして……」

もう、フィレーナも百九十二番目の女に聞くつもりでつぶやいたわけではなかった。

こういう女の人もいるんだ。

そう思うしかなかった。

この人が、喋ることができたなら、もっとはっきりした心を開けるかもしれない。

愛する人のためでもなく、まして娯楽用の奴隷でもなく、一緒にいてふれあうためにだけ生きてきたなんて……。

いや……。

フィレーナは思い直す。

それでいいのかもしれない。

いろいろな女の人がいていいのかもしれない。

フィレーナは、いままでわずかな数ではあるが、女の人の生きざまを垣間見てきた。

それぞれが、それぞれの思いを抱いて生き、死んでいった。

そして、リラ……。

あの娘は、フィレーナにはかけがいのない人間……そして同じ女でありながら、フィレーナはおろか、確かに他のどんな女とも違うタイプだ。

……僕はどんな女なのか？……いいや、僕は……

フィレーナは大きく息を吐いた。

最近、気にしすぎているのかもしれない。自分が女なのを……。

フィレーナは、身体と髪を洗い、泥を落とした百九十二番目の女の裸身を見た。

痩せて頬はこけ落ちていた。

だが、奇麗だと思った。

残虐で恐れられたというあの嵐のフィレーナが、いじめ抜きながらも、そばから離さなかったのも、この女性の持つ美しさのせいかもしれないと思ってもみた。

いじめっ子が、いじめることで、好意を表現するように……。

いじめられっ子が、いじめられつづけて、自分が存在しているのを確かめることもあるのかもしれない。

フィレーナだって戦う毎日の中で、自分が生きているのを感じてきた。

戦いがなくなったら、僕はどうなってしまうのだろう。

そう……僕は、最近、女を意識しすぎているんだ。

僕は、女である前に、戦うために育てられた闘技士だったはずだ。

フィレーナはそう決めようと思った。

フィレーナは、百九十二番目の女に言った。

「僕の知り合いに女の子がいてね……その娘は、最高の男を見つけて結婚するまでは死んでも死なないって言ってる。嵐のフィレーナって、あんたにとって最高の男の人だったのかなあ」

女は、ふっと笑って、肩をすくめた。

……か……も……ね……わたしにとってはね……

だが、フィレーナはもう、その唇の動きを読む気はなかった。

ただ、今は、この女の人に死んで欲しくない……それだけだった。

フィレーナは、服を着ながら、妙に大人びた口調で言った。

「あんたなら、嵐のフィレーナ以上の男の人が、現れると思うよ……生きていればね」

……いいの……もう……

フィレーナに伝えるつもりもなく、百九十二番目の女はつぶやいた。

……今日、身体を洗ったのは、死化粧のつもりなんだから……

百九十二番目の女は、ゆっくりと、フィレーナに分かるように唇を動かした。

……あ……り……が……と……う……

フィレーナは、ふっと溜め息をつくと、裸のままの女を両手で抱きあげた。

「さあ、戻ろう……あんたの服は泥だらけだ。あんなのを着たら、また汚れちゃう。野営地に

着いたら服を捜そう……このまま戻るけど、寒くはないよね」
裸のままの女が恥ずかしがることを、フィレーナは忘れていた。
フィレーナにとって、人前で服を着るのは、自分の女を隠す手段でしかなかった。
……この人は、奇麗なんだから、泥まみれの服でいるより、このほうがいい……
そんなふうに思ってしまうフィレーナは、その点ひとつとっても、まだまだ、女の気持ちを持ちきれていないといえるかもしれなかった。
もっとも百九十二番目の女も、もうすぐ餓死するつもりだったから、裸であろうと服を着ていようと、もう、どうでもよかった。
それに陽はとっくに暮れて、二人を照らすのは、月の光だけだ。
だが、その銀色の薄い光のベールをすかして、二人の後ろ姿を窺う人影がいた。
その男は、二人が、野営地から海辺の岩場に向かったときから、後をつけていた。
狼犬のギャッピーがいれば、当然気がついただろう。
だが、狼犬を恐がる百九十二番目の女を気づかうフィレーナは、うかつにもそのときだけギャッピーを遠ざけてしまっていた。
その人影は、滝壺の二人の一部始終を見ていた。
「フィレーナが女だとは……」
人影はつぶやいた。
それは、フィレーナが女であることを、狼のフィレーナの集団の中で、最も知られてはなら

ない人物だったかもしれなかった。
「切り札だな……これはおれの……」
スパタは、溜め息をついた。
そしてつぶやいた。
「あれが、フィレーナに効果があるとはな……」
スパタは弁舌には自信があった。
それは、人々を動かすためだけに使われたわけではなかった。
むしろ相手は女のほうが多かった。
そして、今まで声を掛けて失敗した女は、ただの一人もいなかった。
最初はお高くとばんでいる女も、スパタがその気になれば、一月と持たなかった。
しかも、相手は、奴隷の女だけではない。
帝国人民（エンパイアラー）の優秀種の女さえ、片手の指以上、口説き落としたのが、だれにも言えないが、スパタの密（ひそ）やかな自負だった。
スパタは、今や名前だけになった副指導者の地位の失地回復に躍起だった。
鯱（オルカ）のフィレーナとの交渉に向かったバンニルが、万にひとつ、まさかの成功を収めたら、もう、立ち直れるきっかけはないと思っていた。
とはいえ、交渉に向かうバンニルをどこかで待ち受けて暗殺するには、闘技の腕もかなうはずもなく……そして信頼できる味方も少なかった。

それに、鯱のフィレーナとの交渉がうまくいくはずもないと思っていた。

せいぜい、首を切られて、送り返されるのがおちだ。

ほとんど、鯱のフィレーナに殺されると決まっているバンニルを、わざわざ危険を冒してまで殺すのは馬鹿げていた。

だからこそ、バンニルなき後の地位固めのためにも、フィレーナのすべてを知りたかった。

弱点があれば、それをさりげなく脅しにちらつかせ、利点があれば、誉めたたえ持ちあげる、気分をよくさせ利用する。

バンニルの交渉が成功すれば……そんなことはありえなくても、転ばぬ先の剣だ……なんらかの手段で、バンニルを謀殺し、後は同じようにすれば、自然にナンバー2の座は戻ってくる。

そう考えてからというもの、スパタは、フィレーナが朝起きてから寝所の天幕に入るまで、さりげなく見張りを続けていた。

だが、どこに行ってもそばを離れない狼犬が、必要以上にスパタをフィレーナに近づけなかった。

何かの用があってフィレーナに近寄ろうとしても、まず、ギャッピーがスパタに気づき、スパタが声を掛ける前に、フィレーナから名前を呼ばれていた。

……あ、スパタさん、何か用？……

別に、スパタひとりを警戒しているわけでもなさそうだった。

バンニルに対しても、いや、狼のフィレーナの集団の他のだれに対しても、近づけば必ず気

がついて、まず先に声を掛けてるのはフィレーナだった。
あの狼犬が知らせているのは明らかだが、なにしろ、一時も離れないのだから、始末におえない。
結局、だれ一人、フィレーナの私的な部分を見た者はいなかった。
そう、上半身すら人目にさらしたことはなかった。
「そうか……女か……女の闘技士……女の指導者……」
スパタは、狼のフィレーナの中でのフィレーナの奇妙な行動のすべてに合点がいったような気がした。
何の理由かは知らないが、フィレーナは女であるのを隠して生きてきた。
女だから、戦いの後に女を抱かない。
酒も飲まない。酒で乱れて、女であることをさらけだす危険があるからだ。
「女……それも、経験のない初心な女……女としてはな……」
何も知らないくせに、他の男女の関係が気になって仕方がない……そう、まるで、十代のはじめころの女の子と同じような好奇心を持っている。
だから、嵐のフィレーナの女なんかに興味を示す。
スパタは、フィレーナが女だと知ったとき、そこまで見抜いていた。
今は隠しおおせているが、そのうち、女の部分が顔を出すに違いない。
そんな部分を引きずりだしてくすぐり抱きしめるのは、スパタにとって簡単なつもりだった。

スパタは、女に対して、いささか自信があった。
フィレーナを手なずけるなど造作もないことに思えた。
女を落とす……物にする……などと表現するのも照れる、なんとも恥ずかしい行為にさえ思えた。
「簡単に過ぎて、面白くはない……」
スパタは、経験の豊富な、男を見る目の肥えている女を、あの手この手で、電算機遊戯(ゆうぎ)のように開いて(クリアして)いくのが好みだった。
それに比べたら、フィレーナを物にするなど、電算機どころか、一桁(ひとけた)の足し算より楽に思えた。
「赤子の遊びか……」
だが、その女が、他ならぬフィレーナならやらねばならない。
女は、男に惚(ほ)れてしまえば、ことの良否などどうでもよくなってしまう。
少なくともスパタはそう感じていたし、また、そんな女との出会いしかなかったのも確かだった。
フィレーナを物にすれば、狼のフィレーナの大軍は、おれの意のままになる。
スパタは、もう、フィレーナを抱いたつもりになっていた。
なにしろ、フィレーナを女だと知っている競争相手もいない。
バンニルも知っているはずはないし、恋(こい)にうつつを抜かすタイプの男でもない。

フィレーナが女だと知ったら、むしろ……。

……指導者が、秋の空の持ち主では、まともな天気予報はできない……

などと言って、むしろ、愛想をつかして狼のフィレーナから出ていきかねない。

競争相手がいるとしたら、あの狼犬か……。

「犬っころと恋の鞘あてか……おれも落ちたね……」

スパタは、どこか、寂しげにそうつぶやいた。

スパタもまた、フィレーナが女だったことに、どこかしら、失望していたのかもしれない。

……これでは、巧妙でかつ知的な、痛快戦略劇から、好色で猥乱な後宮劇の黒幕もどきではないか。

日常の行動はどうであれ、スパタもまた帝国からの革命を夢みて生きている男だった。

革命遂行に、奇麗も汚いもなく、あるのは、成功か、死か、のどちらかであるのは分かっているつもりだったが、その中心人物に女がからんでくるのは、どこか面白くなかった。

革命の浪漫が、女の情緒的な感性でかき乱される気がして、いささか腹立たしくもあった。

だが、スパタは見落としていた。

フィレーナは、フィロセラという王家の直系の血を引き、そして、なにより、闘技士として育てられたことを……。

スパタが、フィレーナの後をつけたのを感づかれないよう、時間を見計らって野営地に戻ったとき、フィレーナは、もうそこにはいなかった。

スパタが見たのは、嵐のフィレーナの墓の前で、月の光を浴び、純白の衣装を着て横たわる百九十二番目の女の姿だった。

その衣装は、嵐のフィレーナがどこからか略奪した帝国人民の衣装箱の中から、フィレーナが見つけだした結婚用の薄い合成絹の寝衣装だった。

そのころ、フィレーナは、バンニルの後を追って、狼犬のギャッピーとともに、夜の森を走っていた。

第3章

鯱（オルカ）と狼

鯱のフィレーナの大軍は、狼のフィレーナの野営地から歩いて三日の距離に、帝国軍の討伐など意に介さぬといった感じで、森を抜けた平野に堂々と陣どっていた。

事実、辺境の南部海岸地方に駐屯するなまじの帝国軍では、とうてい太刀打ちできそうもない規模の反乱軍だった。

バンニルは、三日の距離を一日で駈け抜け、鯱のフィレーナの陣が見える丘の上に来ると、今度はゆっくりと、陣へ続く道の真ん中を歩きはじめた。

鯱のフィレーナの兵士とは、何人もすれ違ったが、たった一人で、平然と歩いていくバンニルを、怪しむ者はいなかった。

これほど落ち着いて鯱のフィレーナの真ん中の道を歩いている男が、まさか狼のフィレーナからやってきた者とは、だれも思わなかったに違いない。

それどころか、気楽に声を掛ける者すらいた。

「やる気かね……うちは狼さんとよ……」

「やるだろうね」

バンニルもそう軽く答えながらも、兵士たちの話題のほとんどが、狼のフィレーナに集中しているのに気づいて、苦笑した。

彼らは、戦いの相手が帝国軍より、むしろ同じ反乱軍になるだろうことを自覚しているようだった。

それも、反乱の手口が狂暴で残忍な嵐のフィレーナが次の敵になるだろうと、思い込んでいた。

それが狼のフィレーナなどという、今まで完全に無視していた集団の指導者に、頭がすげ替わってしまったのだ。

……しかも比較にならない少数の軍勢で、一瞬のうちにほとんど犠牲者を出さずにやりとげてしまった。

奇蹟だ……などと感心してはいられない。

次の対戦相手、鯱のフィレーナとしては、無気味な魔術を使ったとしか思えない。

……いったい、何が起こったのか？……

……どんな手を使ったのか？……

……狼のフィレーナとはどんな偉丈夫なんだ？……

バンニルにはくすぐったく思えるほど、狼のフィレーナの話が、蔓延していた。

バンニルのとった嵐のフィレーナ倒しの策は、その展開は多少、違ったものの、結果は狙いどおりといえた。

少数の軍が大軍に、まともに正面からぶつかって戦ったのでは、たとえ万が一の勝利を収めたところで、それは単なる奇蹟、幸運にしか見えない。

だが、今度の勝利は、嵐のフィレーナの集団の残虐な指導者に対する部下たちの心情……嵐のフィレーナを恐れ忌み嫌い、できるものなら逃げたかった……それを知らない他の反乱軍にとっては、不可解な心理策を使った勝ちだった。

そして、その結果は、他の反乱軍にも、いや帝国軍にすら動揺をあたえるはずだ。

他人の理解しがたい成功ほど、人を不安にさせるものはない。

ここまでは、とりあえずうまくことは運んでいたのだ。

フィレーナが、和平交渉にこだわりさえしなければ、ここしばらくは、狼のフィレーナの魔術として、他の反乱軍を威嚇できたはずだった。

……だが、それも、種明かしをすれば、すぐに消えてしまう。

バンニルが、鯱のフィレーナと和平交渉をするというのは、わざわざ、種明かしに出かけてきたようなものだった。

バンニルは、溜め息をつきながらも、それでも、しっかりと鯱の兵力だけは計りながら歩いていた。

兵士たちの鎧も武器もかなり整備された優秀なものだった。

帝国軍を襲撃し略奪したものには違いないのだが、手前勝手に気に入った武器を持っているわけではなかった。

反乱軍の中には、往々にして目立つ格好や、体形に合わない大型の武器をこれみよがしに持っている者がいるのだが、ここには見当たらない。
見張りの兵は、素早く伝令に走れるように軽快な武器しか持っていないし、先兵とおぼしき役回りの兵は、中型で発射される白熱光の射程距離の長い、剣技よりも狙撃向きの硝子剣を持っていた。
寄せ集めのただの反乱軍とは明らかに違う、戦闘というものへのしっかりした方針のある軍隊といえた。
……やはり、南部海岸地方最大の反乱軍と呼ばれるだけのことはある。人数が多いだけでなく、強い反乱軍なのだ。強いからこそ人が集まり、強く常勝だからこそ統一のとれた軍に育っていく。
……ここでもまた、狼のフィレーナとは別の意味での優秀な反乱指導者に会えるかもしれない……。
……バンニルは、死を覚悟しながらも、しだいに鯱のフィレーナへの関心に胸が高まっていくのを止められそうになかった。
バンニルは何の苦労もせずたった一人で、堂々と陣の中央の野営地に辿りついた。
そして、野営地の正面にある兵士の詰所らしい天幕の中に入っていった。
そして、作戦地図を置いた机の前に坐っている幹部級らしき男の前に、すたすたと歩いていった。

男は、ろくにバンニルに目をくれもせず、地図を見ながら言った。
「ん？　何の報告だ？」
バンニルは、腰に差した二本の中型剣(ミドルスオード)を抜いて言った。
「報告といえば報告だが……」
バンニルは、二本の剣を十字に交差させ、最小出力の白熱光線(ホワイトレイ)を光らせた。
その出力には殺傷能力はなく、おもに夜の合図用か、照明用に使われる程度の光だった。
それでも、幹部級の男は仰天(ぎょうてん)し、椅子(いす)から転がるように飛びずさった。
「な、何をする！」
机のまわりにいた兵士たちも、思わず後ずさった。
しかし、だれも天幕の外に逃げ出す者はいない。
すばやく、剣を抜いた者もいる。
……さすが、鯱(オルカ)のフィレーナの兵だな……
バンニルは、いささか感心したが、それを表情に見せず幹部級の男に言った。
「あなたには、何もせんよ。剣でこの構えをする意味はご存じだろう。戦う意志のない証拠だ」
「あ……あ、そうだったな……」
幹部級の男はすぐに落ち着きを取り戻したらしく、肩の力を抜いた。
「何者だ？　その構えは、帝国軍の正規の礼儀作法(れいぎさほう)だが、帝国軍が、われわれに何を言いにき

た？」
「あいにく、私は帝国軍ではない。残念ながら、反乱軍には敵と交渉したいとき、こういった礼儀作法がないから、とりあえず、こうしてみただけだ」
「帝国成立前の白旗のようなものだな……」
幹部級の男は、部下たちに、抜いた剣を鞘に収めるよう命じた。
バンニルは、幹部級に軽く会釈すると、微笑した。
「古い歴史をよくご存じのようだな。だが、白旗は、だいたい分の悪いほうが、強いほうに語りかける場合が多いが、今回はそうでもない」
幹部級の男は、ひやりと笑って、バンニルを見すえた。
「ほう、この南部海岸地方に、帝国軍の他に、われわれより強いものがいるのかな？……用件を言いたまえ」
「用件を言うには、失礼ながらあなたでは役不足だ」
「なに……？」
幹部級は、さして怒った様子も見せずに言った。
「私は鯱のフィレーナの三人の副将のひとり、ナスカだが、私で役不足なら、あとは鯱のフィレーナ本人しかいないが……そういうことかな？」
「こちらが勝手にやってきながら、先に名乗っていただき恐縮ならびに失礼した」
「なりゆきだ……名乗る順序などどうでもいい……で……あんたは？　ひとりでここに乗りこ

んできたんだ。それなりの名はあるだろう」
「確かにそれなりの名はある。私は、はぐれ蜘蛛のバンニルというしがない流策士だ。狼のフィレーナの使者として、鯱のフィレーナにお目通り願いたい」
「ほう……」
ナスカという副将は、まじまじとバンニルを見た。
「あんたが、はぐれ蜘蛛のバンニルか……噂は聞いている。一度、会いたいと思っていたが、狼のフィレーナの使者としてなら、確かに鯱のフィレーナと会うべきかもしれない……私が役不足かどうかはともかくとしてな」
「失礼を言ったようだ。あなたの受け答えを見て、いたく反省している」
バンニルは深々と頭を下げた。
「ま、そのうち、話す機会ができるといいが、それは、バンニル、あなた次第だ。首だけに切り離されたあなたとでは、ろくな挨拶もできない。とりあえず名乗りあえてよかったと言っておこう……よろしい、私が、鯱のフィレーナに紹介しよう」
「恐れいる」
バンニルは、二本の剣を鞘に収めると机の上に置いた。
ナスカは、剣を取るとバンニルに差しだした。
「こんなところに置かれても邪魔なだけだ。持っていってくれ」
「いちおう武器だ……鯱のフィレーナに会うのに持っていくわけにはいくまい」

「かまわんよ……武器として使わなければ、ただの硝子棒だ。それに、武器としても使えはしないだろう」

ナスカから剣を受けとったバンニルは、つぶやいた。

「邪魔なだけか……」

「そういうことさ……」

そういえば、ナスカは最初から剣など持っていなかったことにバンニルは気がついた。

＊

野営地の中央にこぢんまりとした天幕があった。

「これが、鯱のフィレーナの天幕？」

ナスカに案内されたバンニルはいささか驚いた。

僻地とはいえ、南部海岸地方最大の反乱軍の将の住居とはとても思えなかった。

「必要な物以外は置かない。それが、鯱のフィレーナの主義だ。ちなみに私の天幕の三分の一もない……私には、正直、物欲もある。とてもここまでは、真似はできないね……」

その口調には、明らかに、鯱のフィレーナに対する尊敬の念が見てとれた。

＊

天幕の中は、外で予想したよりも質素だった。

最小限の家具以外に人目を引くものといったら、天幕の片隅に置かれた鎧と剣だった。

それは、しかし、何の飾りもなく、いかにも頑丈で重そうなだけが取り柄の闘技試合でいっ

たら超重量級の鎧と、並みの大型剣が細身に見えるほどの長くて幅広の剣だった。

けっして、背が低いとはいえないバンニルの身体がそっくり隠れてしまう巨大さだ。

「なるほど……はぐれ蜘蛛のバンニルか……」

質素な椅子に腰掛けた上半身、裸の大男が、バンニルを見つめた。

身につけているのは、かろうじて下半身を隠している薄い布切れだけだ。

あきれるほど、無防備であけっぴろげな格好だ。

だが、この男、大きいだけではない。

鋼のような筋肉と均斉の取れた体形が、いかにも鍛えられた強さと敏捷さをも物語っていた。

それが鯱のフィレーナだった。

「あんたがいたから、狼のフィレーナは嵐のフィレーナに勝てた……なるほどね……そんなことだろうと思っていた。ただで、少数軍が残忍な将の率いる大軍に勝てるはずはないからな。確かにずる賢い策が必要だっただろう。だが、鯱のフィレーナは、そんなものは必要としない。正々堂々と戦う……それが、われわれのやり方だ」

「失礼ながら、何か、勘違いをなされているようですな」

バンニルは、鯱のフィレーナに肩をすくめた。

「勘違い？」

「どうやら、あなたは、私が、鯱のフィレーナ……あなたに私を売り込みにきたと思っているようだ」

「鯱と呼んでいい。どうも最近フィレーナが多すぎてうっとうしい。どこもかしこもフィレーナ、フィレーナ、分かりにくくてかなわん」
　オルカはぽりぽりと頭をかいた。
「その分かりにくいフィレーナの中では、今やあなたにとっていちばん分かりやすいフィレーナ……南部海岸地方であなたに次ぐ勢力を持つ狼のフィレーナの使者として、私は来たのです」
「流れ者の流策士は、策を売るのが商売だろう。使いで終わるとは思えんがね……断っておくがおれは、必要なものしかいらない。訪問販売や、押し売りは好きじゃない」
「私は今回、何も売る気はないのです。いや、むしろ、あなたを買いにきた」
「買いにきた？」
　オルカはバンニルを見据えた。
「狼のフィレーナは、あなたとの同盟を望んでいる。あくまで、対等な同盟です。これ以上、反乱軍同士で血を流すのは、無意味だ。あくまで、共通の敵は帝国なのだからと……そう狼のフィレーナは言っています」
「同盟……？　本気かね……？」
　オルカが苦笑しながら言った。
「少なくとも狼のフィレーナは本気ですね」
「だが、あんたは、本気じゃない。同盟なんか信じちゃいない……違うかね？」

「まあ、普通、そうでしょうね……二本の剣をこうやって持っていることだし……いえ、これは、あなたの副将が、持っていっていいと言ってくれたんですがね……」

「かまわんよ」

オルカは、軽く言ってのけた。

「交渉が決裂したら……あなたは、今、何も武器を持っていない」

「あすこにある」

オルカは天幕の隅の剣に目をやった。

「手慣れた武器だが、いつも持つにはさすがに重くてうっとうしい。いつもは身軽に限る」

「しかし、手元から、ずいぶん離れていますな。今、私が斬りかかれば……」

「当然、避けるね。そして、あの剣で、おまえさんは真っ二つになっている。そう時間はかからんよ……」

「自信があるんですな」

「闘技に関してはね……」

それまで黙っていたナスカが、口を開いた。

「鯱のフィレーナは、中央闘技士だった。それも負け知らずのね……」

「フィレーナの名はもういい」

オルカがうんざりしたように言った。

「狼のフィレーナも、闘技士だったらしい」

バンニルがつぶやくように言った。
「ほう……で、強いかね……」
オルカが楽しそうに聞いた。
「かなりね……」
「だとしたら、いつか、戦うことになっていたかもしれんな……本当に強ければな。ま、どうせ、いずれ戦う相手だったわけだ」
「かもしれませんな……本当に強ければ……」
ナスカがうなずいた。
「だが、同盟を結ぼうなどと言いだすようでは、あてにならんぞ。その強さもな……もしかして、その男、闘技試合で殺されるのが恐くて脱走(エスケープ)したんではないのか？」
オルカが、にやにや笑いながら不精鬚(ぶしょうひげ)の生えた顎(あご)を撫(な)でた。
「そういうあなたはどうなんですかな？」
バンニルが、皮肉っぽく聞いた。
「おれか？……おれは、この土地で育てられた闘技士だ」
「いわば地元出身の反乱軍ですな。こんな僻地から中央闘技士まで出世……いや、対戦相手を殺しつづけるとはたいしたものだ」
バンニルの皮肉はきつい。
もとより、同盟はほとんど不可能だと思っていたし、それにともなう死も覚悟していた。

ただ、オルカを、暗殺する機会があれば狙おうとも思っていたが、相手の闘技能力を聞けば、それも無理なようだった。

しかし、交渉に絶対に弱みを見せてはならない。

こちらの強気が、相手を不安がらせれば、充分それでも交渉の効果はあるのだ。

だが、オルカは、バンニルの皮肉を気にしたようにも見えなかった。

「殺したね……殺さなければ、こちらが殺される。それが、闘技士だ……そして、気がつけば、首都ボーで中央闘技士だ。三月に一度の試合で、五位までなった。世界で一人の最優秀闘技士になるまであと五人殺せばいい。おれは、上位の五人の試合を見た。正直いって、おれの敵じゃない。戦わなくても、おれが最優秀になるのは分かりきっていた」

「戦わない男のそういう自慢話はよく耳にしますな……」

肩をすくめるバンニルに、オルカはうなずいた。

「まあな……そうだと楽だがね……」

ナスカが苦笑しながら言った。

「ところが、それは本当だった。元闘技評論家だった私が言うんだから嘘ではない」

「評論家のいうことなどあてにならんがね」

オルカは、ナスカを悪戯っぽくからかった。

「そう、評論家なんてくずみたいなもんです。おまけに、僻地の南部海岸地方出身の評論家なんて、くずの上のほこりのように、一流評論家からはばかにされている」

「ほう……」
バンニルはナスカに言った。
「あんたも、南部海岸地方出身か」
「でなけりゃ、同じ反乱を起こすにも、こんなところまで来やしない。ともかく、口先だけの評論には飽きた。で、まあ……そのころ、いちばん有望に見えた闘技士について、私もこうやって、評論せずに実践することにした」
「ま、ナスカの場合はそういうことだ。で、おれとしてはだ、最優秀闘技士になっても闘技士に引退はない。防衛戦が続く。守るためには殺しつづける。われわれと同じ奴隷をな……運良く、闘技指導員に天下りできても、結局、殺し合いの闘技士を作るだけのことだ。で、嫌になった。どうせ殺すなら、おれたちの殺し合いを楽しんでいる帝国自体を楽しませてやろうと思った。で、闘技士養成所で反乱を起こし、この有様だ」
「手を組む気はないのですな……」
バンニルは、話を本題に戻した。
「ないね……狼のフィレーナとやらが、本当に強い闘技士だったら分かるはずだ。同盟だの話し合いだの……そんなものは、いらぬ混乱をまねくだけだ。汚い駆け引きや陰謀の巣になるだけだ。
それを避けるにゃ、すっきり力を見せること。力で勝つこと。それも奇麗にな。策なんていらない。汚い策を敵に使えば、味方自身の中にも騙されるんじゃないかという疑いの芽を生む。

正々堂々と力で勝つ。そうすりゃ、みんなもついてくる。……それしかない。いいかい、策士さん、闘技試合に話し合いがあっちゃ八百長だ。闘技じゃあ、それで人が死ぬ。そればかりか、八百長の裏では、もっと多くの人が迷惑し、苦しみ、闇の中で殺される人もでる」

「ま、そこらは、私のような評論家が詳しいんですけどね……本当のことは、口をつぐんで言いませんがね……」

ナスカが、気楽な口調で言った。

「ともかく、勝負は、力と力だ。

それが、実は後腐れなく、いちばん犠牲を少なく勝つこつなんだ。帰ったら狼のフィレーナに言っておけ。少なくとも闘技士なら、こっちも闘技士だ。まともな闘技試合をしようとな……」

……え？……

バンニルは耳を疑った。

こいつらは、おれを生きて帰すつもりなのか……。

……なんという単純なやつらだ……

バンニルは、自分の命の所在より、むしろオルカの見せようとする自分への処置に呆れるしかなかった。

……そんなことで、せちがらい世界を渡っていけるのか。

だが、この男が、南部海岸地方でいちばんの勢力を持っているのも確かなのだ。

この馬鹿がつくような明快さが、人を引きつけるのか？……。

オルカはバンニルにさらに続けた。

「少なくとも、あんたの命賭けの交渉に出てきた度胸は認める。だが、それだけに、いただけんなあ……。

……あんたがついている狼のフィレーナさんとやらは、なぜ、自分で出てこない。なぜ？　策士のあんたなんかを使いに寄こすんだ。それだけで、まともな勝負は期待できんと思ってしまうぞ」

そのときだった。

天幕をささえる柱の上から、凛と響く声がした。

「僕なら、ここにいる！」

見上げるオルカの前にフィレーナが飛び降りた。

何の武器も持っていないように見えた。

「なんだ、このチビは……」

確かにオルカの身体に比べたら三分の一もない。

フィレーナはバンニルが、一日かかった距離を半日で追いついてしまったのだ。

バンニルは、天を仰いだ。

……馬鹿が……なぜ来たんだ！……

自分の小ささを見せて何の得があるというのだ。

まして、相手は、単純馬鹿な大男だ。
身体の大きさだけで、相手を飲んでかかるだろう。
しかし、フィレーナはオルカを見上げ、するどい視線だけは負けずに言った。
「やっぱり、僕が来るべきだったんだ。鯱のフィレーナさん、僕が狼のフィレーナです」
オルカは目を丸くした。
「おまえが？……おまえが……狼のフィレーナ……？」
「そう、僕が本当のフィレーナです」
オルカとナスカは顔を見合わせ、やがて腹をかかえるように笑いだした。
「狼どころか、まるで蚤だな」
「そう呼ばれたときもある……闘技士だったドラの街ではね……」
フィレーナは真顔で答えた。
「蚤のフィレーナと？……」
「ドラの闘技士？」
オルカはさらにけたたましく笑った。
だが、ナスカは、頭の中の記憶を呼び戻すためか、笑わなかった。
バンニルは、頭を抱えたい気分だった。
……よけいなことを……蚤だの……田舎都市のドラだの……相手は、同じ脱走闘技士でも中央闘技士までなった男なんだ……比べようもない格の差が歴然だ……

「で、坊や、よくここまでこれたな」
オルカはふと我に返って、フィレーナを見下ろした。
鯱のフィレーナの野営地までならともかく、その中の警戒(けいかい)はさすがにけっして甘くない。
バンニルも、ナスカの案内があったからこそ、オルカの天幕に来れたのだ。
「警備をしているつもりなら、ここはザルだよ。僕なら、一日、百回は外からここまで出入りできるね……」
フィレーナは、オルカから一瞬も視線を離さずそう言った。
「一人で、武器もなくいい度胸だな」
いささか、真面目(まじめ)な口調でオルカが聞いた。
「一人じゃない。バンニルさんがいる。天幕の外には、狼犬(ウルフドッグ)のギャッピーもいる」
天幕の隙間(すきま)からギャッピーがのっそりと入ってきた。
「犬まで連れこんだのか……」
さすがに呆れて、オルカは開いた口がわずかに塞(ふさ)がらないようだった。
「ああ、ギャッピーのおかげで、狼のフィレーナの名がついているようなもんなので……いつも一緒(いっしょ)さ……」
ナスカが、つぶやきを洩(も)らした。
「武器も持たずに……」
その口調はバンニルに、剣を渡したときとは、まるで違う驚きのようなものが、かすかに見

えた。
フィレーナが小柄だけに、なおさら武器を持っていないのが、妙に思えたのだ。
「武器ならある」
ベルトの間から折り畳み式の硝子小刀を出した。
手の平で握ると隠れるような小さい小刀だ。
「戦うときは手慣れた中型剣があるけれど、いつも持つには、重くて邪魔でね……」
オルカの大型剣にちらりと目をやって苦笑した。
「あなたのあれと同じでね……」
「聞いていたのかね……おれたちの話を……」
「聞こえてしまった。あんまり、あんたの話が続くので、その……」
フィレーナは、肩をすくめた。
「出てくる機会が見つからなかった」
「で……真打ち登場はいいが、そんな小刀で、おれの剣に勝てるつもりだったのかね」
オルカが、フィレーナの握った折り畳み小刀を、もう一度、ちらりと見て、言った。
「喧嘩をしにきたんじゃない。でも、人を倒すのに、道具に差はないさ。人間の心臓はひとつ。針で刺そうが、大型剣で叩き潰そうが、心臓が止まれば死んじゃう。わざわざ首を刎ね飛ばさなくても、首の裏側の急所を針で突っつけば、血も出ず一瞬で奇麗にあの世に行ける……でしょう？」

フィレーナは別につっぱって見せるわけでもなく、軽く言った。
「なるほど……」
オルカは、にやりと笑って、自分の顎を撫でた。
何か意外なことが起こったとき、驚きを顔に見せず、顎を撫で、笑ってしまうのが、この男の癖のようだった。
「確かにおまえさんはまともな闘技士のようだな。自分の力に見あった武器と殺し方を知っている。ここにやってくる度胸も、並み以上の闘技士のようだ。だがな、闘技士なら、おれの先刻、言ったことも分かるだろう」
「同盟や合併はできないってこと？」
「そのとおり」
「そうかなあ……僕は、犠牲者なしで合併できるんなら、指導者はあんたでいい……どうしても、だれかの首が必要なら、僕をここで殺してもいい」
「あん？……」
鯱は、顎も撫でずにぽかんと口をあけた。
「本気か？」
「戦って何人も死ぬよりはましだ……一人ですむんならね……でしょう？」
「捨てる気か……自分の命を、自分の軍のために……」
「軍じゃないよ……人の集まりさ……帝国にいじめられている人たちのね……どこに属してい

たって同じじゃないか……それが殺し合うのは馬鹿げているよ。まるでこれじゃあ、帝国人民(エンパイアラー)の喜ぶ闘技試合(バトルショー)じゃないか」

元評論家だというナスカが苦笑した。

「確かに闘技試合の大型版かもしれん。だが、反乱軍の統一がなければ、帝国の崩壊(ほうかい)など、夢のまた夢だ……」

「そのために、同じ目的の人同士が殺しあうのかい？……これって変だよ」

「確かに変だが、それしか道はない……違うか？」

オルカが、ナスカに同意を求めた。

「評論家としては、それしかないな。戦いを避けるために、ここで、狼のフィレーナを殺したところで、鯱のフィレーナの評判が落ちるだけだ。狼のフィレーナ……あんたが、殺し合いを避けるために同盟を結びたいという気持ちを、純粋(じゅんすい)に信じてやったとしてもだ。あんたの集団の他の連中を信じることができるかね？　今、あんたは、あんたの集団のすべてがあんたの思うがままに動いてくれると信じきれるかね？……」

「それは……」

フィレーナは、言葉に詰まった。

つい先刻まで、いや、今も自分自身が、なぜ女なのか……そんなことにすら迷っているフィレーナに、この同盟に関する他人の気持ちまで分かるはずがない……そう、分かりっこない……。

「あんたは身体は小さいが、たぶん、あんたのどこかが強いから、他の連中はついてくる。はぐれ蜘蛛のバンニルにしても、あんたの何かを見込んだから、ついてきたんじゃないのかね……」

フィレーナは、はぐれ蜘蛛のバンニルに、目をやった。

「そういうことかな」

バンニルは、肩をすくめるだけだ。

オルカは、けっして威張るふうではなくフィレーナの瞳を見下ろした。

「おれは強い。話し合いなどというせこいやり方はしない。だから、みんなついてきた。口先の強いやつはどこにでもいる。だが、口先だけでは、騙されているのではないかと、いつか相手に疑いを持たれるときがくる。相手は思う。騙されているなら、こちらが騙してやろうとな……。

あとは、ぐちゃぐちゃだ。このぐちゃぐちゃは、評論家のナスカやそっちのはぐれ蜘蛛さんにゃお得意だろうが、闘技士のおれにゃ向かない」

フィレーナは唇をかすかに噛んだ。

確かにオルカの言うのは当たっていた。

「僕も、闘技士だった。だから、ぐちゃぐちゃした駆け引きは好きじゃない。けれど、仲間が死ぬのも御免だ」

「だったら、正々堂々戦うんだな。闘技士らしく戦って決着をつけろ。おれの軍とおまえの軍

とどちらが強いかはっきりすれば、おのずから戦いは終わる。勝ったほうに自然とみんなついてくる。

　だが、戦わなければ、はっきりとどちらが強いかは分からん」

「みんなの前で、一騎討ちするならしてもいいさ」

「それも意味がない。おれとおまえの身体の違いを見ろ。だれが見てもおれが勝ちに決まっている。おれが一騎討ちで勝っても意味がないどころか、勝負の見えている一騎討ちそのものが、卑怯なやり方に見えてしまう。おまえとおれとの軍同士が決着をつけないかぎり、本当の勝負にならん」

「どうしても、同盟は嫌なんだね？」

「おれは、勝ちが決まれば、必要以上に人は殺さん。けじめとして、敵将の首はもらうがね。それが、犠牲を少なくすることになる。だが、それも両軍が戦った後でのことだ。その犠牲すら避けたいと思うなら、おまえひとりで、狼のフィレーナの軍を捨てて逃げることだな」

「それはできない」

　それまでオルカに言わせたい放題だったバンニルがきっぱりと言った。

「狼のフィレーナの軍から今フィレーナがいなくなれば、指導者を失ったわれわれの中で、必ず指導者の座を狙った争いが起こる。それこそ、あんたたちの言うぐちゃぐちゃだ。そこに、あんたたちが来てみろ。降伏か？　戦うか？　仲間割れの殺し合いだ」

　バンニルは、どちらの味方か分からないほど、厳しい口調でフィレーナを見据えた。

「鯱のフィレーナが来る前に、われわれの中で鯱のフィレーナと戦う以上の犠牲者が出ているだろうな」
「さすが、はぐれ蜘蛛のバンニル……指導者のフィレーナよりも先が見えているようだな」
ナスカが冷笑した。
「評論家に誉められてもうれしくはない」
バンニルは苦笑する。
笑えないのはフィレーナだけだった。
「戦うのが、犠牲者をいちばん少なくする方法だっていうの？……」
「互いに正々堂々と戦えばな……後にごちゃごちゃの危険も少なくなる」
バンニルは、うなずいた。
「僕は、何のためにここへ来たんだ……」
フィレーナは、呆然とつぶやいた。
そう言いながらも、オルカは溜め息をついた。
「互いの顔を知っておくのは悪いことじゃない」
「だが……やっかいだな」
「やっかい？」
ナスカが聞き返した。
「おれの軍のほうが数が多い上に、敵の指導者は、見てのとおりの小さくて若いやさ男だ。こ

ちらが勝ってあたりまえ。よっぽど真っ正面から受けて戦ってやらんと、勝ったところで弱い者いじめだとよからぬ評判が立ってしまう」

フィレーナはさすがにむかっとして、オルカを睨んだ。

「針でも間抜けな象の心臓は刺せるさ」

「ほう……」

オルカは顎を撫でた。

「やっと、闘技士らしい台詞になってきたな。ま、闘技士同士、悔いのない戦いにしたいものだ」

それからオルカは、ナスカに言った。

「こいつらに帰っていただけ……無事に生きてだ……戦いの本番まで、だれ一人としてこいつらに手を出すな」

そして、フィレーナに向き直った。

「狼のフィレーナ……おまえさん、どうやら、闘技士病にかかっているようだな」

「闘技士病?」

「ああ、おれも、昔、なりかかったことがある。闘技士は相手を殺しつづけなければ生きていけない。行けども行けども先は血まみれだ。そのうち、殺すのが面倒くさくなる。血まみれからおさらばしたくなる。闘技士が血まみれからさよならするには、自分が負けて死ぬしかない。やがて、死んでもいい……そう思うようになる。自分の命がどうでもよくなる。まあ、一種の

逃避自殺願望の病気だな。あきらかに勝てる試合を投げて、わざと負けて死んでいった闘技士を、おれは何人も見ている」
「僕がその闘技士病だというのかい？」
「ああ、少なくともなりかかっているようだな。しかし、いずれにしろ今回、おまえさんが負けるのだけは確かだがね。……そして、おまえさんは死ぬ」
フィレーナは、オルカの眼差しに、さげすみでもあわれみでもない、どこか、柔らかいやさしさの色を感じた。
「だがな、闘技士だって人間だ。人間はどんなことがあっても生きていたがるもんだ。その気持ちを捨てちゃあ、その闘技士はもう人間じゃあない。いや、人間どころか死にたがる闘技士なんぞ、もう動物以下の何かだ。そんな気味の悪いものを、おれの自慢のあの剣で斬りたくない」
フィレーナは、そこまで言われては、こう答えるしかない。
「たぶん、僕は斬られないよ。あんな剣じゃね」
フィレーナは、オルカを睨んで言った。
「うん、その調子だ」
オルカはうなずいた。
「それでこそ、おれがまともに戦える相手というものだ。闘技士なら最後まで、試合を投げるなよ。闘技士なら人間の闘技士として死んでいけ……」

もう、何も話すことはなかった。
戦うだけだ……。
フィレーナは、決めるしかなかった。
「分かった。僕はあんたと戦うよ」
「そういうことだ。だが、まあ、せっかくここまで来たんだ。空手で帰るのもつまらんだろう。どうだ？　両軍がどこで戦うか、それだけでも決めておくかね？　闘技試合にはそれなりの競技場が必要かもしれん。少なくとも、南部海岸地方の反乱軍の今後の行方を決めかねん大試合だからな」
「いいでしょう」
もうフィレーナにはその答えしか残っていなかった。
ナスカが、机の上に、南部海岸地方の地図を広げた。
バンニルが、地図の一点を指差した。
そこは、狼のフィレーナが嵐のフィレーナを倒した地点からそう遠くない海岸。……しかも、城塞都市デビからもそう遠くない地点……デビから西へ歩いて十四日ほどの距離にある海辺にしては密林やごつごつとした岩地の多い、ラーナピという海岸だった。
「ほう、われわれを迎え撃つ気か。しかもデビに近いな……」
ナスカがつぶやいた。
「不満か？　数の上ではそちらが多い。しかも場所を決めようと言いだしたのはそちらだ。そ

れで文句を言うのかね？」
「いや、この戦いを帝国がどう見るかが気になるだけだ」
ナスカはバンニルではなくオルカに言った。
「どこでもかまわん。帝国は出てこんよ。やつらの苦手な海に近いし、反乱軍同士の戦いには高みの見物が彼らのやり方だ。反乱軍の双方が傷つくのは彼らの望むところだろう。だが、なぜここを選んだ？」
オルカはバンニルに聞いた。
そして言い添えた。
「いや、参考のためだ。言いたくなければ言わなくてもいい。なにか策があるのだろうが、おれは正々堂々、戦うだけだ」
バンニルは、肩をすくめた。
「そちらがどう戦おうと、こちらにはこちらのやり方がある。いくら、闘技士の指導者同士の戦いとはいえ、弱いほうが強いやつと戦うには工夫が許されていいんじゃないか？　それが卑劣な方法でないかぎりはな……それにこの海岸はデビに近いわりには、帝国人の苦手な海が近いせいか、街も村も、属国人の居留地もない。戦いに巻き添えを食う人間はいまい。しかも、どちらか勝ったほうは、負けたほうの軍勢を吸収してさらに大きくなり、その勢いで、デビに攻撃を仕掛けることも可能だ」
「デビ攻略まで計算とは、欲が深いな」

「欲は生きているうちに夢見ておかなければな」
……生きているうちか……
狼のフィレーナ四万対それ以上の数の鯱のフィレーナとの戦い……いったい、どれほどの犠牲が出るのだろう……それでも、やるしかない……。
フィレーナは、バンニルとオルカのやりとりを、なかば呆然として、ろくに聞いていなかった。
「それで、いいんだな？　狼のフィレーナ」
「え？」
我に返ったフィレーナにオルカが聞いた。
「互いの悔いのない準備と戦場のラーナピまでの移動も計算に入れて、戦いは七日後の朝だ。非戦闘員である女子供は互いに危めないこと……」
「日時まで決めて……ほとんど闘技試合だね」
「ああ、帝国人から見れば、ここ数十年で最大の闘技試合に見えるだろう……だが、闘技士はどんな試合も真剣だ。おまえもそうしろ」
「やるっきゃないならやるさ」
フィレーナは少し投げやりに答えた。
いくら投げやりに答えても、全力をかけねばならない戦いになれば、自然と身体が本能的に戦ってしまう自分をよく知ってもいた。

それは、知る人が見ればなんとも奇妙な光景だった。
オルカとナスカは、その後、二人に食事をもてなし、わざわざ、野営地の入り口まで送ってくれたのだ。

＊

「ありがとう……じゃ、また」
フィレーナがそう言って、ぺこりと頭を下げると……、
「頑張（がんば）れよ」
と、オルカがフィレーナの肩を叩く。
とても七日後に戦う敵同士には見えなかった。
月の光に照らされて、夜道を遠ざかる二人の影を見つめながら、ナスカがつぶやいた。
「今回は、気を引きしめてかからねばならないかも……」
オルカもうなずいた。
「はぐれ蜘蛛のバンニルがついているからな……どんな策を取るか楽しみだな」
「それもある。しかし、地方都市ドラの闘技士だと聞いて、思いだしたよ。蚤のフィレーナをね……」
「知っているのか？　あのちびを……」
「ドラって街はな……帝国の東北にある、たいして取り柄のない街だ。だが、闘技評論家の一部では、かなり知られた街でもあった」

た」
「ああ、その街は、中央に来たら必ず超一流と呼ばれるだろう闘技演出家と作家のいる街だった」
「一部の評論家？」
「演出家と作家？」
「演出家の名はバラバ。闘技作家の名は確かネストだ……中央から何度も引き抜きの声がかかったが、なぜか乗ろうとしないままに終わった」
「終わった？　もういないのか？　その二人は……」
「詳しいことは分からんが、もう、かれこれ三年以上昔になるかなあ……何かの事故に巻き込まれて死んだと発表された。評論家の何人かは、一度は、中央競技場で、二人の作・演出の試合を見たかったと残念がったものだ。その二人が、最後に、集中的に手がけていたのが、小さくてやわに見える蚤のフィレーナという男の試合だった」
「あいつか……」
「たぶんな……やつのあだ名は、勝ち進むたびに、蚤から確か、教師殺し、兄殺し……そして、中央闘技士進出まであといくつか試合を残すだけになったとき、さっき言ったふたりと同じ事故で死んだことになっている」
「じゃ、ありゃ幽霊か？」
「そのほぼ一年後、首都ボーの神殿が破壊され……それをやったのはそのドラ出身のフィレーナだという噂がたった」

「あの男が、今の反乱騒ぎの元になった元祖フィレーナだっていうのか？」

「そんな噂もあるってことさ……だが、本当にあいつが、蚤のフィレーナなら……」

「蚤より小さい虱に見えるがね……」

オルカの顔に、もう笑いは浮かばなかった。

「蚤であろうと虱であろうと、一流の作家と演出家の闘技試合をやっていたことになる。作家と演出家の腕がよければ役者は育つ。たとえ小都市の闘技試合だろうと今まで生きているということは……ただの一度も負けたことがないということさ……」

「一流の作家と演出家に目をかけられ……今は、一流の流策士がついているわけか……」

オルカは、フィレーナの消えていった方角を見つめた。

そして、軽く言った。

「面白い……なあ。そう思わんか？」

ナスカに同意を求めた。

「ああ、評論家にゃ予想のつかん試合になりそうだ」

ナスカは肩をすくめて苦笑した。

＊

「何の役にも立たなかったね。オルカに会っても」

野営地への帰り道を急ぎながら、フィレーナはバンニルに言った。

「でもない……」

「え？」
「最初は、あんたが突然現れて困った。だが、今はあんたがオルカと会ってくれてよかったと思っているよ」
「どうして？」
「あんたへの態度で、少なくともオルカという男の性格は分かった。この戦い……勝てるぞ」
「そう……」
フィレーナは、正直、勝ち負けはどうでもよかった。
いちばん気になることをつぶやいた。
「で、両方でどれぐらい犠牲が出そうなの？」
「出るね。かなり。その覚悟は必要だろうな。……嵐のフィレーナのときのようにはいかないだろう」
「かなり……ね……」
「それでも、おれとしては、考えられる最小限の犠牲だ。……戦う以外に、犠牲を最小限に止める方法はないのさ。この戦いを逃げたところで、それは一時の避難にすぎないだろう。この先、南部海岸地方の反乱軍を待っているのはもっと大きな犠牲になるだろう。反乱軍のそれぞれが、内部分裂を繰り返し、結局、弱ったところを帝国に踏み潰される。いいか、フィレーナ。われわれの敵は帝国なんだ。帝国と対峙するには、反乱軍が多少の犠牲を払ってでも、一刻も早く最強の指揮者の下でまとまるしかないんだ」

フィレーナはうなずくしかなかった。

「だろうね……それは、耳に繰り返し録音装置（エンドレステープ）をつけられたほど、あんたとオルカから聞かされたよ」

そして、大きく伸びをした。

「あ〜あ……嵐のフィレーナなんかに勝つんじゃなかった……なんて思うよ」

「残虐（ざんぎゃく）非道（ひどう）を絵に描（か）いたような嵐が、あんたに勝って、オルカと戦えば、とんでもない数の犠牲者が出る」

「で……直接、オルカにつかなくて僕を選んだんだね。迷惑していますよ」

「おいおい、弱気になるな……狼のフィレーナを選んだはぐれ蜘蛛のパンニルの目を節穴……だとは思われたくない。はぐれと呼ばれるのも、そろそろこれで最後にしたいんでね」

「はぐれが嫌なの？」

フィレーナは意外そうに聞いた。

策を作るという人の目に見ることのできない才能だけを売り物にして、気に入った反乱軍を渡り歩き、住みごこちが悪いと別の居場所を捜（さが）して世界を渡り歩く。

フィレーナは、パンニルを、自由で気楽な生き方だな……と羨（うらや）ましく思ったこともあったのだ。

「はぐれ疲れたのかな……こう、行く先々、ろくでもないやつばかりだと、はぐれ歩くのにも飽きてくる。ここらで我慢しておこう思ったのかもしれんね」

「僕は、ここらで我慢の口なのか……」
フィレーナは苦笑した。
「さあ、どうかな」
バンニルは、自分に問いかけるように言った。
フィレーナは、前を行くギャッピーの後ろ姿を見つめた。
あたりに危険がないかを確かめながら、それでもゆったりと落ち着いて進んでいく狼犬(ウルフドッグ)。
「ギャッピーはいいな……」
「ん？……」
バンニルも突然フィレーナの口からでた狼犬の名につられてギャッピーを見た。
「その気になれば、どこに行くにも、一人で自由でしょう？　ほんとうに一匹狼(いっぴきおおかみ)で生きていける」
「そうかな……あの狼犬は、そう思っているのかな？」
バンニルが言った。
「え？」
「伝説だと、あの狼犬の先祖の狼って古代動物は、確かに一頭の力も侮(あなど)れぬものがあったらしいが、群れをなしていたからこそ、さらに恐れられ強かったらしい。一匹狼は、群れの中で役にたたない狼が、群れについていけず、やむなく一頭で生きている姿だそうだ。それも決まって雄の狼だ」

「雄？……男？」
「ああ」
バンニルはうなずいた。
「雌は子供を生み育てる。子を守るためには、どうしても群れの中で生きなければならない。いや、群れには雌が必要なんだ。子孫を絶やさぬためにな……だが、雄は、一匹や二匹、群れから消えても何の影響もない。むしろ、役たたずは邪魔なだけだ」
「邪魔なだけ？」
フィレーナは、いささか気分を害した様子で言った。
「ギャッピーは、役たたずじゃない。きっと狼犬の群れの中でもね」
「あの狼犬がそうだとはいわんよ。だが、ほんとうは群れにいたいんじゃないのかな？」
「え？」
「しかし、この世界に狼犬がほとんど絶滅しかけている……いや、あちこち歩き廻っていることのおれが狼犬を見た覚えがあるのは十年以上前だ。それも剝製でな……もしかしたら、おまえさんの狼犬は、この世界で一頭しかいない狼犬かもしれん」
「この世界に一頭しかいない？」
「それは大袈裟にしても、あいつは、仕方なく一匹をやっているんじゃないのかな？」
「群れを作ろうにも、その数がいないからっていうの？」
「たぶんな……それにあいつは雄だろう？」

「ああ……女じゃない」
　フィレーナは雌とは言わなかった。
「雌の狼犬にしたって、もうこの世界にはほとんど生き残っちゃいないだろう。群れを作りようもない……群れにはぐれた雄の一匹狼なんていうのは、けっこう辛いところがあるさ。人間も動物も……」
　バンニルはギャッピーを見つめてつぶやいた。
「そして、もしかしたら蜘蛛もな……」
「男の一匹は辛くて……女には群れが必要か……子供を守るために……」
　フィレーナは、大きな溜め息をついた。
　二人が、野営地に着いたとき、その女というものの一人に違いない百九十二番目の女は、まだ、月の光を浴びながら嵐のフィレーナの墓を見つめて動かなかった。

＊

　フィレーナとバンニルは、狼のフィレーナの幹部級に、オルカとの会見の結果、鯱との会戦は避けられなかったと告げ、戦いの場所と時を知らせた。
　そして、作戦は、追って指示すると告げた。
「この戦いから逃げたいものは逃げていい。狼から乗り替えて、鯱につきたいものは出ていってもかまわない。どちらにしろ、今のうちに決めてくれ。でなければ、戦いに巻き込まれて望みもしない墓場行きの切符を握らされることになる」

バンニルの言葉に、一瞬の動揺が広がった。
が、すぐに収まった。
戦いが決まった以上、いまさら、狼のフィレーナと鯱のフィレーナを秤にかけて、鯱を選んだところで、狼のフィレーナを裏切って鯱のフィレーナについた者を、オルカは重用しないだろう。
一度、裏切った者は、二度目がないといいきることなどできないからだ。
そんな危険人物をオルカがこころよく迎えるはずがない。
裏切るぐらいなら、狼のフィレーナについていたほうがましだ。
戦いから逃げることもできない相談だ。
集団から離れたら、すぐに衣食住に困り、やがては、帝国の反乱軍狩りの手にかかり、女も子供も遅かれ早かれ処刑されてしまうのは目に見えていた。
それに、狼のフィレーナは、嵐のフィレーナを倒すという奇蹟を目の前でなしとげた男だ。
たとえ、相手が、数の多い鯱のフィレーナだとしても、奇蹟が、二度、起こらないとも限らない。
まして、バンニルとたった二人で、敵陣の真ん中へ行き、敵将と話し合いをし、傷ひとつ負わずに帰ってくるという離れ業をやってのけたのだ。
……狼のフィレーナなら勝てるかもしれない……
狼のフィレーナは、集団のすべてから期待されていた。

ほとんどが、狼のフィレーナについていく気持ちを変えようとはしなかった。
だが、その気持ちに変わりはないにしろ、帰ってきた二人に立ちすくんでしまったのは、スパタだった。
もはや、副指導者などという名は肩書きにすぎなかった。
幹部のだれも、スパタの弁舌に耳を貸す者はいない。
ナンバー2の座は、完全にバンニルだった。
そして、もし、フィレーナが鯱に勝ちでもしたら、当然、フィレーナは、負けた鯱の軍の中からも幹部を選ぶだろう。
そうなれば、幹部は砂利のような数に増え、スパタは、その中の石ころの一つになってしまう。
戦いの勝敗が決した後で、いくらフィレーナを男として誘惑(ゆうわく)しても、女帝に取りいる宦官(かんがん)ほどにしか見られないだろう。
スパタの戦いは、鯱のフィレーナとの戦いの前に、仕掛けられなければならない。
スパタは、その機会を窺(うかが)いつづけた。
戦いの日が五日後になって、鯱のフィレーナの大集団は、ラーナピの海岸に向かって移動を開始した。
狼のフィレーナの集団は、目立った動きはなかった。
バンニルは、自分の天幕の中に籠(こ)もって作戦を練っているのか、一歩も出てこなかった。

百九十二番目の女も墓の前から動かなかった。

絶食はもう十日を越えていた。

フィレーナはギャッピーを連れて、海岸に行っては、海を見つめていた。

作戦はバンニルにまかせっきりでいいと思っていた。

勝つにしろ負けるにしろ、結果はいやでも五日後に出る。

それは、生きるか死ぬかの結果でもあった。

だから……。

生きている今は、女であることを含(ふく)めて自分が何なのかということだけを、考えてみたかった。

……僕は何なんだ……戦う機械、闘技士(バトラー)から……ある日、フィロセラの王家の末裔(まつえい)……脱走(エスケープ)奴隷から……ある日、反乱集団の指導者……

肩書きらしいものは、つけようとすればつく。

……だけど、僕っていったい、何なんだ……

押しては返す波のようにフィレーナは自分に問いかけた。

答えが出るはずもなかった。

海もそれには何も答えてくれそうになかった。

第4章

戦いの前夜

南部海岸地方の地方庁所在都市デビ……。

「五日後に、ラーナピ海岸で、狼のフィレーナと鯱のフィレーナが戦います。他の小反乱暴徒どもも、その結果いかんで、どちらかと同盟を結ぶべく、移動を始めています」

戦いの情報は、デビの上層部にも届いていた。

フィレーナもオルカも、戦いの場所と日時を隠しはしなかった。

いや、むしろ、発表こそしなかったが、南部海岸地方の反乱暴徒集団に呼び掛けたい気持ちだった。

ラーナピの戦いの結果で、南部海岸地方最大の反乱軍が決まる。

南部海岸地方の他の反乱暴徒集団とは、一桁、いや二桁は違う大集団だ。

そうなれば、もはや、この南部海岸地方に線香花火のようにちらついている他の反乱暴徒集団が、いかに勢力争いを挑んできても勝てる相手ではない。

南部海岸地方における反乱集団同士の勢力争いの覇者は決まったも同然なのだ。

南部海岸地方に駐留している帝国軍全軍をもってしても、簡単には攻撃鎮圧できない規模だ。

ならば、今までのように、小さな反乱集団がそれぞれ帝国軍と戦いつづけるのは無意味な危険に身を晒しているのに等しい。

ラーナピの勝者と合併し、ともに戦えば、堅守を誇る城塞都市デビを攻めるに足る大勢力になるのだ。

それは帝国全土で見ても五本の指に入る大反乱軍だ。

どの反乱集団にとっても合併がいちばん得策に思えた。

狼か鯱か……反乱軍における自軍の位置をよくするためにも、勝者が決まりしだい、合併を申しでようと、小規模の反乱集団は、先を争うように、ラーナピへ向かって動きはじめた。

ラーナピの戦いで、仲間割れともいえる反乱集団同士の戦いは終わりを告げる気配だ。

それが、戦いの場所と時を隠さない最大の理由だった。

デビ市駐留軍ブロム守備司令官は、市上層部の長老たちに吠えるように叫んだ。

「反乱軍のほとんどがラーナピに集結するこの機会こそ、どんなことがあっても逃してはなりません。一気に殲滅するのです」

だが、長老の一人が諦めきった顔で首を振った。

「しかし、反乱暴徒どもは、海岸で戦う。いくら同士討ちで弱っているとはいえ、汐の匂いの苦手な帝国軍兵士は防御マスクや防御鎧が必要で、われら帝国軍も海のそばでは、それほど自由に戦えるわけではないぞ」

「海の近くで動けるものが、出ていけばいいのです」

「動けるもの?……」

　ブロム守備司令官は、うなずいた。

「そうです。われわれは『竜』を持っている」

　いうまでもなく「竜」は、旧式の中型戦車の通称だった。

　確かに旧式とはいえ、帝国人の体質に合わない海岸の大気から身を守る防御装置は、当然ついている。

「竜」の中にいる限りは安全といえた。

「『竜』?……しかし、この要塞(ようさい)都市は守備力優先で、『竜』は中古が二台しかない」

　長老の一人が言った。

「二台あれば充分です」

　ブロムはこともなげに言った。

「馬鹿(ばか)な……いかに堅固な装甲の『竜』でも旧式では、大型の白熱光線(ホワイトレイ)の一斉照射(いっせいしょうしゃ)を機関部に集中して浴びれば一時間と持たん」

「だが、『竜』は小型超爆弾(ウルボム)を撃てます」

　一同にどよめきが起こった。

「小型超爆弾だと?……」

「そのとおりです。ラーナピに集まった南部海岸地方の反乱暴徒どもに、小型超爆弾を四、五発ぶちこめば、根こそぎ消滅(しょうめつ)させることができるでしょう」

「しかし、超爆弾使用は禁止されている」

ブロムは、長老たちを冷ややかに見回し言った。

「数日前、デビ市庁上層部から、帝国上層部へ嘆願書が届きました。それには、反乱軍掃討のための超爆弾の使用許可の要求が書かれていました」

「デビ市庁上層部？……いったいだれがそんな嘆願書を書いたんだ」

長老たちは互いを見つめ合った。

「さあ、だれでしょうね……当然、帝国上層部の答えは否です。超爆弾は、破壊した地を数百年、使用不能にする悪魔の兵器です。それを、たかだか、南部海岸地方などという僻地の反乱鎮圧のために許可するはずもありません」

「当たり前だ。超爆弾が使えれば、われわれはこんな苦労はしない」

「だが、この嘆願書によって、帝国中枢は、デビ市庁上層部に、反乱鎮圧のためには、超爆弾使用もやむなしと考える危険分子のいることを察知しました」

長老の一人が、ブロムを見据えて聞いた。

「守備司令官、君は何を言いたいのかね」

「南部海岸地方で、いくつか超爆発が起こりうる危険性があるということです。そして、反乱暴徒のほとんどが消える」

「中央が何と言おうと、それは、望むべくもないことだが……」

長老の一人は苦笑した。

「あいにく、この要塞都市には、超爆弾の持ち合わせがない」

「超爆弾はなくても『竜』はいる。『竜』の最大の特長は小型超爆弾を撃てることですよね……。

……それがなければ、足の鈍いうえに小回りの効かないうすのろの金属の塊りにすぎない。あれが、この地に配置されたのは、確か二十年ほど前と聞きおよびますが、何のためです？」

当時を知る長老たちは黙った。

「二十年前、今でこそ帝国秘密になっているが、南部海岸地方に最後まで、帝国に抵抗を続ける小国家があった。……その抵抗に手を焼いた当時の討伐軍の上層部は、超爆弾で一気にけりをつけたかった……。

が、超爆弾は禁止されている。さて、どうしたものか」

ブロムは、長老たちを見回した。

「その当時、小国家攻撃のため、『竜』は無数に配備されていた。小型超爆弾の使えない『竜』は、狭い地域戦や海上戦が主だった小国家との戦いには無用の長物に近かった。……しかし、それでも使い道がないわけではなかった。『竜』の数に紛れて、いくつかの『竜』の腹の中に無断で四、五発の小型超爆弾がまぎれ込んでいても、気がつくものは少ないでしょう」

「二十年も前の話が何の関わりを持つのかな」

長老の一人が聞いた。

ブロムは、芝居気たっぷりに長老たちを指さした。

「持ち込んだのは、当時の作戦指導者だったあなたたちのだれかだ……結局、その小国家は、小型超爆弾を使わずに壊滅させることができた」

「そのとおり、われわれは小型超爆弾など使わず、莫大な犠牲を払って、きれいさっぱりフィロセラという海上都市国家を、帝国の歴史から消し去った。それがどうかしたというのか？」

「さて、討伐用の兵器を引き揚げる段になって、困ったことになった。その戦いに使用された兵器量の監査が当然、帝国中枢で行われる。そうなれば、無断で小型とはいえ、超爆弾を持ちこんだことが発覚してしまう。持ち込んだはいいが、出すに出せず、結局、この都市に残されたたった二台の『竜』の腹に隠されたまま、今日に至った」

「推測に過ぎん。着任して数年のあなたが、それを知っているはずがない」

長老の一人が語気荒く興奮して言った。

「そのとおり、私は知りません。しかし、守備司令官の任地のことをよく調べておくのは着任者としては当然のことです。それでも小型超爆弾までは気づきませんでしたね……」

ブロムは、冷たい笑みを浮かべた。

「だから、この戦いに、その小型超爆弾が使われるなど、知るはずがない。この要塞都市デビが隠し持った二十年前の小型超爆弾が、今回、役目を果たすことになるなど、この私が知っているはずがないではありませんか」

長老たちは、黙った。

「しかし、一般論として、爆弾は、腐りませんからね……二十年前のものでも……あ、それか

ら、二日前から、二台の『竜』が行方不明で、守備隊が今、捜索中です……」
場内はざわめいた。
「おそらく、あなたがたのだれかが指図する帝国兵が、反乱軍を抹殺するために、軍紀違反を犯し『竜』を持ちだしたのでしょう」
「かまわんではないか！」
長老の一人の声が、凛と響いた。
「だれがそれを指図しようと……そのために責任を取るものが必要とあれば、老い先短いこの命、喜んで捧げよう。二十年前の、われわれの悲惨を繰り返してはならん。反乱軍は、今のうちに、殲滅すべし……だ」
ブロムは、ほくそえんだ。
「竜」を発進させたのは、他ならぬブロムだったのだ。
……だが、責任は、こいつらが取ってくれる……思いどおりの展開だ……
しかし、ブロムは、表情を引きしめ厳しく言った。
「困ります。私は、あくまで帝国軍人であり、帝国中枢に従う義務があります。全力で、『竜』の小型超爆弾攻撃を阻止し、あなたたちの中から、計画立案者を見つけ出し処分します。かつ、反乱軍をも最善を尽くし、鎮圧する所存です」
長老の一人が皮肉を込めて言った。
「あんまり忙しいと、過労で倒れますぞ……守備司令官殿……」

この長老は、だれが「竜」を発進させたか気がついているようだった。
ブロムが、僻地の守備司令官から中央に戻るためにあえいでいる画策のひとつであることを……。
……だが、この長老にとってはどうでもいいことでもあった。
ともかく、南部海岸地方を守る僻地帝国人の悲惨だけはフィロセラ攻略のときだけでたくさんだった。
どんなことをしてでも止めたかった。

*

しかし、要塞都市、デビの面々の思惑を越えて、彼らは知っていた。
「小型超爆弾が五発……」
「それで、南部海岸地方の反乱はほとんど無力化します」
首都ボーの政経地区にそびえたつ、デビス帝国中枢総合病院……その地下二十階にあるこぢんまりとした会議室で、数人の人たちが、話しあっている。
それぞれは、黒い兜で顔を隠していた。
総合病院の地下十階から下は、人命を救う病院という名からは、およそかけ離れた用途に使われていた。
帝国機密情報兵団……通称「黒い悪魔」の最上層本部がここにあった。
壁には、南部海岸地方を映しだした情報映像画面がある。

集まった数人の「黒い悪魔」は、南部僻地担当の上層部だった。
「帝国の禁止令を無視してまで、小型超爆弾が使われる可能性が現実になったわけだ」
「すでに二台の『竜』が発進しています」
「何年ぶりかな……超爆弾の威力が、人目に晒されるのは」
「あっという間に、帝国全土に広まるでしょうな。帝国人民にもその使用の是非論が沸騰するでしょう」
「威力を知った他の地方の反乱集団も超爆弾の使用を恐れ、今までのようにやすやすと反乱活動を企てることもなくなるでしょうな」
「帝国全土の反乱軍への脅しになるわけだな……」
「いずれにしろ、南部海岸地方のラーナピ海岸の周辺に、生物は数百年住めなくなる。小型とはいえ、五発も超爆弾が炸裂するのですからな……」
「いずれにしろ、帝国上層部の超爆弾の禁止は絶対だ」
「今、帝国全土の反乱が減少するのも、上層部の意に反している」
無個性な声が、次々と黒い兜の口の部分から飛びかった。
「なぜ上層部は、反乱を徹底的に鎮圧しようとしないのでしょう？」
はじめて個性を持っているかに見える疑問が、一人の口から出た。
「知らんね……われわれは、上層部の命令どおり動くのが仕事だ」
「では、当然、小型超爆弾の使用を阻むわけですな？」

そのときだった。
「いいや……一発は発射させるのだ」
黒い悪魔とは別の声が響いた。
会議室のどこから聞こえているのか不明だが、それは静かな普通の音量だった。
だが、黒い悪魔の上層部にとっては、腹の底から重みを持って聞こえる声だ。
女とも男とも、いや、それどころか、人間か機械かも判断のできない声……帝国指導者の声だった。
黒い悪魔たちは凍ったように直立し、見えない指導者の声に敬礼した。
「楽にして聞いてくれ……」
だが、けっして楽とはいえない硬直した動きで、黒い悪魔は、着席した。
帝国指導者の声は、続いた。
「小型超爆弾の炸裂は、要塞都市デビの命令違反を意味する。帝国機密情報兵団は、要塞都市デビを壊滅するのだ……」
「要塞都市デビを壊滅させる？……」
黒い悪魔の一人がつぶやいた。
「あの要塞都市は、超爆弾でも破壊は不可能だ。そのようにわれわれが作ったのだからな……二十年前における防御都市としては最強の都市だ。だが、なんのために作られたか……そのときが来た。帝国機密情報兵団は、今回、新兵器を使うことになるだろう」

黒い悪魔たちは、表情のない兜で互いに顔を見あわせた。

二十年前、フィロセラがこの世界から消えてから、帝国に敵はいない。したがってバリエーションとしての兵器の進歩はあっても新兵器と呼ばれるほど、画期的なものはなかった。

「新兵器にまだ呼び名はない。開発中のものだ。ただ、超爆弾とははるかに違う、まさに神が作った兵器ともいえるものだ。……うまくいけばな……」

そこまで言って、声は黙った。

その声は、続いて、別の会議室に流れた。

「南部海岸地方の課題にもまして、諸君の機敏な行動が要求されるのが、この任務だ」

その会議室は、首都ボー担当の、首都圏帝国情報機密兵団の上層部が集まっていた。

「反乱の情報誌『フィエーブ』は、首都治安警察に追いつめられた。生かして逮捕しろが命令だが、一般帝国人警察官の反乱軍に対する反感を見れば、そのとおりいくとは思えない。殺すなら帝国情報機密兵団が手を下すのだ」

黒い悪魔たちは、上層部でもたまにしか耳にすることのできない帝国指導者の声を、黙って聞いていた。

＊

首都ボー……。

三日後の夜……。

それは、遠い南部海岸地方では狼のフィレーナと鯱のフィレーナの戦いの前々日でもあった。

メガデラシーナに生きる人々の終着駅……。

ただ墓地という、直接的な呼び名しかない墓地の丘は、文字通り、終点を迎えようとしている人々でごった返していた。

首都警察の絨緞捜査に追い詰められた人々の逃げ場は、結局、最後はここしかなかった。反乱暴徒の群れからちりぢりになった生き残りたちがいる。

警察に身元を知られたくない世捨て人もいる。

捕まれば、死刑が確実の犯罪者もいる。

みんな、それぞれの意味で、帝国の社会に対して脛に傷を持つ人々ばかりだった。

空に三つ光る月は、それぞれ、満月に近かった。

墓場には逃走に疲れ果てた数千の人々が、なかば呆然と坐りこんでいる。

これだけの人数が、肩をすりあうようにしているのだから、いさかいのひとつやふたつ、起こっても不思議ではないのだが、もはや諦めきって喧嘩をする気力もないのだろう……うつろな眼差しでうつむいている者がほとんどだった。

静かだった。

これだけ多くの人がいながら、だれもが無言だった。

生きていながら、その静寂は死者の溜まり場、墓場そのままだった。

そんな中にラズルもいた。

そして、そこから数十歩ほどしか離れていない無名の墓石の下にリラとネストもいた。

だが、この人波の中では、互いの居場所に気づくはずもなかった。
ネストはここ数日、リラが買ってきた酒を、かたっぱしから空けていた。
だが、絶えず携帯通信電算機に表示される反乱軍の動向を、今にも蕩けそうな眼ではあったが見つめていた。
そして、ときおり、操作鍵盤を緩慢な動きで叩いていた。
狼のフィレーナと鯱のフィレーナの戦いが起こることも、狼のフィレーナの中に、バンニルという優秀な流策士がいるのも、携帯通信電算機の資料から知った。
そして、バンニルと同じような言葉をリラにつぶやいた。
「おそらく、おれの知っているフィレーナは勝つね……この戦いに……」
しかし、この墓場に追いつめられている二人には、携帯通信電算機の表示を見つめるほか、何もしようがなかった。
ネストはリラにぼそりとつぶやいた。
「そろそろ、おまえさんのお守りも終わりが近づいたようだな」
「お守りをしてたのどっちだっけ……」
リラには覚悟ができていた。
けれど、最後まで、明るく振る舞うことに決めていた。
「ま、それを言われると、おれとしてはこうするよりない」
酒瓶の蓋を開け、呷り呑んだ。

リラは肩をすくめた。
相変わらずのネストの仕草だ。
いままでは、酒瓶を取り上げることだけに夢中だったリラだったが、最後が近い今ぐらいは、しらふでいてほしい気もした。
だから、今まで何度も繰り返してきた台詞を、もう一度言った。
「どうして、そうお酒ばかりなわけ？　そんなに美味しいの？」
いつも答えは決まっていた。
……これ以上、おれを酔わせるものが、他にあるかね？……
だが今日は、違っていた。
「旨いと思って飲んだことはない」
リラはぽかんと口を開けた。
「この期に及んでよく言うよ」
ネストはふっと息を吐いて苦笑した。
「それでは警察が踏み込んでくる前に、言っておこうか……おれと酒のつき合いについて……おまえにも酒でずいぶん迷惑をかけたからなあ……」
「分かってはいたんだ……よろし……」
リラは、こくりとうなずいた。
ネストはとろんとした目で、リラを見据えて……、

「めったに喋らん演説だから、茶々をいれるなよ」
「酔っ払いの戯言にお茶はいらないでしょ？」
「それが茶々というんだ……黙っとれ」
「御免」
リラはちょこんと舌を出してから謝った。
「よろしい」
ネストはうなずいて話しはじめた。
「おれは……そう、早い話が、真面目に人とつき合うのが面倒だから、酒を飲みはじめた」
……人とつきあうのと、酒と、何の関係があるのだろう……
リラは首を捻った。
「要するに、しらふじゃ人とつきあえないってことだ。だが、人は人とつきあわなけりゃあ、この世界じゃやっていけない。だが、おれのまわりにいる連中は、しらふでつきあえるような連中じゃない」
「私も……そうなわけ？」
「まあ聞いていろ……こいつは、おれの若いころの話だ……」
ネストは、空の三つある月の、真ん中にあるほとんど満ちている月を見上げ、静かな口調で話しはじめた。
「おれは、軍人の家系に生まれた……それも、帝国では、かなり上の階級のだ。

だから、子供のときから、家に出入りするいろんな軍人を見てきた。だが、若かったおれには、そいつらが皆同じに見えた……。父にへつらうやつ、威張るやつ、とりいるやつ、利用するやつ、だが、みんな同じに見えた。

目先の生きることだけに汲々としている。ばかに見えた。そいつらが可哀そうに見えた。やつらの考えていることの先が見えた。そして、やっぱり、おれの考えていたとおりにやつらは行動する。……やつらが欲しいのは、自分の金と名誉と権力だけだ」

……金と名誉と権力……三つ揃いの服のようなありふれた言葉だが、奴隷だったリラには、遠い世界の話だ。

けれどリラは、なにも聞かずにネストの話に耳を傾けることにした。

「軍人が、金と権力と名誉を求める……。

そこには何の意外性もない。軍人の世界だからこうなのかとも思ってみた。

軍人とのつきあいに飽き飽きしたおれは、家系とは、別の世界で生きようと思った」

「それで闘技作家に……？」

ネストは肩をすくめた。

「まあ、それも、闘技作家になった、いろいろな理由の一つだ。

当時のおれにとって、芸術や芸能の世界は、軍人とはまったく違う不可思議な世界に思えた。だが、その世界もこの帝国では軍人の世界と変わりはしないのが、すぐに分かった。

目先の名を追いかけるか、芸もないのに口だけで生きるやつか、わずかな儲けのために恥も

知らず妙な仕事を持ちこみ人を騙すやつ……しかも相手を騙していることに自分自身が気がつかないおめでたいやつもいる。そのときは夢中なのだ。やつらも……。

だが、鍍金が剝げると、すぐに居直る。

……他のみんながやっていることだから、何が悪いんだ……と、罪の意識すらない」

ネストはふっと笑った。

「おれは相手と少し話すと、そいつがどんな人間か見えてしまうんだ。そのころは、勘が鋭かったのかもしれんな。

ともかく、先の見えているやつを相手にするのは面倒臭いもんだ。

会ってしばらくすると、必ずそんな相手がばかに見えてくる。可哀そうになってくる。

なぜなら、そいつらはそいつらなりに必死だからだ。いいかげんな生き方を必死で生きている……そして、なにより哀れなのは、人を自分と同じ次元で見るってことだ。

金の欲しいやつは、相手も金が欲しいと思っている。権力の欲しいやつは、相手も欲しがっていると思っている……。

金と権力を見せれば相手が尻尾を振ってついてくると思いこんでいる」

リラには、何だか、ネストの話自体が、面倒臭く感じられた。

奴隷は、尻尾を振りたくなくても帝国人民の言いなりだ。

言いなりになりたくなかったら、自殺という名で自分を殺して死を選ぶしかない。

けれど、生きていたいから、主人の言いなりになる。

それしか、生きていく方法はない。
奴隷が生きている理由は簡単だ。
生きていたいから……死にたくないから……それだけだ。
生きていく上でつきあう相手が、どうたらこうたら考えを巡らせる余裕なんてない。
そんな奴隷だったリラにとって、ネストの言うことは、しょうもなく面倒だ。
帝国人って、生きていくっていう理由に、いちいち理屈が必要なんて大変だなあ、といささか呆れてしまう。
なんだか、リラは話を聞くのに面倒疲れて、眠くなってしまった。
だが、ネストは静かに話しつづける。
リラに話しているのではなく、自分に話しているのかもしれなかった。
「だがな、そんな馬鹿とつきあわなければ、物が作れない時代だ」
「だったら、作らなければいいのに……」
リラは、少し投げやりに、しかし、相手を傷つけない程度の軽さで言った。
「そうもいかんのだよ。おれは、軍人を捨てた以上、別の何かにならなくてはならない。軍人として生きる以上のな……それが、自分に対する約束だ」
リラは、昔、ドラの街で、フィレーナの目を治してくれた、キルという医者が話してくれたネストの闘技作家になったいきさつを思いだしていた。
ネストの好きだった女の人は、芸術家志望だった。

だが、自分の才能に絶望して、薬に溺れて死んでしまった。

キルという医者は、ネストが芸術家になることでその女の人の夢をかなえようとした……と言っていた。

「約束って……女の人への約束でしょう？」

「どこで聞いた？」

「女の子は、こういう話って、奴隷でも耳は探知機」

ネストは、ふっと笑った。

「死んだ女への約束は、結局、自分への約束だ。

だがな、帝国の芸術、芸能の世界なんていうのは、ほとほと下らんやつばかりだ。

しかし、そいつらとつきあわんと物が作れない。芸術、芸能には金がかかるのでな。……そして、その金は、働いて稼ぐほどのものじゃない。帝国の芸術なんていうのは、しょせんは、帝国人民へのなぐさみものだ。汗水たらしたまともな金で作るもんじゃない。

金を出すやつらも、一攫千金を狙う詐欺師か……自分の所属する芸術組織の中での出世しか考えない物作りとは無縁の人間ばかりだ。

やつらは、儲けを優先させるから、物作りに口を出す。

そのくせ、悪い結果が出たときは自分の間違いに気がつかない。

気がついても人のせいにする。

金や権力や名声に執着しているやつは、どんな酷い物を作ろうが、金と名声と権力が手に入

りさえすれば、それだけで、有頂天だ。

その作り出したものが、どれほどの人を傷つけ、どれほどの悪影響を後に残すか考えていない。いや、その罪の意識すらない。

みんなまわりがやっていることをやってなにが悪い。

そして、失敗したとわかったとたん逃げ出す……見れば見るほど、哀れな連中だ。それが、おれには、見えてしまう……」

……視力がよかったんだ。おじさん……。

リラは、そう言おうとしたが止めた。

リラは、あくびが出そうで、嚙み殺すほうに気を使ったのだ。

「そんなやつらとつきあうには、酒でも飲んで、思考をダウンしなきゃ、面倒臭すぎて、心身症でも起こしてこちらが自殺してしまうかもしれん……。

何が悲しくて、こんな馬鹿とつきあわなきゃならないのか……ってな」

……わたしゃ、何が悲しいって、面倒くさいよ。こういう話……

リラは、こめかみを、ぽりぽり掻いた。

ネストは酒を、ぐいっと飲んで、苦笑した。

話は終わりそうにない。

酒にも酔っているだろうが、自分の話にも酔いだしたようだ。

「馬鹿のために自殺するのは、馬鹿の上を行く馬鹿だ。

だから、気持ちをごまかして、馬鹿とつきあうためには酒が必要だった。

それが、十代のおれだったかもしれない。だが、そのうち、気がつきはじめた。そう思いつつ酒を飲んでいる自分が、何も作っちゃいないことをな。あわてたね……。で、自分がなにを作れるか捜すためにまた酒を飲んだ。

……人から何と言われようと気にならなかった。

気になるのは自分だけだった。

自分は何が作りだせるか……それだけだった。

やがて、酒が身体に勝ちはじめた」

リラは、眠気で蕩けそうな瞼を、指で吊りあげた。

ネストの口調が、静かなだけ、催眠術の呪文か、歌詞の分からない子守り歌のように聞こえた。

ネストは続ける。

「すると、馬鹿とつきあって腹をたてることが、酒を飲む口実になりだした。そのうち……気がつくと、おれの後ろに転がっているのは酒瓶だけだったことに気がつく。

おれは、自分が何を生みだせるか酒を飲みながら考えることに夢中になった。

考えることが先か、飲むことが先か、ここらは卵と鶏……どっちが先か分からん……。

けれど、考えるだけで、何も生まなかった。

だが、それに気がついたときは遅かった。

それから先、何を生みだそうとしても、ほとんど結果が見えていた。
わざと無理をしてものを生もうとしていた。
闘技の脚本を書くことも、恋愛することも、生きることも、おれの中から自然に生まれたものじゃない。
何かを生もうとしてわざと仕掛けて作ったものだった。
それが、失敗にしろ成功にしろ、結果は最初から分かっていたことをやっただけだった。
だから、成功しても、何の感動もなかった。
成功するのが当たり前のことを、成功しただけだからな。
たとえ失敗しても、そうなる結果はわかっていたから、けっして傷つかない。
しかし、自分のしたことに感動しなければつらいから、酒を飲んで頭を麻痺させようとした。
また酒瓶がずらりだ。
そのうち、感動したいと思うことさえ、面倒になった。
感動したいという気持ちを忘れるには、やっぱり酒だ……忘れるために酒を飲んだ。
そのうち、飲んでいるときのことは、きれいさっぱり覚えていない自分に気がついた。
これは、恐いが楽でもある。
覚えているのは、自分にとってそうとう、重要なことだけだ。
無理をしていたおれの他人との関わりは、酒の中でどんどん忘れ去られていく」
リラは、眠気の中で、ぼんやり思う。

ごちゃごちゃ思うなら、止めりゃあいいのよ……ね、ものを作るなんて。女の子は、ごちゃごちゃしないでも、できるときは、子供を作っちゃうわ……。

ネストは続ける。

「酒に酔うと、単純にやりたいことだけが心に残ってくる。だが、それは、一時の幸福にすぎなかった。酒は、身体をむしばみ、やりたいこともできなくなった。

やりたいことができるのは、酔って寝ている夢の中だけだった。

おれは、そのうち、自分の夢を自由に操作できるようになった。

見たい夢を見れるようになったんだ。

ベッドと酒さえあればそれでよくなった。

現実にやらなくても夢の中で何かをやれば、自分自身は満足だった。

そのまま死んでいくとしても満足しながら死ねただろう。

そんなころ、フィレーナとおまえに会った。

おれにとっての奴隷は、ただの人形……酒代を稼ぐために考える遊戯の脚本の駒にすぎなかった。

それが、人間に反抗の意志を現した。

奴隷が、帝国人に反抗するのは、帝国人が、もしこの世に神がいるとしたら神に反抗するに等しい。

おれは、フィレーナの眼の輝きを見たとき、眩しかった。

おれは、神など信じていない。
だが、フィレーナの目には、神に逆らうに等しい帝国への反抗が見えた。
これは、いささか衝撃だった。
おそらく死んだ演出家のバラバも同じ気持ちだったろう。
おれとあいつは、フィレーナへの興味をそれぞれ別の方法で表現した。
あいつは、加虐的にフィレーナをいじめることで……。
おれはバラバからフィレーナを守ることでな……だが、二人とも、気持ちは同じだったろう。
フィレーナの存在は、もはや、何も演出したくない演出家と、何も書きたくない作家に、少しだけやる気を起こさせたんだ。
そして、帝国への反抗が、おれにとっても、生きがいに結びつく気がした。
なにしろ相手は、帝国であり帝国の指導者たちだ。
戦ってみなければ、結果が分からない……というより、ほとんど成功しない戦いだ。
だが、万が一が起こるかもしれない。
いいも悪いもない。おれにとっては、帝国を倒すことが、この世に生きている証になるかもしれない。
だが、それをすると、結局、また元通り……軍でも、芸術でもないが……帝国打倒という名で集まってくる、金と権力と名声を欲しがる馬鹿で可哀そうなやつらと、つきあわなければならん……で、また、酒だ」

ネストは、リラをふっと見た。
すやすやと眠っていた。
「おじさんの子守歌……すこしは眠る役にたったかね……おれも眠くなった」
つまらない酔っ払いの戯言には、正直に退屈してくれるリラが、ネストには、たまらなく可愛く思えた。
ネストは酒による浅深いとしかいいようもない、だるい眠りに吸いこまれていった。
朝が来た。
それは、狼のフィレーナと鯱のフィレーナの戦いの前日だった。
くすんだ朝陽に照らされた墓地の静寂を、突然、帝国警察の装甲車の警報が破った。
さすがに黙り込んでいた墓場の人々の間にもどよめきが起こった。
墓場の入り口に数台の装甲車が停まり、武装した警察官が次々と降りてきた。
墓場を囲む鉄柵や、石垣の向こうにも次々に装甲車や、警備車が停まるのが見えた。
墓場の人々に逃げ場はなかった。
目を覚ましたリラはネストに言った。
「いよいよみたいね……」
それから、昨日のことを少しだけ思いだして聞いた。
「お酒、飲むのにも、いろいろ考えて大変そうだけど……言ってること、分かんないけど……
それもみんなこれでたぶん、おしまいになるわ。結局、何が言いたかったのかなあ……私、馬

鹿だからさ……簡単じゃないと分かんなくって……」
　ネストは、最後に残った酒を胃の底に流し込んで言った。
「早い話が、酒を旨いと思って飲んだことはないってことだよ」
「ふ～ん……美味しいと思えなくてかわいそう……もう、お酒も飲めなくなるのに……私としては……よかったよ」
　ネストの顔をまじまじと見て、そう言った。
「ん？」
「接待用奴隷のリラさんとしては、嫌な接待しないで、いろんな人に会えたし、好きな人もできたし……」
　それから、くすっと笑ったネストは、大きく伸びをした。
「歳の差は縮まらん。じいさんと呼ばれないうちにこうなってよかったよ。だが、おまえさんには、おばさんと呼ばれるみじめさを味わってもらうよ」
「え？」
「おまえは生きるのさ」
　装甲車の拡声器が、墓場に呼び掛けを始めた。
「墓場にいるデラシーナの諸君……君たちは完全に包囲されている。もはや、逃げる術は残されていない」
　リラは拡声器の声をかき消すように明るく言った。

「乾杯しましょう」
リラは、ネスト用の三級酒とは別に買っておいた最高級の酒、エンペリアル・ベスト・スペシャル・セレクトの小瓶を懐から出した。
ネストは、自分の酒の大瓶と見比べ苦笑した。
「ほう、そんな高い酒を……ちとずるいな」
「同じ値段以上、飲んだくせに……私は量より質なの……でもさ、わたしゃ、お酒の味なんて分かんない。お高いからおいしいってわけでもないのよね。なんか、人間の帝国人と奴隷の差と同じみたい」
「人間はそうかもしれんが、酒に限って高いやつはそれなりにいい。旨いとは思わんが、二日酔いが少ない」
「そっかな？……いいわ。まだ残っているから、少し上げます」
「ありがたくいただこう」
ネストはわざとらしく深々と頭を下げた。
リラは、ネストの持っている酒瓶の蓋に、自分の酒を入れた。
「じゃあ……最後の乾杯」
ネストが答えた。
「リラのこれからに……」
リラは酒の小瓶を持つ手を止めた。

「これから？……これからなんてないわ」

ネストは一気に酒瓶の蓋の酒を飲んでから言った。

「そうかな？　おまえはまだ若い。先はまだまだいろいろあるさ」

ネストは、残り少ない自分の酒をあおり飲んだ。

……おっさん……よく言うよ。もう、私たち、逃げ場はないのよ……最後のお別れぐらいしらふでいてほしいのよね……

ネストは、そんなリラの耳元に酒臭い息を吹きかけて囁いた。

「おまえは、南部海岸地方のフィレーナのもとに行くんだ」

「え？」

ネストは、携帯通信電算機の部品入れの中から腕時計のようなものを取りだした。

「途中、おまえに食べ物や水の世話をしてくれそうな反乱地下組織『ラ・グランデ』の面々の名が記憶されている。きつい旅になるだろうが、なんとしてでもフィレーナのもとに辿りつけ……なあに、おまえが、南部海岸地方に着くころには、連中の戦いも決着がついているはずだ。もちろん、狼のフィレーナの勝ちでな……」

「でも、どうやって、ここから抜け出すの？」

「帝国警察の狙いは、『フィエーブ』だ。おれが出ていけば済む」

「そ……そんな簡単には……」

「いかないだろうな……しかし、ここにいるデラシーナは、みんな、追いつめられている。今

は静かだが、人間追いつめられると、ちょっとした火花で爆発する……火花ぐらいは作れるさ」
「でも、おじさんは……」
「『フィエーブ』は死にはしない。まただれかが始める。それが、おれか、別のだれかかは、帝国次第だね……」
「え?……」
「楽しかった……酒の他で見つけたひさしぶりの楽しさだった。リラ、おまえを見ているとな……」
そのとき、装甲車の拡声器の呼び掛けが聞こえた。
「墓場の諸君……われわれの絨緞捜査は、反乱情報誌『フィエーブ』の発行者の逮捕にある。すみやかに出頭すれば、他の反乱暴徒ならびに犯罪者の処分は後に見あわせることになる。あくまで、帝国上層のお考えは、『フィエーブ』の逮捕だ。屍を望んではいない。無駄な犠牲は、帝国上層のもっとも嫌われるものだ。『フィエーブ』の面々、すみやかに出てくれば、命は保証するばかりでなく、ここに追い込まれたデラシーナの諸君の安全も、帝国警察が保証する」
ネストは、リラに微笑した。
「さあ、お呼びだ」
「おじさん待って! わたしも行く!」
ネストは、ゆっくりと首を振った。

「おまえのお守りが必要なのは、今度はフィレーナだよ」

そして、黙っていろと、人差し指を一本立ててリラの唇に触れて合図した。

手に持った空の酒瓶を置くと、ネストは立ち上がった。

「『フィエーブ』はここにいる！」

墓場のすべての目が、ネストに注がれた。

……あいつは……

ラズルは、呆然とネストを見つめた。

そして、その足元にリラが坐っているのにすぐ気がついた。

……あいつが、『フィエーブ』の発行人？……するとあの娘は……

行き場のない虚無感に打ちのめされていたラズルに、わずかずつ得体の知れぬ気力が湧いてきた。

税務庁の役人だったとはいえ、反乱軍の情報の要ともいえる『フィエーブ』の名を知らぬはずがなかった。

『フィエーブ』と関わりを持つ女と、奇妙というにはラズルにとって残酷すぎる出会いだったが、繋がってしまったのだ。

今、何もないラズルにとって、『フィエーブ』は、生きようという意志を持つには、強力な餌に思えた。

あの娘に繋がっているかぎり、今、帝国をかすかではあるが、揺らしている全帝国に広がっ

た反乱と関わり合いを持てるのだ。
ラズルは、リラを見逃すまいと、坐ったまま人がきをかきわけて、目だたぬように少しずつ近づいていった。
立ちあがったネストは、腰を下ろしている群衆の間をゆっくりと、墓地の出口に向かって降りていった。
「待て！　『フィエーブ』はたった一人なのか？」
拡声器の声は、あまりの意外さにいささかうろたえていた。
ネストは、手に持った携帯通信電算機を掲げて、普通の音量で答えた。
装甲車の集音機が声を拾いあげ、拡声器で増幅して墓場にネストの声を流した。
「驚くには当たらない。携帯通信電算機さえあれば、『フィエーブ』編集発行など、一人で簡単にできる。警察諸君に見つからずにここまで活動できたのも、一人ゆえの身軽さがあるからだ」
しかし、装甲車の中の指揮官は、信じていなかった。
「あの男、自分一人の犠牲で、味方を救う気だろうが、そうはいかん。あの男を逮捕後に、墓場のデラシーナを、一人ずつ拷問に掛けて吐かせるのだ」
副指揮官が、ぽかんと口を開けた。
「一人ずつ？　何千人いるか見当もつきませんぞ」
「今まで、『フィエーブ』からわれわれの受けた被害を考えてみろ。爆弾テロや暴動の起こる

たびに、市民から対処が遅いと中傷を受け、辞任させられた首都警察長官の数は十指に余る。しかも、爆破された警察駐在所は二百三十四……」

「二百三十五件です」

副指揮官が訂正した。

「そう、二百三十五……しかし、逮捕、または屍体を確認できた暴徒はわずか三万人足らず……。

……それもこれも『フィエーブ』が、情報を流し、反乱暴動を扇動していたからだ。自白に追いつめるために何十日かかろうとかまわん。拷問による屍体がいくつでてもかまわん。しょせん、だれが死のうが知ったことのないデラシーナだ。ここまで、追いつめて、一人だけの逮捕で満足できるか？」

「ええ……」

副指揮官はうなずいた。

「できませんな」

ネストの声が、装甲車の集音機に聞こえてくる。

「これだけの目撃者がいる。警察もいたずらな殺戮はしまい。この逮捕……警察は確かにおれの命を保証したのだからな。おれ一人を捕まえて、あとのデラシーナを無事に解散させろ」

「なめた口をききやがって！」

指揮官が吐き捨てるように言った。

「だが、あいつの言うのも確かです。これだけの目があるのです。われわれは、あの男はおろか、墓場の連中にすら何もできないでしょう」

副指揮官は、指揮官にゆがんだ笑みを見せた。

指揮官が悩めば、副指揮官は、何となく嬉しくなる。

帝国内の省庁では、常識的な反応だった。

装甲車の最後に、次々に、報道庁の中継車が停まる。

放送員が、集音機で実況中継を始めた。

「たった一人であります。帝国人民を恐怖に陥れた反乱暴徒の耳と目になった『フィエーブ』は、たった一人の模様です。たった一人の人間を、過去三年間追いつづけて、手掛かりのひとつも得られなかった首都警察の責任は、重大なものがあります」

おそらく、首都全域の電影放送で、この様子は中継されているだろう。

「勝手なことを言いやがって！」

指揮官は、こぶしを握りしめた。

数千の人の群れの間を投降していくネストの姿は、まるで、芝居の花道を行く主役のようですらあった。

だが、剣を構える一般警察官たちの胸は指揮官以上に煮えくり返っていた。

……こいつのために、たった一人のこいつのために、家族や、同僚が殺傷され、そのうえに、逮捕できなかったおれたちの責任をうんぬんされるなんて……

……今、硝子剣のグリップを強く握りしめさえすれば、白熱光がほとばしり出て、あいつは蒸発する。……だれか……だれか……だれでもいいんだ……命令違反を犯して、こいつを地上から消し去るやつはいないのか……

一方、墓場のデラシーナたちの中にも、武器を握りしめている者が何人もいる。

町中では、『フィエーブ』も何もかかわりなく、血に飢えた獣のように無差別に襲いかかってきた警官隊だ。

『フィエーブ』だと名のる男を、たった一人だけ逮捕して、引き下がるだろうか？ ついでに、どうせ、ゴミのようなデラシーナだ。紛れこんでいる反乱暴徒の残党もろとも抹殺するには、これほどいい機会はないはずだ。

ネストの一歩一歩に、両者の緊張は高まっていった。

……もういい……だれもあいつをやらないならおれが消してやる……警察官の何人かが、そう決し、剣のグリップに力を入れようとしたとき……

朝日の中を光るなにかが飛んできた。

そして、鈍い音をたててネストの胸に突きたった。

「うっ」

それは、硝子矢だった。

ネストは、低いうめき声をあげひざまずいた。

続いて、その背中に次々に硝子矢が叩き込まれた。

その数は十本を越えていた。
横たわったネストの身体は、針の衣を着たようだった。
時間が凍った。
警察官は、立ちすくみ、坐っていたデラシーナの群衆は、立ちかけて中腰になったまま動かなかった。
リラは見た。
ネストの崩（くず）れ落ちる姿を……。
リラは声ひとつあげずに、空を見上げた。
空が何色なのか、雲があるのか、分からなかった。
涙で何も見えなかった。
だれかが叫んだ。
「救急車を！……」
その声がまさに合図となった。
「よくもわれわれの『フィエーブ』を！」
いきなり群衆の中から立ち上がった反乱暴徒の生き残りらしい男が、警官隊に白熱光線（ホワイトレイ）を乱射した。命中した先で、さらに細かく弾（はじ）け飛ぶ散弾光だった。
たちまち、数人の警察官が倒された。
ただちに応戦（おうせん）が始まった。

警察官は、男の周囲に、無差別に水平射撃した。
悲鳴と怒号、そして蒸発する人体の湯気……。
その向こうから、新たに武器を抜いた群衆が、光線を発射した。
武器を持っていない群衆は、警察官にむしゃぶりついて剣をもぎとった。
「暴動です。今、目の前に展開するのは地獄です。首都ボーのメガデラシーナ地区の墓地は、まさにめったに見ることのできない惨劇の墓場です」
中継車の屋根の上で、熱狂して放送している報道員の頭も、次の瞬間、流れ光線で蒸発していた。
リラは、倒れているはずのネストを捜して、暴れ廻る群衆をかきわけ、前に出ようとした。
だが、そこで見たものは、ネストの屍体を運び込んだ救急車が、群衆はおろか、警察官まで引き倒して走り去る後ろ姿だった。
呆然と救急車を見送るリラのまわりでは、群衆が光線で溶け、剣で両断され、屍体の山が築かれていく。
「ここで死ぬ気か！」
いきなり、リラの手が引っ張られた。
今いたところが、白熱光で弾け飛んだ。
「放して！　放してよう！」
もがくリラのほっぺたが、張り飛ばされる。

我に返ったリラの前にラズルが立っている。

「おまえにはやられっぱなしだが、今は、死んでほしくない、ついてこい！」

いやもおうもない。

リラを引きずるようにして、ラズルは駈け出した。

ラズルは、一台の装甲車に向け、硝子手榴弾を投げつけた。

爆発、炎上する装甲車に、群衆の目が行った。

「逃げるならこっちだ！」

ラズルが叫んだ。

群衆は、我先に炎上する装甲車の方向へ殺到した。

ラズルは、群衆に持っている全部の手榴弾を手渡した。

装甲車の方向で、次々に爆発音がした。

警官隊は、当然爆発音の方向へ向かった。

だが、武装しているとはいえ、墓場に追いこまれたデラシーナの数は、圧倒的に多い。

それが、死にもの狂いで向かってくるのだ。

しかも、こうも警官隊といりまじっての乱戦ともなると、白熱光線を下手に撃つと、味方の警官を撃ちかねない。

群衆の何人かは、装甲車を奪って逃走しようとした。

警備車の数台も奪われた。

白熱光を浴びて蒸発しながら街路に出て、自走車燃料補給所につっこみ炎上する車もいた。

炎は飛び火し、いたるところに火災を巻き起こす。

暴動は、あっという間に、墓場の外に広がった。

メガデラシーナは、酒中毒と薬中毒の巣だ。

炎と乱闘を見ると、訳もなく浮かれだす者もいる。

どさくさにまぎれ、酒屋や薬屋を襲撃する者も出る。

いつの間にか、暴動は、メガデラシーナ全域に広がっていた。

もはや、首都警察の手には負えない規模にあった。

「軍隊の出動を……」

指揮官は、帝国軍に要請した。

だが、帝国軍の回答は冷たかった。

「メガデラシーナの暴動は、放送庁によって全都に中継されていた。この期に、首都周辺に反乱決起も予想される。

帝国軍首都駐留部隊は、その対処とメガデラシーナ地区から暴動が他地区に広がらぬよう、警戒することに専念する。今回の暴動の責任は、首都警察の不手際にあり、独自の解決を望む」

その答えを受けとった数分後、指揮官は、装甲車の中で、暴動はともかく自分に対する解決をとった。

「あの矢を射ったのは、いったいだれなのだ？」

……とつぶやきながら自決したのだ。

副指揮官は、すぐに後を引き継ぎ、警官隊に最小の犠牲で、暴動を収める手段に出た。

副指揮官、いや、現指揮官は、メガデラシーナが接する首都外へ続く門を開けた。

そして、メガデラシーナの警官隊の全員を、隣接するブキーガナ地区側に集結させ、暴徒に白熱光を一斉射撃(いっせいしゃげき)しながら門に向かって前進させた。

門が閉じていれば、死にもの狂いの抵抗もしようが、逃げ場がある以上、自然と、暴徒たちは門の外に漏(も)れ出していった。

暴徒たちを首都外に追いだした指揮官は、門を固く閉ざした。

一度出た暴徒たちを二度と首都に入れる気はなかった。

指揮官は、全都の警察に、各地区の首都城門の警備を厳重にせよとの通達を行った。

首都の外は何もない。

やがて、暴徒たちは、飢え死にするか地方に流れていくしかない。

地方都市とて、城門を固く守り、簡単には彼らを入れないだろう。

そうなれば、彼らは、反乱集団に加わるしかない。

都市外の反乱集団は、帝国軍の仕事だ。

それに、あの矢で射られた男の他に、『フィエーブ』の面々がいたとしても、今は、門の外だ。

この捜査の指揮を突然執られた者としては、上々のできといえた。

事実、首都警察は、この指揮官の措置を高く評価し、警察庁の五人いる副総監の一人に任命した。

帝国上層も、この人事に何も口を挟まなかった。

彼は、上層の思ったとおりに動いたのだ。

ネストの屍体を乗せた救急車は、デビス帝国中枢総合病院に入っていった。

ネストの心臓は止まっていた。

だが、白熱光線と違って矢で射られた身体は、消滅していなかったし、頭には一本の矢も受けていなかった。

＊

メガデラシーナから吐きだされた暴徒の中に、リラとラズルはいた。

「さて、これからどうするかだが……『フィエーブ』の片割れのことだ。当然行くあてはあるんだろうな」

肩で荒い息をしながら、ラズルが言った。

走りづめだったし、顎の骨を数日前にリラに蹴り折られた病み上がりのラズルには、今日の暴動は、いささか運動量が過ぎていた。

そのときだった。

近くにいた男が、ラズルの顔をまじまじと見てから声を掛けた。

「あんただ！　あんたが爆弾で、おれたちを助けてくれたんだね」
「え……？」
「そうだ。そうだ！」
「この人だ」
暴徒たちが集まってきた。
「おれたちは、行くあてがねえ……お願いだ。おれたちの指導者になってください」
「おれが、指導者？」
ラズルは、ぽかんと口を開けた。
「あんたのほかに人はいねえ」
「そうだ！　そうだ！」
暴徒たちは、ラズルを取りかこんだ。
「このおれが、指導者だとさ……」
後ろにいるはずのリラを振り返ったとき、もうそこにリラはいなかった。
ラズルは、溜め息をついた。
……今度の別れ際だけは、蹴られずに済んだわけか……
ラズルは、ふっと微笑んだ。
だが、リラを追うのを諦めたわけではなかった。
今までより以上に、リラを追うつもりだった。

ラズルにとって、リラは、屈辱を与えられた小娘以上の存在になっていた。

＊

リラは、時計に表示された地図だけをあてにして、南部海岸地方を目指し歩いていた。
ネストを思うと涙が出た。
だが、泣いてはいられなかった。
リラは、唇を噛みしめると、涙を拭いた。
「ネストおじさん、私、きっとフィレーナと会ってみせるからね」
南部海岸地方までは、女の足では、半年以上の距離だった。
そして、考えてみれば、地方都市ドラで、フィレーナと会ってから、初めてのひとりぼっちの旅だった。

＊

その夜……。
南部海岸地方……。
フィレーナは、野営地の自分の天幕の中に一人でいた。
明日は、いよいよ、鯱のフィレーナと戦う日だ。
バンニルは、作戦の準備だと言って、戦闘能力のある人員の半数を率い三日前から別の場所に移動し、ここにはいない。
バンニルは勝てると言ったが、それは、どうでもよかった。

バンニルの作戦が、いかに互いの犠牲者を少なく、戦いを収めるか、それだけが気になっていた。

ず～っと考えていた、自分が何かというのも、結論など出はしなかった。

そして、相変わらず、墓の前から動こうとしない百九十二番目の女のこと……。

「明日で、別れになるかもしれない……よかったら、もう一度、話したい。ギャッピーは、天幕から遠ざけておくからさ……」

そうは言ってみたものの、百九十二番目の女が来る気配はない。

嵐のフィレーナと一緒にいたいという気持ちを、これ以上、邪魔するわけにもいかない。

……結局、あの人の気持ちは、分からずじまいで、終わってしまうのかもしれないな……

フィレーナは、ベッドにあお向けになって、天井を見つめた。

そのときだった。

天幕の外に人の気配がした。

フィレーナは起き上がって声を掛けた。

「だれ？」

「私です」

スパタが、天幕の入り口から、するりと入り込んできた。

「最後の夜になるかもしれません……私の気持ちを伝えにきました」

「あんたの気持ち？……」

「ええ、私の本当の気持ちです」
スパタは、卓の上に、二つのグラスと酒の瓶を置いた。
「僕は、酒は飲めないよ」
「今夜は必要かもしれません」
「どういうこと？」
スパタは、フィレーナを見つめた。
そして、ふ～っと溜め息をついた。
スパタは、グラスの一つに酒をそそぐと一気に飲んだ。
……なにを考えているんだ？　この人は……
フィレーナは呆気にとられていた。
「もう、二度と言わないつもりです……これから言うことは……」
「だから何を……」
「好きだった……おまえを……」
「え……」
フィレーナは息を飲んだ。
「いや、愛していると言ったほうがいい」
「愛している？……」
フィレーナはスパタを見かえした。

「そう、この気持ちはどうしようもない。たとえ、おまえが、指導者フィレーナだとしても、これだけは、言っておきたかった。フィレーナ、私はおまえを愛している」
……愛している？……
フィレーナの肩がかすかに震えた。
フィレーナが生まれて初めて言われた言葉だった。
いいやつ……でもなく、好き……でもなく、愛している。
フィレーナはうつむいた。
どう答えていいか分からない。
「馬鹿な……僕は……おとこ……」
「女だ……」
スパタが静かに言った。
「え？……」
フィレーナはスパタを見つめかえした。
「知っていた……ずっと前から……」
スパタの目はフィレーナに優しく見えた。
「ずっと……？」
「ああ……私も海で水を浴びるのが好きだ……」
フィレーナは素直に納得した。

「そう……」
……注意していたのに、見られたのか。……僕の身体を……
ふっと、そう思っただけだった。
それ以上に、愛しているという一言に動揺していた。
「いつ？……」
「もう半年以上前だ……」
「なぜ……黙って……」
「なぜ？　なぜ黙っていたかって？……　分からないのか？……」
スパタは、酒をグラスに注いだ。
「これ以上は、飲まないと、とても話せない」
あおり飲むと、フィレーナに背を向けてしばらくうつむいていた。
……ここまでは、うまくいっている……最後の夜……狼犬もいない……おまけにバンニルも出掛けている……
これ以上のお膳立てはない。
この機会を逃したら二度とこの集団の中で、おれの地位は戻ってこない。
スパタはじっと黙っていた。
「スパタ？……どうしたの？」
フィレーナの近づいてくる気配がした。

それもおどおどとした足取りで……。
スパタは間合いを計って振り返った。
目の前に、フィレーナがいた。
いきなり振り返ったスパタに、フィレーナは立ちすくんで目を見開いていた。
「愛しているからだ……愛しているから黙っていた。そして、一緒にいたいからこうしてついてきた」
……一緒にいたい……
フィレーナはうつむくよりほかなかった。
スパタは、酒をまたグラスに注いだ。
「最後まで黙っていようとしたが、無理だった。最後の最後まで自分の気持ちを偽っているのがつらかった。明日は、お互い、死ぬかもしれぬ身だ。だから、とうとう、ここへ来てしまった」
スパタは、酒を少しだけ飲むと、フィレーナに差しだした。
「僕は飲めない」
「別れになるかもしれぬ酒だ」
そう言ってから溜め息をつき、肩を落としてうなずいた。
「そうか……おれが口をつけたグラスでは嫌か……そうだろうな……」
スパタは、もう一つのグラスに酒を注ごうとした。

「いや、そうじゃない……うん……いただくよ」
フィレーナは、スパタの手から、飲みかけのグラスを取ると、一気に飲んだ。
「えっ？」
甘かった。
だが、次の瞬間、目の前のスパタが揺れて見えた。
身体中の血が、頭に駈け昇った気がした。
頭が、熱くけだるかった。
酒の飲めないフィレーナに、その酒は、強すぎた。
いや、普通の酒飲みにも強い、アルコールが七十度を越える酒だった。
酒が、胃の中を駈け廻るのがやっと収まると、フィレーナは大きく息を吐いた。
立っているのがやっとだった。
グラスを持っていた手が、力なく垂れた。
「フィレーナ……」
スパタの手の平が優しくフィレーナの頰に触れた。
「え？」
フィレーナはそうつぶやくのがやっとだった。
「愛していた。ずっと」
フィレーナは、いつの間にか、スパタの腕の中にいた。

まるで、揺り籠の中のようだった。
「一緒にいたい。今夜は……」
フィレーナの耳元でスパタが囁いた。
「せめて……最後の夜だけは、おまえを抱いていたい」
フィレーナの手から、グラスが落ちた。

その音を、天幕を見下ろす丘の上で、狼犬のギャッピーは確かに聞いた。
しかし、そこに伏せたまま、動こうとはしなかった。
ギャッピーはスパタが天幕に入っていったのも知っていた。
だが、人間のメスとオスのすることを邪魔するような不粋な狼犬ではなかった。
ただ、さみしそうに、かすかに鼻を鳴らしただけだった。

フィレーナは自分の鼓動が、耳に聞こえた気がした。
フィレーナの心臓の揺れは、酒のせいだけではなかった。
……愛している？　僕を……抱きたい？　僕を……最後の夜に……
どう答えていいか分からなかった。
……でも、この人は、僕を女だと知っていたのに、だれにもそれを告げはしなかった。そして、いろいろな戦いを、一緒にやってきた。僕の下の地位に甘んじて……普通の男は、女の指

図を受けるのは嫌いなはずだ。それなのに……なぜ……
「愛している……フィレーナ」
スパタは強くフィレーナを抱きしめた。
むせかえるような男の匂いがした。
だが、アルコールの匂いと酔いが重なって、それほど嫌な気もしなかった。
……そんなに愛してくれているならいいのかも……
フィレーナは、ますますだるくなる頭の中で思った。
……愛してくれている人が望むなら、それもいいのかも……
「いいよ……」
フィレーナはぽつんとそう言った。
「愛している」
スパタはそう言うと、ふわりとフィレーナを抱き上げ、そのままベッドの上に崩れるように横になった。
スパタの唇が、近づいてくる。
思わず顔を背けてしまう。
「愛している……いいんだろ……？」
……いいけど……でも……
スパタの唇が近づくたびに、やっぱり、顔を背けてしまう。

スパタの手がフィレーナの胸をやさしく探った。
肩の止め具がいつの間にかはずされ、胸を隠していた布が、ゆるやかに剝ぎとられていく。
フィレーナはぼんやりと天井を見上げていた。
あらわにされた胸がなんとなく寒い。
スパタはフィレーナの身体を思うようにまさぐりながら、妙な気分だった。
フィレーナは、ほとんど反応を示さない。
これじゃあ、まるで材木を抱いている気分だ。
材木ほどではないにしろ、フィレーナの気分は、まな板に乗せられた魚のような感じだった。
……どうにでもしてくれというような、いなおった気持ちだ。
これが、抱かれるということか、なんか変だな……。
居ごこちが悪かった。
いつの間にか、フィレーナが身につけていたものは、みんな取り去られていた。
だが、フィレーナの身体は同じだった。
スパタを抱きかえそうともしない。
ただ横たわっているだけだ。
身体こそほてっているが、それは酒のせいにすぎなかった。
……なんなんだ、こいつは……
スパタは、焦りいらだった。

これでは、抱いたところで、フィレーナの心を奪ったことにならない。
スパタはフィレーナにつぶやいた。
「嫌なのか？」
「いや、いいよ。好きにして……」
フィレーナは答えた。
……好きにして？……これが、男にそんなことを言う女の態度か！……
抱かれるときも、指導者気取りを忘れないつもりなのか？
スパタは、急に残酷な気分になった。
……それなら、いやでも感じさせてやる……
スパタは、いきなりフィレーナの胸を潰さんばかりに握った。
「うっ」
フィレーナの口から呻き声が洩れた。
……どうやら感じることは感じるらしいな……
スパタは、フィレーナの両手を押さえつけ、胸を吸いはじめた。
それも、けっして、やさしくはなかった。
まるでむさぼるように加虐的だった。
「ちょっと……これ……」
思わず、フィレーナはつぶやいた。

だが、両手を押さえつけられたフィレーナは、覆い被さっているスパタの下で動けない。
「これって……これって……」
天井を見詰めていたフィレーナの目とスパタの目があった。
フィレーナの背筋に寒けが走った。
スパタの目には、優しさのかけらもなかった。
だからといって、闘技士が戦うときに見せる殺意のこもった光もない。
だが、この目は、どこかで見たことがある。
いや、昔、いつも見ていた目だ。
そうだ、これは、まさか……。
フィレーナは、呆然となった。
思い当たったのだ。スパタの目に……。
それは、闘技場で見る観客たちの目そのままだった。
見せ物として戦い死んでいく闘技士を、見下ろしたさげすみの目だ。
そして、闘技場に倒れ、苦しみのたうちまわる闘技士をいたぶって笑う、残忍ないじめの目だ。……男は、愛している女を抱くとき、こんな目をするのか？……
……こんな目のときの男に、女は、抱かれたいと思うのか……
フィレーナはやるせない気持ちでつぶやいた。
「スパタ……どうして……」

「もちろん、愛しているからさ」
「嘘だ……」
フィレーナはもがいた。
けれど動けない。
闘技士フィレーナは女としても小柄なほうで、いくら俊敏であっても、押さえつけられたら普通の娘の力しかない。
だが、戦いで、こんな格好に押さえこまれたこともなかった。
相手の身体に触れることなどほとんどなく勝ってきた。
しかし、両手のふさがれた今は、両足の間を割って入ってこようとするスパタの身体を避けるのが精一杯だった。
リラなら、こんなとき、効果的な男への防御法を知っていた。
事実、その方法で、ラズルから逃げたこともあった。
女であることが知れるのを恐れないなら、悲鳴を上げる手もあるかもしれない。
けれども、男として、闘技士として、女であることを教わらず生きてきたフィレーナに、そんな女らしい防御など思いつくはずがなかった。
もがくフィレーナを押さえつけながら、スパタは溜め息をついた。
こうなったら、無理やりでも凌辱してやる。
屈服させてやる。

それで駄目なら……そう、この女は、自分を犯したおれを許しはしまい。
ならば……。
スパタは、ベッドの枕元に立てかけてあったフィレーナの剣を、足で蹴り飛ばした。
フィレーナの指が剣に届き握られれば、もう、ただの小娘ではないのを、スパタは充分すぎるほど知っていた。
フィレーナの剣は、天幕の中央に弾き飛ばされて落ちた。
ベッドの上のフィレーナがどうあがいても届きそうになかった。
小型剣は、さらに遠い卓の上にある。
それを見届けてから、スパタは、あお向けのフィレーナの上に馬乗りになった。
フィレーナの両手を押さえつけていた手を放した。
そして、フィレーナの首をしめた。
「え？」
フィレーナは信じられなかった。
今までのスパタが見せていたのは、フィレーナの身体を欲しがる行為だった。
たとえその片隅にフィレーナを辱しめようという気持ちがあったとしてもだ。
だが、今のスパタは、フィレーナを殺そうとしている。
殺す気がなくても、少なくとも気絶させて自分の思いどおりにしようとしている。
……なぜだ？……

そのつぶやきは声にならなかった。
スパタの指が、ぐいぐいと首に食い込んでくる。
ベッドの上に武器はなく、身体は裸だ。
もがいても、スパタの身体はびくともしない。
いや、もがけばもがくほど、スパタの指は、首に食い込んでいく。
身体から力が抜けていく。
しだいに気が遠くなっていく。
闘技用語で落ちるというやつだ。
なんだかだんだん、視界に見えていたものが遠くなっていく。
そのときだった。
フィレーナの見つめる天幕がかすかに揺れた。
ガリッという音が、目の前でするといきなり、顔にべとべとしたものが吹きかかった。
何も見えなくなった。
身体の上に重くのしかかったスパタの身体が軽くなった。
そして、スパタの身体が、ベッドから床に崩れ落ちる音がした。
フィレーナはまず目の前を手の甲でぬぐった。
べとべとしたもの、それは、血だった。
フィレーナの身体も、ベッドの上も血まみれだった。

床の上のスパタの半分にちぎれた首からは、まだ血が流れだしていた。

締められていた首筋を押さえながらベッドから降りたフィレーナは、腰が抜けたようにしゃがみ込んだ。

そしてつぶやいた。

「ありがとう……ギャッピー……」

ギャッピーは、何事もなかったようにベッドの横に伏せて、スパタの屍体を見つめていた。

スパタの頸骨を一撃で食いちぎったのは、いうまでもなく、ギャッピーだった。

ギャッピーは、床に落ちたフィレーナの剣の音を聞き逃さなかった。

他のどんな音がしても、聞かぬふりをするつもりだった。

事実、ベッドの上の、スパタとフィレーナの動きの音は耳に届いていた。

だが、フィレーナが、自分の剣を放り投げることなどありえなかった。

フィレーナの剣の落ちる音は、ギャッピーを天幕に走らせた。

その音は、フィレーナの身の異変を意味していた。

ギャッピーは、天幕に向けて走った。

あとは簡単だった。

ギャッピーの餌食が、一人増えただけのことだ。

フィレーナは、ギャッピーを見つめてつぶやいた。

「でも……僕は……僕がちゃんと断っていれば……この人を……」

フィレーナは、卓の上にあった酒瓶を床に叩きつけた。
「フィレーナ、何事だ！　おれのそばを駈け抜けて犬が飛びこんでいったが……」
天幕が開いた。
兵士たちの配置を終えたバンニルが帰ってきたのだ。
バンニルは、天幕の中を見て、後ろ手で素早く幕を閉めた。
「これは……」
バンニルは、スパタの屍体を見て呻くようにつぶやいた。
フィレーナは、血まみれの身体をバンニルに隠そうともせず、ぼんやりと言った。
「バンニルさん、僕は女なんだ」
「見れば分かる」
バンニルは怒ったように答えた。
「ここで何が起こったかも、おおよそのことはな……」
それから、大きく溜め息をついた。
「明日は戦いだ。だれにも気づかれるな。女だってことも、スパタのこともな。今は、兵の動揺がいちばん困る。屍体の始末はおれがする。いい用心棒がいるんだから、今日は、外で、どこかの木の上にでも登って寝るんだな」
それだけ言って出ていこうとした。
「バンニルさん、僕はこれから……」

フィレーナが聞いた。
バンニルは機嫌悪そうに振り返りもせず、だが、優しい口調で言った。
「これからも狼のフィレーナは狼のフィレーナだ。われわれの指導者に変わりはない。だが、早く身体を洗っておくんだな。せめて、女なら身体は奇麗なほうがいいだろう」
バンニルは困惑したような舌打ちを残して、天幕の外に出ていった。
……仕方ない……という口癖は、さすがに出なかった。
バンニルは、嵐のフィレーナを討ったときの信頼できる部下に天幕を片づけさせ、スパタを墓に埋めた。
スパタは、すでに配置した兵の指揮を執るために出かけたことにした。
開戦までのわずかな時間をごまかせれば、充分だった。
なにしろ、スパタはおろか、バンニルもフィレーナの命もどうなるか分からない戦いが起こるはずだと、少なくともバンニル以外は、思い込んでいた。
海で、スパタの血を洗い流したフィレーナは、悄然として、嵐のフィレーナの墓の前を通り過ぎようとした。
百九十二番目の女は、相変わらず、墓の前にいた。
フィレーナは、百九十二番目の女に話しかけた。
「やっぱり、分からない……あんたにどういう訳があろうと、男とそうまで一緒にいたい気持ち……」

だが、女は、何も答えなかった。
「なにが、そうまで、あんたをそうさせているの？……」
フィレーナは、思わず女の肩を揺すった。
女の身体は、崩れ落ちた。
女は死んでいた。
なにも食べずに力つきた餓死だった。
「こんなことって……」
……こんな訳の分からない死に方って……
……僕が、この人と同じ女だなんて……
だが、鯱のフィレーナとの戦いの前に、二人の人間が死んだことは確かだった。

第5章
惨劇の中の灯

その日がやってきた。
ラーナピ海岸は、風もなく海はおだやかだった。
朝靄（あさもや）の中を、鯱のフィレーナの大軍が現れた。
非戦闘員を中央にして、外側を戦闘員で固めた、鯱のフィレーナの全体そっくりそのままだった。
当たり前といえば当たり前だが、非戦闘員を守るためには、それが常識的な方法だった。
オルカも、ナスカも、専門は闘技場の闘技試合（バトルショー）だ。
考えてみれば、総勢が四万近い相手とは戦ったことはなかった。
だが、オルカもナスカもこの方法が、最善だと思った。
数対数の勝負で、明らかに鯱のフィレーナが優（まさ）っていた。
しかも、相手がすでに知りあった狼（おおかみ）のフィレーナだ。
……あの男は、勝つにしても奇麗（きれい）に勝ちたがるだろう。
あの男との一騎討（いっきう）ちはあっても、暗殺隊を放つような卑怯（ひきょう）な真似（まね）はしないだろう。

正面からぶつかるもよし、奇襲戦法で来るもよし、いずれにしろ、非戦闘員を中央に守りつつ、強固な壁に等しい訓練された兵で分厚く取り囲んだ鯱のフィレーナの大軍は、そのまま動く要塞だった。

迎え撃つ狼のフィレーナは、非戦闘部隊と戦闘部隊を完全に分けていた。

しかも非戦闘員も細かく分かれ、一つ一つは家族単位といえるほど小さかった。

そして、この日の朝、蜘蛛の子を散らすように、それぞれ、勝手な方向へ歩きだしていた。

合言葉は、鯱のフィレーナに勝ったときにまた会おう。

それだけだった。

非戦闘員は、あっという間に、ラーナピ海岸から広い地域に拡散していった。

まるで解散して逃げてしまったようだった。

その日の午前中には、狼のフィレーナから、非戦闘員の数は消えていた。

非戦闘員といっても、頭数である。

一挙に、五分の一ほどに減った狼のフィレーナ軍に、反乱の行方を見定めに現れた他の反乱集団は、狐にでも騙されたような気分になった。

さらにラーナピ海岸に集まった狼のフィレーナの戦闘員の実態を知ったら、愕然としただろう。ラーナピにいるのは戦闘員のさらに半分、四千人しかいなかったのだ。

あとはどこにいるのか見当もつかなかった。

だが、戦いを逃げたわけでもなかった。

すでに、午前中から、戦いは始まっていた。
狼のフィレーナのラーナピの戦闘員は、一部隊、わずか十人だった。
そして、四百の部隊が、まるで、巨人のまわりを飛ぶ蜂のようにちくちくと、鯱のフィレーナの表面に白熱光戦を浴びせかけては、一目散に逃げていった。
岩場の多いラーナピ海岸では、隠れ場所が多く、逃げていく小隊を追いかけても、追いつめられなかった。
かえって、岩場の陰から狙撃され、追っ手の被害のほうが多いぐらいだった。
少なくとも数十回の戦闘が起こった後、自然、鯱のフィレーナの集団は、見通しの悪い海岸線の岩場を避け、内陸の平野部に移動せざるをえなくなった。
ラーナピ海岸の外れ、そこは、サフィラ斜傾平野の草原が広がっていた。
ラサ草原……。
ラサはこの土地の古語で雑草を意味する。
草原とはいえ、痩せた土地で、雑草しか生えないという意味があった。
有史以前は、大密林地帯だったというが、無計画な伐採の結果、不毛の地になり、今、ここには、生き物の隠れる森も林も岩場さえなかった。
鯱のフィレーナは、ラサ草原の中央に陣を敷いた。
案の定、狼のフィレーナの小隊の攻撃はぴたりと止んだ。
軽装備の白熱光線の届く範囲に行くのは、敵の的になるようなものだった。

結局、鯱のフィレーナは、ラーナピ海岸を海岸線から内陸まで横断したようなもので、その間に、三十数名の兵士を失っただけの戦いだった。

おそらく、狼のフィレーナの死者は、五人もいなかっただろう。

「なんという、不様な戦いだ。これが、大軍対大軍の戦闘といえるのか？」

オルカは、吐き捨てるように言った。

「おそらく、われわれがラーナピ海岸の岩場にいるかぎり、あの戦闘方式で、少しずつこちらの外壁を守る戦闘集団を減らしていくつもりだったんでしょう。やがて、いつかは、外壁は消え、中の非戦闘員が顔を出す」

ナスカが答えた。

「そんな悠長なことをやっていたら、いつまで戦いが続くと思っているんだ。狼のフィレーナという若いの、そんなに気の長いやつとも思えなかったがな」

「もう一つの考え方としては、われわれを、この地に移動させたかったのかもしれません。われわれが、ここから動かなければ、いずれ、大軍だけに食料がなくなる」

「それも、また、気の長い話だ。だとしたら、この戦いは無しだな。おれは、他の小反乱軍を平定に廻る。狼のフィレーナ以外のすべてを吸収してから、狼のフィレーナを追いつめる。戦いが、後先になるだけで、結局、戦わなければならない羽目になる」

「こちらが、これ以上大きくなれば、不利になるのは、あちらです。むざむざそんなことをするでしょうか？」

「しかし、現実はこれだ」
「敵には、バンニルがいます。これには何かがあります」

一方、フィレーナも敵のオルカと同じ思いだった。
草原の真ん中に陣取る鯱のフィレーナを、海岸の小高い岩場の上から見つめながらフィレーナは、バンニルに言った。
「これじゃあ、こっちは、逃げているのと同じことにならないかい？」
「今のままではね。だが、これからが本番さ。帝国はこの戦いをどう見るかな？」
「帝国？」
「そう、もともと、反乱軍の敵は、帝国じゃなかったのかね？　問題は、本来の敵がどう出るかだ」
バンニルは待っていた。
南部海岸地方の駐留軍が出てくることを……。

＊

要塞都市デビには、鯱のフィレーナの軍の動きが、刻々、伝わってきていた。
海の苦手な帝国人にとって、ラーナピ海岸での両軍の動向は、詳しくは、属国人や、奴隷（クレチア）の間諜（スパイ）の情報に頼るしかない。
まして、ラーナピ海岸で、反乱軍同士の大規模な戦争が行われると知らされた地元民は、巻（ま）

き添えを恐れ避難している。
情報はきわめて少なかった。
デビの上層部がとらえた戦いの全貌はこうだ。
四万数千の鯱のフィレーナの大軍は、ラーナピ海岸に突入……一方、海岸に近接していた狼のフィレーナは姿を消した。
ラーナピ海岸では、いくつかの戦闘があったものと思われる。
鯱のフィレーナは、ラーナピ海岸を横断、内陸部に入った。
ラサ草原はわれわれ要塞都市をも数日で攻撃できる範囲内である。
さらに重要なのは、南部海岸地方から、南デビス山岳地帯をへて南中部高原地方および、首都ボーに続く幹線道路のほとんどが、ラサ草原から攻撃範囲内に入るということだった。
鯱のフィレーナが、やる気になれば、南部海岸地方の心臓、要塞都市デビに通ずる動脈に王手をかけることもできるのだ。
……そして、いまだに、四万近かった狼のフィレーナの存在は不明だった。
「ラーナピ海岸で、何かが起こったと見るのが妥当でしょうな」
ブロム守備司令官は地図を見ながら長老たちに言った。
「ラサ草原に出てきた、鯱のフィレーナの詳しい情報は？」
「あの周辺は、他の小反乱軍も集結していて、非常に治安が悪いのが現在の状況です。詳しい情報は、早急には望めません」

そのときだった。
ラサ草原に近い、幹線道路のほとんどに、警戒警報表示が点滅した。
さらに、要塞都市デビ方向に点在する町や村、帝国軍駐留基地に光がともった。
反乱軍の攻撃を受けた報せだった。
それは、半月形にラサ草原を取りまいて、明らかに切っ先をデビに向けていた。
「これでラーナピ海岸で何が起きたか分かりましたな」
ブロム守備司令官は決めつけるように言った。
「おそらく、ラーナピ海岸で、鯱のフィレーナと狼のフィレーナは戦い、どちらかが勝ち、合併吸収が行われ、ほぼ倍の勢力に膨れあがったものと見られます。でなければ、ラサ草原を中心に、こんなに広範囲の総攻撃は不可能です。攻撃の最終目標はここ、要塞都市デビ……南部海岸地方の駐留軍、全軍を結集して対処する事態と考えます。ただし、『竜』の暴走に巻き込まれないようにですがね」
「だが、あまりのろのろしていては、帝国中枢上層は、われわれの態度を怪しみますぞ」
「もちろん、現地付近の駐留軍は、ただちに出動です。が、健闘しても、三日と持ちますまい。その間に、南部海岸地方全土の駐留軍を結集させたとすれば、現地の駐留軍も、浮かばれるというものです」
ブロム守備司令官はひやりと笑った。
長老の一人が溜め息をついた。

「たとえ、超爆弾（ウルボム）の巻き添えを食ってもかね」
「事故はつきものです。まして、これは、戦争なのですから」
ブロムのあまりにそっけない言葉に長老の一人は、吐き捨てるようにつぶやいた。
「最近の帝国人にはついていけん。とくに、優秀種という輩（やから）にはな！」

*

同じ情報が、鯱のフィレーナのもとにも届いた。
さらに、近隣の帝国駐屯軍（ちゅうとんぐん）が、鯱のフィレーナ攻撃に出撃したとの報が、追い討ちを掛けた。
「いったいだれが帝国を攻撃したんだ」
オルカが呻（うめ）くように言った。
「やつら以外に考えられません」
「狼のフィレーナ」
「それとバンニル……やつらは、われわれを帝国軍と戦う先兵にしようとしている」
バンニルは、半分に分けた戦闘集団の一つを、帝国攻撃に使ったのだ。
それは、撃って逃げろの、成果を期待しないゲリラ攻撃だった。
だが、南部海岸地方の帝国駐留軍を慌（あわ）てさせるには充分だった。
そして、それは、あたかも、狼のフィレーナを吸収した鯱（オルカ）のフィレーナの仕業のように見せたのだった。
幻の反乱軍に脅（おび）えた帝国軍は、必ず、鯱のフィレーナの本陣を攻撃してくる。

しかも、ラサ草原は、帝国軍兵士が、何の支障もなく戦える、内陸なのだ。
オルカは、苦笑した。
「……で、われわれが帝国との戦いに弱ったところをぐさりか……」
「ええ……見事ですね」
ナスカが人事のように言った。
「感動のない男だなあ……だれがやったにしろ、誉めるべきものは誉めてやれ。どうせ、狼のフィレーナとの共通の敵は、帝国なのだからな」
「やれやれ、指揮者になるつもりが兵隊にされてしまったんですねえ……われわれは……」
「かまわん……どっちが指揮しようと。だがな、地方の駐留軍ごときで弱るようなオルカではない。千人……いや、五百でいい、精鋭を集めろ。ただちに、帝国軍を迎撃に向かう。他は、持ち場を離れるな」
「私もご一緒しますよ」
ナスカが、中型剣を肩に掛けながら言った。
「ここにいたほうが怪我せんぞ」
「私は、いつも最先鋒ですよ……そう決めたんだ」
「勝手にしろ……」
オルカは、自慢の超大型剣をかついで指揮所から飛びだしていった。

＊

岩場の上からは、鯱のフィレーナの陣から飛び出していくオルカの精鋭部隊の高速武装車の群れが、高感度遠視鏡で、よく見てとれた。
「これが、バンニルさんの策だったわけ……」
フィレーナがつぶやいた。
「気にいらないようだね」
バンニルが聞いた。
「こっちの犠牲は、少ないかもしれないけど、鯱のフィレーナはどうなるの？」
「本来は味方同士のわれわれと戦って命を落とすより、帝国と戦ったほうがましだろう。違うか？」
「死んだら同じさ」
フィレーナはぶっきらぼうに答えた。
だが、その視線が、ラサ草原の一点に釘づけされた。
「あれは？」
「ん？」
フィレーナは、バンニルには何も答えず、遠視鏡の感度を上げた。
草原を、迷彩色で見にくいが、確かに、小さな箱のようなものが動いている。
それも……二つ……。
……あれは……

フィレーナには似た形のものを見た覚えがあった。
色は違うが、フィレーナの育った奴隷養成所を一瞬に蒸発させたやつにそっくりだった。
……「竜」……
あのときは黒かったが、もし、あのときと同じ力を持っているとしたら……。
「竜」の行く手には、鯱のフィレーナの陣がある。
「いけない！　止せ！」
フィレーナは岩場から身を躍らせた。
「フィレーナ、どこへ！」
叫ぶバンニルに、フィレーナは草原を指さした。
「あれを、あれを停めるんだ！」
だが遠視鏡で見た「竜」は、実際にははるかに遠くにいた。
そして、鯱のフィレーナの陣も遠かった。
それでも、フィレーナは全力で走った。
間に合うはずがとうていないのに、わめきながら走った。
「逃げろ！　みんな逃げるんだ！」
だが、「竜」は火を吐いた。
二台同時にだった。
フィレーナは絶叫した。

「止せ！」

鯱のフィレーナの陣に火球が二つ、みるみる大きくなっていった。

フィレーナの髪が、爆風に悲しくなびいた。

その日以来、ラサ草原の鯱のフィレーナの陣のあった場所は、雑草さえ生えない文字通りの不毛の地になった。

＊

首都ボー……。

中枢総合病院の地下……。

黒い悪魔の南部海岸地方担当上層部は、新爆弾の発射を命じた。

黒い悪魔の一人が、舌打ちした。

「『超爆弾』は、一発でよかったのに……」

「ええ、同時に撃つとはね……彼らも追いつめられてたんでしょう。気持ちが」

「もったいない……二発も……」

「いえ、新爆弾が成功すれば、もう無用のものです。使えるうちに使っておかなければもったいない」

小型超爆弾を積んだ二台の「竜」は発射した次の瞬間、白熱迫撃砲で蒸発した。

もちろん黒い悪魔の情報部員が処分したのだ。

処分されたのは、デビに住む人々も同じだった。

ない声がした。

「超爆弾の使用は、帝国人のみならず、生物に対する冒瀆です。これは、帝国による処分に値します」

なんの弁解もする暇がなかった。

日の光を浴び光っていた要塞は、一瞬、暗闇に閉ざされた。

まるで、めまいを起こして、ほんの少し目を閉じただけの感じだった。

次の瞬間、要塞都市デビは、何事もなく佇んでいた。

何も破壊されたものはなかった。

だが、いるはずの二十五万人の帝国人と奴隷が消えていた。

ほんのわずかの例外を残して……。

例外は、帝国の優秀種と呼ばれる人々だった。

だが、その人々も身体が残り、心臓が動いているだけで、あとは、死んだも同然だった。

脳が破壊されていた。

いわゆる脳死状態だった。

帝国上層の帝国機密にまた一つ、記録が増えた。

新爆弾、いまだ未完成……優秀種にまで影響を与えてしまう。選択部分の微調整が必要……。

帝国の開発している新爆弾とは、特定の種を狙い撃ちして消滅させる爆弾だった。

上層部は、デビに住む優秀種だけを選んで生かすつもりだった。

だが、身体は消滅こそしないものの、結果は、脳死だった。

ブロム守備司令官もその一人だった。

ブロムは、長老たちの服だけが残っている会議室の中で、よだれを垂らして脳死していた。

やがて、ゆっくりとその心臓も鼓動を停めた。

＊

背後に巨大な火球を見たオルカは、ただちに帝国軍の迎撃を止め、陣に戻った。

だが、そこに見たのは地獄だった。

生き残っているのは、陣の外側を固めていた戦闘員の一部だけだった。

しかも、そのほとんどが大なり小なり、火傷を負っている。

オルカがいちばん死傷者を出したくなかった非戦闘員は、超爆弾が、陣の中央で二発も炸裂したため、ほとんど蒸発して消えていた。

オルカは、ぼんやりと立ちすくむだけだった。

そこへ、フィレーナが、ラーナピ海岸に待機していた四千の兵を連れて現れた。

苦しんでいる怪我人がいれば、できるだけ助けたかった。

けれど、そんなきれいごとを言える現場ではなかった。

中央付近の人々は、蒸発して影も形もなかったが、悲惨なのは、周辺だった。

爆風に手足をもがれ、潰された、炎に焼けこげた肉塊が、いたるところに、無雑作に転がっている。

助けを求めるでもない、絶望的な呻きが、瀕死の人々の、もう人間の身体にはとても見えない肉の塊から洩れでて、耳を圧さんばかりだ。

……これが犠牲者を少なくしようとした戦いの結果なのか……

フィレーナはつっ立っているオルカを見つけた。

「生きていたんだ……」

フィレーナが、つぶやくように、声を出した。

せめて生きていたことを喜ぶ？……それにしては、無残すぎる犠牲だ。

オルカはそれには答えず、ぼそりと言った。

「これも、おまえたちの計算のうちか？」

フィレーナは何も言えなかった。

パンニルが進みでた。

「もちろん、こんなものを帝国が使うとは思っていなかった。人間に対して、禁じられている兵器のはずだ」

「おれたちは、帝国にとっては、人間じゃあないってことさ。フィレーナ、おまえんとこは、何人やられた？」

「だれも……運がよかった……」

「それじゃあ勝負にならないな。おれたちの敗けだ。だが、おれたちは、こうなった以上、最後まで戦うよ。もう、失って恐いものはなにもない。残っているのは、戦闘員だけだ。やつらも、守るための家族さえなくしてしまった。こりゃあ戦って最後を決めるしかない」

「オルカさんは、僕らに敗けたわけじゃない。だれもが見ていた。あの兵器のためだ……僕も勝ったとは思えない。もう戦いは止そう。敵は、帝国だよ」

「そうはいかん……死んだやつらへの示しがつかん。おれが指揮して、ここに連れてきたんだからな。生き残った連中もそのつもりだよ……」

ナスカが後を続けた。

「済まんが、屍体のあるやつらの葬式をしてやりたい。一日だけ時間をくれ……、おれたちは、ここから動かん。一日経ったら、いつかかってきてもいい」

「どうしてもやる気なんだね……」

「ああ」

オルカは、うなずいた。

「また犠牲が増えるよ。お互いに」

「おれたちは生きていく気はない」

「そう」

フィレーナはうなずいた。

けれど、もうこれ以上の殺し合いは御免だった。

「分かった……勝負しよう。今すぐにだ。僕とあんたの一騎討ち……。勝ったほうが、両軍の指導者になる」

「なぜ一騎討ちだ？」

オルカは、フィレーナを意外そうに見据えた。

「数では、圧倒的におまえが有利なんだぞ」

「数で勝っても自慢にならない。こうなったのは、帝国のせいだからね。帝国のおかげで勝った反乱軍なんて、そんなのあり？」

「勝ちは勝ちだろう？」

「大きな数で、小さい数を踏み潰すのかい？　でも小さいほうだって死に物狂いだろ。しかもみんなは、死ぬ気でいる。こちらの被害も少なくなくなる。もう、僕は、これ以上の死人はたくさんだ」

フィレーナは剣を抜いた。

「僕とあんたで決着をつけるのが、いちばん犠牲の少ないやり方だ」

フィレーナは、味方に叫んだ。

「だれも手を出すな。そして、勝ったほうを指導者にするんだ」

そして、オルカの兵にも叫んだ。

「いいね、これが狼と鯱の戦いの最後だ。恨みっこなしだよ」

一同は、敵と味方の差なく、オルカとフィレーナを取り囲んだ。

「どうしてもやる気なら仕方あるまい」
オルカは超大型剣に手をやった。
「勝てる勝負をこんなふうにして、その甘さが、おまえの命取りだ。化けてでるなよ！」
オルカは、剣を振りかざし、フィレーナに飛びかかっていった。
物凄い剣圧が降りかかってきた。
フィレーナの中型剣でオルカの剣を真正面から受けるのは、不可能だった。
いや、触れることすら危険だった。
剣圧の巻き起こす空気の波が、フィレーナの剣を吹き飛ばしてしまうだろう。
フィレーナは一定の距離を置いて、オルカの隙を窺うことにした。
だが、大型剣を振りまわす大男にありがちな隙が、オルカにはまったくなかった。
隙のないまま時間が経っていく。
一時間……。
二時間……。
オルカは、フィレーナが今まで戦っただれよりも強かった。
いつまで経っても睨みあいは終わりそうになかった。
夕闇が迫ってくる。
三時間……。
四時間……。

こうなったら、体力と気力の勝負だった。

月明かりに、二本の剣だけが、光って立っている。

五時間……。

六時間……。

フィレーナはふと夜空を見上げた。

降るような星だ。

フィレーナは妙に優しい気分になった。

人の命が、星になるという話を聞いたことがある。

いったい僕は、あの星のいくつを創(つく)ったんだろう……。

創る気ないのに創っちゃった。

最初に僕が創った星は……。

確か、最初の闘技試合(バトルショー)……僕と四人の重量鎧(ヘビーアーマー)の勝ち抜き乱戦(バトル・ロイヤル)。

少なくともその中の一人、槍(やり)を持った重量鎧は、僕が創った星だよな。

あの人、なんて名前だったんだろう……。

次から次へと、死んでいった顔が浮かんでは消える。

一人だけ、浮かんでこない顔……リトル・ラリテニアのラリス。

でも、白熱光線(ホワイトレイ)に消えていった影だけは覚えている。しっかりと……。

僕はたぶん本当に好きだったんだと思う。ラリスを……あれが愛ならいいんだけど……。

スパタだってね、僕に会わなきゃ死ななかったよね。

狼犬を連れている女なんて、そういるはずないよね。

僕とバンニルとオルカが重なって、今日の爆発が起きたのかもしれない。

そして、百九十二番目の女……。

もう、いっぱいですよね……。

これ以上増えると、夜が明るくなって昼になり、みんな困るんじゃないかな……。

それに、僕、星になるんなら、昼間じゃなくて、暗い、やっぱり夜がいいなあ……。

今のうちなら夜に間に合いそうですね……。

八時間が経っていた。

早く星になりたいという気がしてきた。

フィレーナは弾けるように走りだした。

そして、隙のない相手の頭上に思いっきり跳躍して、剣を振り下ろした。

鋭い硝子音が響いた。

オルカの突き上げた大型剣の空気の嵐に、宙のフィレーナは翻弄された。

嵐の中で、もう一度、剣に衝撃が加わった。

しっかり握ったはずの剣が、いとも簡単に弾け飛んだ。

そして、次の瞬間、地面に叩きつけられていた。

生きている自分が不思議だった。

フィレーナの喉元に、オルカの剣がつきつけられた。

「おれの勝ちだな。おまえがかかってこなければ、いつまで続いたか分からん試合だった。フィレーナ、おまえ、まだ、闘技士病が治ってないと見えるな」

「病人だから情けをかけるっての？……安楽死ってのも情けだよ」

……そう……もういいのに……どうして、生かしてくれちゃうんだ……

フィレーナは、涙が込み上げてくるのを必死でこらえていた。

「おれの剣は、ずいぶん人の血を吸ってきたが、自分から死にたがるやつの血は、気味が悪くて御免だとさ」

オルカはニヤリと笑って、剣を引いた。

「これで、おまえの軍は、おれのものになるのか……文句はないな？」

フィレーナは、うなずいた。

「ああ、約束だからね。みんなもいいね？」

バンニルは肩をすくめ、仕方ないというそぶりを見せた。

「では、指導者を決めるのも、このおれってことだね」

「指導者を決める？……どういうこと？」

オルカは、胸を張って両軍の前に進みでた。

「指導者はこの男だ」

オルカはフィレーナを指さした。

「戦闘は、おれが一番だ。
だが、指導者は、両軍の人命を助けようとしたおまえのほうが向いている。人には、それぞれの器ってもんがあるさ」
フィレーナはぼんやりとつぶやいた。
「器？　僕が、指導者の器？」
「皆もきっとそう思っているだろう」
両軍の兵から、ドッと歓声が上がった。
そして、バンニルもうなずいた。
「私が、戦略家の器であるように、確かにあんたは、指導者の器だ」
バンニルはフィレーナが女であることを一言も言わなかった。
オルカが、耳元で囁いた。
「やらなきゃならないことができれば……病気も治るさ」
超爆弾の犠牲者を埋葬し、野営地に戻ったフィレーナのもとへ、次々に非戦闘員が戻ってきた。
続いて、帝国に見せかけのゲリラ戦を展開した半数の戦闘員も、ほとんど無事に戻ってきた。
さらに、息を飲んで推移を見詰めていた小反乱軍も、こぞって合併を申しでていた。

＊

今、フィレーナを指導者とする反乱軍は、バンニルの戦略と、オルカの勇猛な戦いにより、

南部海岸地方を牛耳る大反乱軍になった。

翌日から、狼のフィレーナは、要塞都市デビに向け、進軍を開始した。

後ろ楯であり要である要塞都市デビが機能しない南部海岸地方の駐留軍は、狼のフィレーナの敵ではなかった。

たちまちのうちに、南部海岸地方のほとんどが、狼のフィレーナのもとにくだった。

だが、無抵抗に開け放された、要塞都市デビの内部は、戦慄すべき状況だった。

二十五万いたという人間が、まるで、いままでそこにいたと思われる状態で消えている。

空の衣服が、空の靴が、まるで坐っているように椅子の上に投げだされている。

屍体は数体見つかったが、どの屍体にも外傷がない。

フィレーナは、ただちにデビを封鎖し、だれも近寄れないようにした。

かつて、首都ボーの神殿で見た、おぞましい実験は、まだ今も続けられているに違いない。

女の胎内……生命の誕生に関する何かの実験……よくは分からないが、それに関連するような、いやな予感が、要塞都市に匂っている気がしたのだ。

帝国は、いったい何をしようとしているのか？

不安材料は、とりあえず、遠ざけておくことにしたのだ。

＊

……フィロセラ……僕はとうとう戻ってきたよ……故郷に……

フィレーナは、今、故郷フィロセラのあった土地に立っていた。

そこには、何もなかった。

ただ、硬化剤(こうかざい)で、コンクリートのように固められた、砂浜があるだけだった。

ただの平面だけが、どこまでも広がっているだけだ。

その硬質な平面は、その上に何を建てても拒絶されそうな硬さがあった。

それに、今、フィロセラを復興するのが、何の意味もないことを、フィレーナはよく知っていた。

あの「竜」の持っていた爆弾の数発で、この広さの国など蒸発してしまうだろう。

そして、要塞都市デビの不気味な異変……二十五万の人間が消えてしまったこと……。

どれもこれもが、反乱軍が集まりすぎると、根こそぎやられる危険性を物語っていた。

しかし、いったい、帝国は何を考えているのだろう。

南部海岸地方は、今、フィレーナの支配下にあった。

だが、どんな大軍であろうと、帝国が本気に制圧すれば、できないはずはなかった。

それを、帝国はなぜしないのか？

あの、帝国の首都ボーの神殿でのこと、そして刀鍛冶(かたなかじ)のウトの話が、今も鮮烈(せんれつ)にフィレーナの頭から離れない。

この反乱は、帝国にとって巨大な戦争ゲームにすぎない。

フィレーナは、ゲームの駒にすぎない。

フィレーナに、夢にうなされる夜が続いた。

確かに「狼のフィレーナ」の軍は大きい。
だが、帝国全域から見れば、他にはもっと巨大な反乱軍がいくつかあるのだ。
そのそれぞれが「フィレーナ」の名を騙り、他者の統合を狙っている。
このばらばらな反乱が、全体としてまとまるには、いったいどれほどの時間と、どれほどの戦いと、どれほどの味方の血が流されるというのだろう。
それは、まさに、帝国全域という闘技場で、帝国人民の娯楽として供せられる闘技試合の巨大版にすぎないではないか。
「フィレーナ」という名は、確かに反乱のシンボルにはなりえた。
だが、帝国への反乱という一つの共通の目的に対しては、軽い気がしてならなかった。
すべての反乱軍に対しての思想的なテーマともいえる、共通の目的が必要な気がしてならなかった。
……僕は……僕は……どうすればいいんだ！　このまま狼のフィレーナの指導者を続けていても、何ひとつ帝国と反乱軍の関係は変わらない。
いよいよ反乱軍が邪魔になれば、ゲームを投げて駒ごとゲーム盤を引っくりかえして勝ってしまう手を、帝国は握っているのだ。
爆弾ひとつで、すべて片がついてしまう。
……ほんとうに、僕はどうすればいいんだ……
フィレーナは、握りこぶしを、フィロセラの砂浜に叩きつけた。

だが、硬質化した砂浜は、握りこぶしを簡単にはねかえし、何も答えてはくれなかった。
フィロセラの浜に夜が来た。
フィロセラは夜も表情を変えない。
無機質な、浜辺に三つの月が、鈍い光を投げかけるだけだ。
だが、そのときだった。
フィレーナは、妙なものを見た。
それは、青白い、光の筋のようなものだった。
海に突き出した、フィロセラの堤防の先端の上空にいきなり現れたのだ。
……え？……
光の筋は二度三度、明滅した。
あきらかに何かの合図のようだった。
三つの月の一つを雲が隠した。
光の筋は、一瞬のうちに消えた。
フィレーナは、堤防の先端に行き、光の走ってきた方向を見た。
月に照らされた、海しか見えない。
……あれは……？　あっちは海……なにもないはずだ。
そのときだった……。
雲が月から離れ、三つの月が、夜空に並んで見えた。

海の向こうが、きらりと光った。

一瞬のうちに、フィレーナの頭上を青白い光の帯が流れた。

真下から見ると、まさに薄絹(うすぎぬ)でできた帯のようだった。

……なんてやさしい青さなんだ！……

フィレーナは、うっとりと頭上を見あげた。

手を伸ばせば届きそうなところだ。

フィレーナは、光に触れてみたくなった。

フィレーナは、力いっぱい跳躍した。

届かなかった。

でも、もうちょっとだ。

フィレーナは、剣を抜いた。

この剣なら届くかもしれない。

フィレーナは、剣を頭上に高くかかげた。

フィレーナの剣は、いうまでもなく、ボーの刀鍛冶(かたなかじ)ウトから貰(もら)った、汚濁(おだく)した海水を浄化(じょうか)する光を放つ、フィレーナと同じ名前……海の魂(たましい)という意味の名を持つ硝子剣(グラスソード)だ。

フィレーナは、渾身(こんしん)の力を込めて跳躍した。

剣の先が届いた。

そのとたんだった。

光の帯から洩れでるように、青白い光芒が、剣を伝わった。
剣身全体から青白い光の渦が噴出し、フィレーナの身体を包んだ。
「あ……」
フィレーナの口から溜め息が洩れた。
いままでの溜め息ではなかった。
光は、やさしさに満ち、胸から零れ落ちそうな豊かな暖かさを感じさせ、それが声になって洩れたのだ。
けれど、一瞬だった。
また、月が雲に隠れて、光の帯が消えた。
剣から溢れ出した光の渦も消えた。
……今のは何だったんだ?……
フィレーナは、雲から月の出るのを待った。
やがて、月は雲から顔をだしたが、もう、光の帯は現れなかった。
……もう一度見せてくれ……
フィレーナは、光の出てきた方向を見つめた。
空にある月のひとつずつにも、胸の中で頼んでみた。
フィレーナは、一晩中、堤防の先端に立って、光の帯を待った。
だが、その夜は、もう何も起こらなかった。

月は沈み、朝陽が海の向こうから昇ってきた。
フィレーナは、朝陽を恨めしそうに見つめた。
そしてもう一度、光の出てきたほうに、目をやった。
「あ……」
フィレーナの目はその方向に、釘づけになった。
朝陽は、夜、見えなかったものを見せてくれた。
フィレーナが海だと思っていたそこに、遠く細長く霞んだ陸地が見えたのだ。
サフィラ斜傾平野から突きだした岬だった。
……そうか、あそこは……
その岬をフィレーナはよく知っていた。
だが、フィロセラの堤防の先端から見て、その位置にあるとは思わなかった。
それは、フィレーナが、一人ぼっちを感じるとき、いつも海を見つめに通った岬だった。
そこに何があるか……。
フィレーナは、堤防を駈けた。
早くそこに行きたかった。
フィレーナは知っていた。
そこに灯台のあることを……。
今は、何のために立っているかもほとんど忘れられ朽ち果てた灯台が、フィレーナとともに、

海を見つめていたことを……。

灯台……それは、かつて海洋民族にフィホーパー（海の希望）と呼ばれていた……。

＊

灯台はいつものように静かに立っていた。

フィレーナは、朽ち果てぼろぼろになった灯台の表面をよじ登って、投光台の上に立った。

そこからは、目をこらすと海の向こうにかすかにフィレーナの海岸が見通せた。

あの光の帯が、ここから出たのは、確かなようだった。

けれど、そこには、風雨にさらされ泥まみれになった、皿のようなものが、四枚、斜めに立てかけられているだけだ。

フィレーナは、泥を剣で、こそぎ落としてみた。

泥の中から、硝子の表面が顔をだした。

硝子？……硝子の皿……いや！……これは、硝子鏡玉だ！

フィレーナは、夢中で皿をみがいた。

だが、長い間の風雨でこびりついた泥は、なかなか取れてくれなかった。

夜が来ても、みがきあげられたのは、一枚だけだった。

……たった一枚か……

フィレーナは、いささか疲れて、投光台の縁にしゃがみ込んだ。

やがて、月が雲間から顔を出した。

……え？……

フィレーナは、みがきあげた一枚の硝子鏡玉を見た。

満月の光が、その鏡玉（レンズ）を照らすと、ちろちろとした光の線が浮かび上がり、フィレーナのしゃがみ込んでいる向かい側の縁に当たった。

フィレーナは、光のあたりを、注意深く触ってみた。

何かの引っかかりを感じた。

フィレーナは、指で、そこを押してみた。

……あっ……

フィレーナの立っていたあたりの床が抜けた。

フィレーナの身体は、灯台の内部に吸い込まれていた。

空中で一回転したフィレーナは、難なく灯台の内部の床に足から着地した。

上を見ると、抜けた穴が、ぽっかり開いてみえる。

剣の出力を最小にして光らせると、灯台の内部が見てとれた。

フィレーナが落ちた穴までは、梯子（はしご）が伸びていて、出るのに苦労することはなさそうだ。

ということは、あの穴は、落とし穴のような、敵意に満ちたものではなく、単なる秘密の入り口だったのかもしれない。

いや、もしかしたら、内部にいた人の非常口だったと考えることもできた。

フィレーナは、注意深く、灯台の内部をうかがってみた。

中央に、祭壇のようなものがあり、そのまわりを、硝子の粉をまぶした板が囲んでいる。
祭壇の上には、煤がこびりついていて、そこで、何かが燃やされていたことを物語っていた。
おそらく、そこで燃やされた光が、板に反射され、上の硝子鏡玉で吸収屈折され、灯台の明かりになる仕組みらしいのは、フィレーナにも理解できた。
フィレーナがフィロセラの堤防で目にした光の帯は、ここで燃やされる光の代わりに、月の光を吸収屈折した硝子鏡玉が放ったものだろう。
だが、月の光の角度と硝子鏡玉の角度が一致するなど、めったにないに違いない。
しかも、硝子鏡玉は、泥まみれだった。
だからこそ、あの光が、柔らかい帯のようだったともいえるのだが、光とフィレーナの出会いが、偶然だとしたら、奇蹟といっていい確率の出会いだった。
だがフィレーナの気を引いたのは、その奇蹟よりも別のものだった。
それは、フィレーナの剣の青白い光に浮かび上がった壁画と文字だった。
「この絵は……」
壁画は、巨大だった。
無彩色の浮き彫りで、かなり形が単純化した壁画だったが、フィレーナには、覚えがあった。
いや、記憶があるような気がした。
遠い昔に……見たことがあるような気がした。
それは、風を受けた無数の帆をいっぱいに膨らませた五本帆柱の大帆船だった。

そして、その下に綴られた、今の帝国内で使われるはずのない文字と言葉……。
だが、フィレーナには読める文字……闘技指導員のゼナじいさんが、謎解き遊びのように教えてくれた言葉だった。
なぜこんなものを覚えなきゃなんないの？……と聞くフィレーナに、ゼナじいさんは、いつか役に立つかもしれない昔言葉と昔文字だ……としか答えてくれなかったが、それは、フィレーナの故郷フィロセラの言葉と文字だったのだ。
大帆船の壁画の文字は、こう書かれてあった。
〔この船を動かす者、それは海、大地、生きる物を生みだせし心ある者なり……〕
さらに……、
〔北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり。わが光、フィレーナによりそのありかを差ししめすであろう〕
とだけ、書かれてあった。
……フィレーナにより？……
フィレーナは、呆然とその文字を見つめた。
……この僕が？……どういうこと？……
だが、すぐにそれが、勘違いな気がして、苦笑した。
……フィレーナって名前は、海洋民族じゃあ、いちばんありふれた名前だ……僕のことであるはず……

でも……。
フィレーナはあることに気がついた。
フィレーナという名はありふれている。いろいろなものにつけられる。そして、僕の剣の名もフィレーナだった。
ボーの刀鍛冶ウトから貰ったフィロセラ王家の剣……。
フィレーナは、祭壇の上に彼女の剣「フィレーナ」を置いた。
剣の放つ青白い淡い光が、硝子の粉をまぶした板に反射して、上昇していく。
だが、上の鏡玉までは届かない。
フィレーナは、思い切って、剣の出力を最大に上げた。
もともと、フィレーナの剣の光は、汚濁した海水をもとの海水に復元はできるが、殺傷能力はない。
今まで、最大出力にしたことはないが、危険はないはずだった。
剣から、青白い光がほとばしり出た。
灯台の内部すべてが、光の渦に包まれた。
急上昇した光は、鏡玉に叩き込まれるように入っていった。
汚れていた鏡玉の泥がみるみる溶けていった。
フィレーナは、梯子を登って投光台に駈け上がった。
鏡玉から強烈な青い光が西へ向かって一直線に走っていた。

その光は、広大なサフィラ斜傾平野の上空を西へ突き抜けていた。
そして、その光を受けるように、地平線の西の果てでキラリと光る星のようなものが見えた。
さらに光るものは、灯台の光の方向を変え、今度は北に向かって、光の線をのばしていった。
そして、南デビス山岳地方の北西まで行って山陰の向こうに消えていた。
おそらく、西の果ての、灯台の光を受けて向きを変えさせたところからなら、その先が見えるはずだった。
そこが、壁に書かれた［北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり］の場所なのかもしれない。
フィレーナは、青い光の線をじっと見つめた。
やがて、剣の出力が弱まったのか、青い光の線はみるみるかすみ、消えていった。
「あ！　待って！」
フィレーナは思わず叫んだ。
だが、無情に、光は消えていった。
フィレーナの剣は、役目を終えたかのように、もう青白い光を放たなかった。
そして、フィレーナは、決めた。
フィレーナは、光の行方を目指し旅立つことにした。
今、自分にできることは、反乱軍の指導者であることより、今の状況を少しでも変えていく何かを見つけることだと思った。

人々をまとめ、反乱軍を安全に導くことなら、バンニルやオルカのほうが、才能があるし、人望もあると思った。

フィレーナは、狼のフィレーナをバンニルとオルカに託し、狼犬(ウルフドッグ)のギャッピーだけを連れて単身、北へ向かうことに決めた。

〔北の海、蒼き流れの源に、海の民の魂の拠り所あり〕

その場所を捜(さが)しに……。

フィレーナとギャッピーは歩きつづけた。

リラも、またそのとき、南部海岸地方にフィレーナがいると信じて、歩きつづけていた。

第5部　完


極北　未知の領域
E
S
北デビス山岳地帯
ドラ
山岳反乱
リトル・ラリテ
神女団巡礼コ
中部高原地方
大砂漠
西部海岸地方
首都ボー
汚潮海
南デビス山岳地帯
ルシベ
南部海岸地方
汚潮海域
デビス帝国軍事試験場
(旧フィロセラ)
世界変更線
極南　未知の領域
ドラゴニア大陸(伝説)
見渡せる限りの他、世界なく
見直せる限りの他、過去なし
人に見通せる限りの他、未来はない。

作者も驚いたあとがき

みなさん……びっくりなすったかも知れませんね。
そうです。これ「永遠のフィレーナ」第5巻なんですよね。
先日、フィレーナの4巻が登場して、あっという間の第5巻です。
4巻めが出るまで2年以上、お待たせした読者のみなさんへの、罪ほろぼし、といえば聞こえがいいのですが、早い話が、4巻と5巻ももとは、1冊でやるつもりのエピソードだったんですね。
ふるさとのフィロセラをとり戻し、南部海岸地方、最大の反乱軍を作るまでの話だったのですが、やはり人物たちの気持ちが、どんどん、膨らんで、倍の巻数が、必要になってしまったわけです。
さて、これからは、フィレーナやリラの旅が始まります。
ふるさとのフィロセラは、完全に破壊されて跡かたもありませんでした。
しかも、帝国は、その気になれば、フィレーナの軍など、一撃で消せる兵器を持っています。

フィレーナは、これから何をしたらいいのか。
くちはてた、灯台の向こうで、何が待っているのか？
そして、ネストは、本当に殺されたのか？
そうして、偶然、反乱軍にさせられて混乱してしまうラズル。
さまざまな人生を飲み込んで、フィレーナは、つづく予定です。
何やら、今回のあとがきは、予告編ふうになり、出来るだけ早めに続巻を、現実の小説にしたいと思っています。
待っててくださいますか？

1990・八月の熱い一日

首藤剛志

アニメージュ文庫

永遠(えいえん)のフィレーナ 5

薄望(はくぼう)への灯火(とうか)



首藤剛志(しゅどうたけし)

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。現在「アイドル天使　ようこそようこ」のシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美(たかだあけみ)

3月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」のキャラデザインを経て、現在「機動警察パトレイバー」(TV)のキャラデザインを務める。

1990年 8月31日初刷　　N-061
Printed in Japan

著　者　首藤剛志(しゅどうたけし)
発行者　荒井修(あらいおさむ)
〒105-55 東京都港区新橋 4—10— 1
発行所　株式会社　徳間書店
電　話　03(433)6231(大代)
振　替　東京 4 —44392番
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669637-6

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
永遠のフィレーナ 1 2 3 4
都立高校独立国 上 下
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト=高田明美
カバーデザイン=真野薫
カバー印刷=真生印刷(株)

徳間書店
アニメージュ文庫　定価390円(本体379円)
ISBN4-19-669637-6 C0174 P390E (0)

